

北 斗 市

当別川左岸遺跡

—高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査業務報告書—

平成26年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

北 斗 市

当別川左岸遺跡

—高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査業務報告書—

平成26年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター



調査風景



P-6 遺物出土状況



P-9 遺物出土状況

例 言

1. 本書は、国土交通省北海道開発局函館開発建設部による高規格幹線自動車道路函館江差自動車道建設事業工事に伴い、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成23・24年度に委託を受けて実施した、北斗市当別川左岸遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 報告内容は、平成23年度調査範囲1,816㎡、および平成24年度調査範囲2,442㎡、計4,256㎡の遺構と遺物である。
3. 調査は2か年とも第2調査部第2調査課が担当した。
4. 本書は、立川トマス、佐藤和雄、奥山さとみ、芝田直人（第1調査部第3調査課）が執筆し、文末に執筆者を示した。編集は立川が担当した。
5. 遺物の整理は、土器を佐藤・奥山、石器等を立川が担当した。
6. 現地調査での写真撮影は各担当者が、室内での写真撮影・整理は立川が担当した。
7. 調査報告終了後の出土遺物は、北斗市教育委員会で保管される。
8. 調査にあたっては、下記の諸機関および諸氏に御協力、御指導をいただいた。

国土交通省北海道開発局函館開発建設部、北斗市教育委員会、木古内町教育委員会、知内町郷土資料館、市立函館博物館、七飯町歴史館

安齋正人、石井淳平、大沼忠春、木元 豊、佐藤智雄、高橋和樹、高橋豊彦、竹田 聡、坪井陸美、時田太郎、福田裕二、森 靖裕、山田 央、横山英介 (五十音順・敬称略)

記号等の説明

1. 遺構の表記には以下の記号を用い、原則として確認順に番号を付けた。
H:住居跡 HF:住居にともなう焼土 HP:住居にともなう土坑・柱穴
P:土坑 TP:Tピット S:礫集中 Po:土器集中
2. 遺構図等には真北を示す方位印を付した。図の天方向は、N-45°-Eである。遺構平面図の「+」は調査区または小調査区ラインの交点で、傍らの名称記号は右下の調査区を表す。また、小黑丸とその下の数字およびセクションレベルは標高(単位m)である。
3. 掲載した遺構・遺物の図は基本的に以下の縮尺に統一した。ただし、遺構位置図、地形図、遺物出土状況図などは任意の縮尺であるため、各図にはスケールを付けてある。写真図版の土器・石器は、おおよそ1:2で掲載している。
遺構 1:40 復元土器 1:3 土器拓本 1:3
剥片石器 1:2 礫石器 1:3
4. 遺構の規模は、「長軸の上端×下端/短軸の上端×下端/確認面からの最大深」(単位m)で示している。
5. 土層の表記は、基本土層についてはローマ数字(I、II、III・・・)、遺構内の層序についてはアラビア数字(1、2、3・・・)を使用した。
6. 土層の色調は『新版標準土色帖26版』(小山・竹原2004)に準じた。
7. 火山灰は『北海道の火山灰』(北海道火山命名委員会1982)に準じ、以下の略号を用いた。
駒ヶ岳火山灰d層:Ko-d 白頭山-苫小牧火山灰:B-Tm
8. 遺物図右下の太ゴチックアラビア数字は掲載番号であり、これに後続する小文字アルファベット(a、b、c・・・)は同一個体を示す。
9. 復元土器の断面図上方に「▼」が付されている場合、正面図に「▼」が付されている部位の断面を表す。
10. 石器の大きさは、最大長・最大幅・最大厚(単位cm)で示した。破損しているものについては現存最大値を()で示した。
11. 石器の実測図中でたつき痕は「V-V」、すり痕は「|←→|」で範囲を示した。また、被熱部分および使用による光沢面はドットのスクリーントーンで示した。
12. 文中において「北埋調報」としているものは、公益財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書の略である。

目 次

口 絵

例 言

記号等の説明

目 次

挿図目次

表 目 次

図版目次

I 緒言

1 調査要項	1
2 調査にいたる経緯	1
3 調査の経過	3
4 調査結果の概要	4

II 遺跡の位置と環境

1 位置と環境	5
2 周辺の遺跡	5

III 調査の方法

1 調査範囲	7
2 土工	8
3 測量と記録	8
4 整理の方法	9
5 保管	10
6 遺跡の土層	11
7 遺物の分類	11

IV 遺構と遺構出土の遺物

1 概要	15
2 住居跡	15
3 土坑	22
4 Tピット	34
5 焼土	36
6 土器集中	37
7 礫集中	37

V 包含層出土の遺物

1 概要	42
------------	----

2 土器	42
3 石器等	64

V 自然科学的分析

一 覧 表

写真図版

引用参考文献

報告書抄録

挿 図 目 次

I 緒言

図 I-1 当別川左岸遺跡周辺の地形と調査範囲	2
図 I-2 当別川左岸遺跡年度別調査範囲	2

II 遺跡の位置と環境

図 II-1 遺跡の位置と周辺遺跡	5
図 II-2 周辺の遺跡	6

III 調査の方法

図 III-1 基本土層模式図	11
-----------------------	----

IV 遺構と遺構出土の遺物

図 IV-1 A地区遺構位置図	16
図 IV-2 B地区遺構位置図	16
図 IV-3 C地区遺構位置図	17
図 IV-4 H-1、P-11	18
図 IV-5 H-2・3	19
図 IV-6 H-4	21
図 IV-7 P-1・2・3・4	23
図 IV-8 P-5・6・7	25
図 IV-9 P-8・9・10	28
図 IV-10 P-11・12・13・14	29
図 IV-11 P-15・16・17	30
図 IV-12 P-18・19	33
図 IV-13 TP-1・2	35
図 IV-14 F-1・2・3・4・5・6、煙集中1・2	38
図 IV-15 遺構出土の土器	39
図 IV-16 遺構出土の石器(1)	40
図 IV-17 遺構出土の石器(2)	41

V 包含層出土の遺物

図 V-1 包含層出土の土器(1)	45
-------------------------	----

図V-2	包含層出土の土器(2)	46
図V-3	包含層出土の土器(3)	47
図V-4	包含層出土の土器(4)	48
図V-5	包含層出土の土器(5)	49
図V-6	包含層出土の土器(6)	50
図V-7	包含層出土の土器(7)	51
図V-8	包含層出土の土器(8)	52
図V-9	包含層出土の土器(9)	53
図V-10	包含層出土の土器(10)・土製品	54
図V-11	包含層遺物分布図(1)	55
図V-12	包含層遺物分布図(2)	56
図V-13	包含層遺物分布図(3)	57
図V-14	包含層遺物分布図(4)	58
図V-15	包含層遺物分布図(5)	59
図V-16	包含層遺物分布図(6)	60
図V-17	包含層遺物分布図(7)	61
図V-18	包含層遺物分布図(8)	62
図V-19	包含層遺物分布図(9)	63
図V-20	包含層出土の石器(1)	67
図V-21	包含層出土の石器(2)	68
図V-22	包含層出土の石器(3)	69
図V-23	包含層出土の石器(4)	70
図V-24	包含層出土の石器(5)	71
図V-25	包含層出土の石器(6)	72
図V-26	包含層出土の石器(7)	73
図V-27	包含層出土の石器(8)	74
図V-28	包含層出土の石器(9)	75
図V-29	包含層出土の石器(10)	76
図V-30	包含層出土の土・石製品	77

表 目 次

I 緒言

表I-1	当別川左岸遺跡 年度別検出遺構・遺物数一覧	4
表I-2	当別川左岸遺跡 年度別出土土器点数一覧	4
表I-3	当別川左岸遺跡 年度別出土石器等点数一覧	4

II 遺跡の位置と環境

表II-1	周辺の遺跡一覧	6
一覧表		
表1	当別川左岸遺跡 検出遺構規模一覧	81

表2	当別川左岸遺跡	住居跡出土遺物一覧	81
表3	当別川左岸遺跡	土坑出土遺物一覧	82
表4	当別川左岸遺跡	焼土出土遺物一覧	83
表5	当別川左岸遺跡	糞集中出土遺物一覧	83
表6	当別川左岸遺跡	土器集中出土遺物一覧	83
表7	当別川左岸遺跡	遺構出土掲載土器一覧	83
表8	当別川左岸遺跡	遺構出土掲載石器一覧	84
表9-1	当別川左岸遺跡	包含層出土掲載土器一覧 III群 a類	85
表9-2	当別川左岸遺跡	包含層出土掲載土器一覧 III群 b類	85
表9-3	当別川左岸遺跡	包含層出土掲載土器一覧 IV群 a類	86・87
表9-4	当別川左岸遺跡	包含層出土掲載土器一覧 IV群 b類	87
表9-5	当別川左岸遺跡	包含層出土掲載土器一覧 V群・土製品	87
表10	当別川左岸遺跡	包含層出土掲載石器一覧	88・89・90

図 版 目 次

図版1	調査状況
図版2	完掘状況
図版3	住居跡(1)
図版4	住居跡(2)・土坑(1)
図版5	土坑(2)
図版6	土坑(3)
図版7	土坑(4)
図版8	遺構出土の土器
図版9	遺構出土の石器
図版10	包含層出土の土器(1)
図版11	包含層出土の土器(2)
図版12	包含層出土の土器(3)
図版13	包含層出土の土器(4)
図版14	包含層出土の土器(5)
図版15	包含層出土の土器(6)
図版16	包含層出土の土器(7)
図版17	包含層出土の土器(8)
図版18	包含層出土の石器(1)
図版19	包含層出土の石器(2)
図版20	包含層出土の石器(3)
図版21	包含層出土の石器(4)
図版22	包含層出土の石器(5)
図版23	包含層出土の土器・土製品・石製品

I 緒 言

1 調査要項

事業名	高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査業務 平成23年度（札苅5遺跡外） 平成24年度（大平4遺跡外）
事業委託者	国土交通省北海道開発局函館開発建設部
事業受託者	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター
遺跡名	当別川左岸遺跡（北海道教育委員会登録番号：B-06-42） 所在地 北斗市当別552-3～553-19
調査期間	（仮称）山側部分：平成23年8月1日～平成24年3月31日 （発掘期間：平成23年8月1日～平成23年9月9日） （仮称）旧工専用道路部分・海側部分 ：平成24年8月1日～平成25年3月31日 （発掘期間：平成24年8月1日～平成24年10月31日）
調査面積	平成23年度：1,816㎡ 平成24年度：2,442㎡
調査体制	平成23年度 第2調査部 部長 三浦正人 第2調査部第2調査課 課長 熊谷 仁志 主査 立川トマス（調査担当者） 主査 芝田 直人（調査担当者） 主任 佐藤 和雄（調査担当者） 平成24年度 第2調査部 部長 三浦正人 第2調査部第2調査課 課長 熊谷 仁志 主査 立川トマス（調査担当者） 主任 佐藤 和雄（調査担当者） 嘱託 奥山さとみ

2 調査にいたる経緯

「高規格幹線道路函館江差自動車道」事業は、国土交通省北海道開発局により整備が進められている。函館市を起点とし北斗市・木古内町を経由して、桧山郡江差町に至る総距離約70kmの国土交通大臣指定に基づく高規格幹線道路（一般国道の自動車専用道路）である。

平成2年度から事業着手され、平成15年3月に函館 Ⅰ-北斗中央（旧上磯）Ⅱ間（約8km）、平成21年11月に北斗中央 Ⅲ-北斗富川 Ⅳ間（約4.6km）、平成24年3月に北斗富川 Ⅴ-北斗茂地 Ⅵ間（約5.4km）が供用されている。現在、事業区間となっている茂地木古内道路（距離16km）は平成

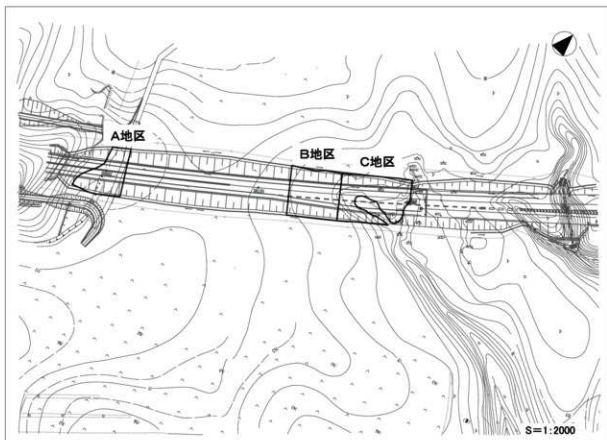


図 I-1 当別川左岸遺跡周辺の地形と調査範囲

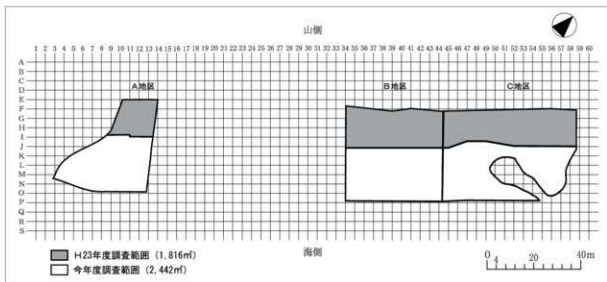


図 I-2 当別川左岸遺跡年度別調査範囲

6年度に着手された。

平成18年4月、国土交通省北海道開発局函館開発建設部（以下、「函館開建」という）は、函館江差自動車道にかかる埋蔵文化財保護のための事前協議書を北海道教育委員会（以下、「道教委」という）に提出した。これを受けて道教委は、同年同月に遺跡の所在確認調査を実施した。その結果、範囲確認調査が必要と判断された。

当別川左岸遺跡は、調査範囲中央部に工事用道路が敷設されており単年度での調査が不可能であるため、工事用道路を境に2か年にわたり調査を行った。

3 調査の経過

(1) 発掘経過

平成23年度（仮称：山側部分の調査）

- 8月1日：基準杭・範囲杭打設。
- 8月2日：重機による表土除去開始。基準杭・範囲杭打設。
- 8月3日：C地区調査開始。重機による表土除去は継続。
- 8月5日：B地区調査開始。
- 8月8日：B・C地区方格杭打設。
- 8月11日：重機による表土除去終了。
- 8月22日：A地区調査開始。補償道路部分の調査を終了。
- 8月24日：B地区調査終了。
- 8月29日：B地区埋戻し終了。
- 9月1日：A地区調査終了。町道振替部分の調査を終了。
- 9月5日：A地区埋戻し終了。
- 9月7日：C地区調査終了。遺構は土坑7基、Tピット2期を検出した。遺物は縄文時代前期後半、中期前半・後半、後期前半・後半、晩期中葉のものが出土。土器10,871点、石器等2,802点が出土した。
- 9月8日：C地区埋戻し終了。

平成24年度（仮称：旧工事用道路部分・海側部分の調査）

- 7月30日：A・B地区重機による表土除去開始。
- 7月31日：基準杭・方格杭打設。
- 8月1日：調査を開始。
- 8月2日：A・B地区調査開始。C地区道路部分の砕石等の重機による除去開始。
- 8月7日：C地区重機による表土除去作業開始。
- 8月27日：C地区調査開始。
- 8月30日：B地区調査終了。
- 9月20日：A地区調査終了。
- 10月30日：C地区調査終了。遺構は住居跡4軒、土坑12基、焼土6か所、礫集中2か所、土器集中1か所を検出した。遺物は縄文時代中期前半・後半、後期前半・後半、晩期前葉のものが出土。土器12,754点、石器等2,822点が出土した。

(2) 整理経過

平成23年度：11月5日から整理作業開始。遺物注記、破片接合、土器復元、遺構素因作成、写真整理。

平成24年度：11月5日から整理作業開始。遺物注記、破片接合、土器復元、遺構素因作成、写真整理。

平成25年度：4月から整理作業開始。破片接合、土器復元、遺物実測・墨入れ、写真整理・撮影、図版作成、原稿執筆。

4 調査結果の概要

平成23・24年度の2か年にわたって発掘調査を行った。調査では縄文時代前期後半・同中期前半・後半、同後期前葉・中葉、同晩期前葉・中葉の遺構・遺物が検出された。遺構は竪穴住居跡4軒（H-1・2：中期前半、H-3：中期後半、H-4：中期）、土坑19基（P-1～11・18・19：前期前半、P-13～16：中期後半、P-12・17：後期前葉）、Tピット（中期）、焼土6か所（中期）、礫集中2か所（中期～後期）が検出された。遺物は土器23,625点、石器等5,624点の合計29,249点が出土した。（表I-1～3）（立川）

表I-1 当別川左岸遺跡 年度別検出遺構・遺物数一覧

調査年度	調査範囲	調査面積 (㎡)	遺 構 名							遺 物		合 計
			住居跡	土 坑	T ピット	焼 土	土 器 集 中	礫 集 中	土 器	石 器 等		
平成23年度	山崎部分	1,836	0	7	2	0	0	0	0	93	61	154
平成24年度	粗工争用道路部分 ・海部部分	2,442	4	12	0	6	1	2	2	322	117	439
合 計		4,258	4	19	2	6	1	2	2	415	178	593

表I-2 当別川左岸遺跡 年度別出土土器点数一覧

種 別	調査年度	分 類										合 計			
		I 群 b1・3 期	I 群 b1・4 期	II 群 a期	II 群 b期	III 群 a期	III 群 b期	IV 群	V 群 a期	V 群 b期	後 編 土 器		土 器 片		
遺 構	平成23年度					34			49		10			93	
	平成24年度					102	38		187					327	
発 見 物	平成23年度			400	1,083	134		9,122	22		6	10	1	10,778	
	平成24年度				6,862	1,960	3	3,506	42	9				12,432	
合 計		0	0	0	400	8,081	2,132	3	12,909	64	19	6	10	1	23,625

表I-3 当別川左岸遺跡 年度別出土石器等点数一覧

種 別	調査年度	分 類																合 計					
		石 鏃	石 鏃・ ナイフ	石 鏃	つ ま み け る ナ イフ	ス ク レ イ バ ー	両 面 磨 削 石 器	石 斧	た た き 石	お り 石	巨 龍 ・ 白 石	砥 石	石 錘	R フ レ イ ク	U フ レ イ ク	加 し 更 ぬ る 礎	有 意 の 礎		石 の 核	砥 石	網 片	礎 ・ 礎 片	石 製 品 等
遺 構	平成23年度				2	1		2		1	1							1		16	40		61
	平成24年度	1								1	3	1							1		17	91	117
発 見 物	平成23年度	25	6	4	2	25	13	222	72	30	17	1	1	12	7	17	9	16	796	1,454	2	2,741	
	平成24年度	10	6	0	5	97	1	17	82	66	42	12	2	17	26	6	9	7	31	833	1,432	3	2,705
合 計		36	12	4	7	134	2	30	306	139	26	30	3	18	36	13	26	18	47	1,962	3,018	5	5,624

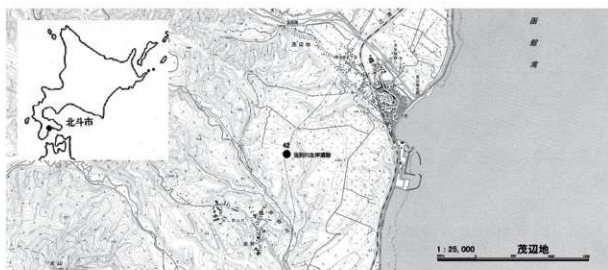
II 遺跡の位置と環境

1 位置と環境

当別川左岸遺跡の所在する北斗市は、北海道の南西部に位置する波島半島の南側にある。上磯郡上磯町と亀田郡大野町が平成18年（2006）2月1日に合併して誕生した。波島地方では、旧亀田市以来3番目の市で、函館市に次いで人口の多い自治体である。北東側で七飯町、東側で函館市、北側で森町、西側で厚沢部町・上ノ国町、南西側で木古内町と町界を接している。函館市からは西へ約10kmである。町域はおおよそ東西23km、南北27km、総面積は397.3km²、人口は平成22年で48,032人である。南東側は津軽海峡に面しており、北～北西側は300～700m級の毛無山、設計山、南～南東側は柱岳などの山々に囲まれている。また、東側には大野平野が広がる。海岸線には低位の海岸段丘が発達し、この段丘上に多くの遺跡が立地している。

当別川左岸遺跡は、J R当別駅から北東へ約2.5kmのところ^{もっけやま}に位置し、茂辺地川と当別川に挟まれた海岸段丘上に立地している。調査区は北から南に緩やかに傾斜しており、標高は70～76mである。

（立川）



図Ⅱ-1 遺跡の位置と周辺遺跡

2 周辺の遺跡

北斗市の遺跡は、その多くが海岸線に沿った段丘上に集中している。現在、北斗市で周知されている遺跡は105か所である。このうち、これまでに調査あるいは一部調査の行われた遺跡は27遺跡である。近年、緊急発掘調査が増え北海道新幹線建設事業で1遺跡、高規格道路建設事業で10遺跡の調査が行われた。当別川左岸遺跡の周辺に所在する遺跡は、茂辺地市街寄りの北東側に茂辺地1遺跡(33)・茂辺地2遺跡(34)・茂辺地4遺跡(72)・トドメキ川左岸遺跡(71)など、海岸寄りの南東側に当別4遺跡(44)・茂辺地3遺跡(45)・当別5遺跡(68)がある。()内の数字は掲載番号である。

（立川）

III 調査の方法

1 調査範囲

調査区の設定と座標値

当別川左岸遺跡の調査は、平成23年度と平成24年度の2か年にわたって行われた。調査区の設定は、平成22年度調査の際に国土交通省北海道開発局函館開発建設部が平成18年2月に作成した「函館江差自動車道上磯町茂辺地当別間用地測量用地平面図」1/1,000図を基本図として使用した。調査区の設定の際には、計画路線のうち路線中心線186k000m～187k000mが直線であることからこれを基線とした。基線に対して平行・直交する方格を組み、方格設定の原点として186k000m～187k000m点間の187k000m（調査方格名称K34）・186k000m（調査方格名称K59）を選定した。平成23年度の調査範囲は路線中心線を含んでいないことから、基線より8m北東よりのIラインを調査基線とした。

方格の間隔は4mとした。方格を区画する線にはアルファベット（北西-南東方向）とアラビア数字（南西-北東方向）を与え、調査区（グリッド）の名称は方格の西角で交差する2つの線名を合わせて読む。

平成23年度調査範囲の平面直角座標は第X I系で、以下のとおりである。合わせて、記載した杭の杭高を記す。

平成23年度：調査方格名称	I 11杭	X = -248828.677	Y = 27740.383	
	北緯41度45分33.89856秒	東経140度35分00.97130秒	杭高77.02m	
調査方格名称	I 35杭	X = -248761.939	Y = 27809.391	
	北緯41度45分36.05319秒	東経140度35分03.97006秒	杭高76.58m	
調査方格名称	I 45杭	X = -248734.131	Y = 27838.145	
	北緯41度45分36.95096秒	東経140度35分05.21959秒	杭高74.26m	
調査方格名称	I 55杭	X = -248706.324	Y = 27866.898	
	北緯41度45分37.84870秒	東経140度35分06.46909秒	杭高73.92m	

平成24年度は、平成23年度に設定した調査区の方格を区画する線を延長して調査区の設定を行った。

平成24年度調査範囲の平面直角座標は第X I系で、以下のとおりである。合わせて、記載した杭の杭高を記す。

平成24年度：調査方格名称	L 5杭	X = -248853.985	Y = 27731.481	
	北緯41度45分33.07931秒	東経140度35分00.08166秒	杭高75.66m	
調査方格名称	L 11杭	X = -248837.299	Y = 27748.7311	
	北緯41度45分33.61802秒	東経140度35分01.33126秒	杭高76.42m	
調査方格名称	M34杭	X = -248776.217	Y = 27817.644	
	北緯41度45分35.58933秒	東経140度35分04.32496秒	杭高75.75m	
調査方格名称	M40杭	X = -248759.532	Y = 27834.896	
	北緯41度45分36.12800秒	東経140度35分05.07465秒	杭高74.86m	
調査方格名称	M56杭	X = -248715.040	Y = 27880.900	

北緯41度45分37.56440秒 東経140度35分07.07381秒 杭高71.90m

平成23年度・24年度ともに、平面直角座標は「世界測地系」に基づいた「測地成果2000」の座標である。

2 土 工

(1) 掘 削

掘削作業には主に移植ゴテ、ねじり鎌を使用した。遺構・遺物の検出状況に応じて、竹べら・竹串を使用して遺構・遺物を傷つける事のないように配慮して掘削した。精査・清掃の際には鉋箒・ブラシを併用した。

遺構は乾燥や降雨による流水によって崩壊しやすいため、ジョウロや噴霧器による適度な散水、コンパネやブルーシートをかけるなどの乾燥や降雨への対策をとりながら調査を進めた。また、黒色腐植土や黄褐色ローム質土は水分を含むと滑りやすくなるため、排土場に至る道や通路に歩み板や麻袋を敷いて転倒防止に努めた。

(2) 埋め戻し

平成23年度は、工用道路の付け替え工事を行うため調査終了後に重機による埋め戻しを行った。平成24年度は、埋め戻しは行わなかった。

3 測量と記録

(1) 測量・図化

4m×4m方眼の交点に打設した方格杭を平面測量の基準とした。24mごとに打設した基準杭にはそれぞれの杭に打たれた釘の標高を記入し、この標高を水準測量の基準とした。水準測量にはオートレベルと1mm目盛のアルミ製スタッフを用いて、基準杭の標高と測量対象の比高を直接観察した。平面測量は測量杭を基準として手測りによって行った。

遺構・遺物の出土状況等の実測図は、B3版セクションフィルムに基本的に1/20縮尺で記録した。遺物出土状況等の詳細図については1/10縮尺を用い、図版にはそれぞれスケールを付した。

(2) 現場での撮影

a 撮影方法

発掘現場での撮影は6×7判カメラと35mm判カメラを使用した。また、写真整理用としてデジタルカメラを使用した。基本的にモノクロ、カラーリバーサルとも2コマを同露出で撮影し、1セットとした。撮影の際は撮影方向、出土位置など出来るだけ多くの情報を入れることに留意した。

b 撮影機材

撮影機材・フィルムは下記を使用した。

カメラ：Mamiya RZ67 PROII (6×7判)、ニコン F3 (35mm判)、カシオ EX Z2000・EX Z60・EX H30 (デジタルカメラ)

フィルム：コダック Tmax400 (6×7判 モノクロ)、フジフィルム ネオパン100ACROS (6×7判 カラーリバーサル)、フジフィルム PROVIA100F (35mm判 カラーリバーサル)

c 撮影データ

発掘現場での撮影データ(カットNo、撮影日、被写体、出土位置、層位、撮影方向、フィルム種類)を野帳に記入し、デジタルカメラの画像と照合して写真台帳を作成した。

4 整理の方法

(1) 一次整理作業

遺跡内より出土した土器・石器等は、野外作業と並行して現地で水洗・乾燥・分類・遺物カードの添付・遺物台帳の作成・注記作業を行った。水洗はボンドブラシや歯ブラシなどを使用して、遺物に付着した土を洗い落とした。乾燥は新聞紙等を敷いた乾燥かごに遺物を入れて、屋外もしくは屋内において行った。水洗・乾燥の終了した遺物は、収集の単位ごとに分類して遺物名と点数を決定し、それぞれに遺物番号を与えた後に、遺物台帳に登録した。

遺物台帳は、土器・土製品と石器等に分けて作成している。B5判の様式を印刷して手作業で記入し、遺構・包含層を分けて全遺物を登録した台帳を作成した。台帳には出土遺構またはグリッド名のほか、遺物番号・取上日・層位・遺物名・分類・材質(石器等の場合)・点数その他を記入した。台帳登録の終わった遺物は、台帳と同一の内容を記入した遺物カードと共に遺物番号ごとにチャック付ポリ袋に納めた。遺物カードは土器と石器等で色を分けている。土器を「黄色」、石器等を「黄緑色」とした。

注記は手書きによって行った。注記対象は、土器片が微細なものを除く大多数、石器等が「礫・礫片」を除く狭義の石器である。注記できなかった遺物は、遺物番号ごとに「未注記」と記入したポリ袋に納め、注記済みのものと同封した。注記は、遺跡名の略号、遺構番号またはグリッド名、遺物番号、出土層位の順に記した。遺跡の略号は、当別川左岸遺跡「TS」とした。

注記例

遺 構：TS H-1, 2. 床面 包含層：TS D60, 3, II

なお、遺物台帳は手作業で紙へ記入したものを基にパソコン上で表計算ソフト(Microsoft Excel)に入力し管理している。整理作業の進捗により遺物の分類等に変更があった場合には、手書きの台帳とExcelのデータを同時に修正した。

一次整理作業の終了した遺物は、現地調査終了後に北海道埋蔵文化財センターへ搬送した。

(2) 二次整理作業

図面等

遺構や遺物出土状況の原因は訂正などの作業を行った。訂正や変更があった場合はその箇所が確認できるように原因に書き込んでいる。その後、原因から1mm方眼の方眼紙に鉛筆で素図を作成している。素図をスキャナーで取り込み、パソコン上で描画ソフト(Adobe Illustrator CS2・CS5.1)により補正・加工して版下を作成した。

土器の整理

土器については、分類の見直しと細分類を行いながら、接合作業を中心に整理を進めた。作業に当たっては遺構と包含層の接合、同一個体の破片を把握することに努めた。接合作業の結果は、分類・出土地点・遺物番号・点数・同一個体破片の有無などを接合台帳に記入した。接合関係が認められた個体は、接合の程度によりA～Dの4段階に分類した。Aは完形もしくは口縁～底部が全体の1/3以上残存するもの。Bは口縁～胴部または胴部～底部が全体の1/3以上残存するもの。Cは口縁～

胴部または胴部～底部が全体の1/3未満残存するもの。Dは縄文または無文のみの胴部が接合したものである。概ねA・Bは立体復元、Cは土器拓本、Dは未掲載としたが、BとCは個体ごとに適宜判断し図化した。未接合の破片資料のうち、文様構成・器形のわかる口縁部・胴部・底部については、土器拓本を作成した。立体復元は、遺物台帳と破片の照合→再接合→破片接着→樹脂充填の手順をとった。立体復元と拓本断面については人手による原寸実測を行い、2/3縮尺素図をもとに墨入れを行った。接合・復元作業と並行して、集計表・分布図を作成した。

石器等の整理

石器については、分類の見直しを行いながら、破損品の接合作業を行った。遺構・包含層ごとに完形品を中心に人手による原寸実測を行い、剥片石器は原寸で、礫石器は2/3縮尺素図をもとに墨入れを行った。これらの作業と並行して集計表・分布図の作成を行った。

写真の整理

a スタジオ撮影

撮影方法：光源は撮影用レフランプを使用している。土器片や石器などの俯瞰撮影はトヨ無影撮影台を使用して撮影した。遺物は発泡スチロールや脱脂粘土などで傾きや高さを調整した。復元土器は蛍光剤が少ないスーパーホワイトの背景紙を撮影台に垂らして立面撮影を行った。モノクロ、カラーリバーサルともに同露出で2コマ撮影し、1セットとした。

撮影機材：スタンドはトヨウエイトスタンドを使用した。カメラはManiya RZ57PROIIを使用した。フィルムはモノクロがコダックTMax100、カラーリバーサルがコダックT64を使用した。

b 現像

フィルム現像：モノクロフィルムは自動現像機(ILFORD ILFOLAB FPI0)を使用して、自家処理を行っている。

ペーパー現像：モノクロ写真の焼付けはフジプロバグレードWPを使用し、写真図版を作成した。

c 保管・管理

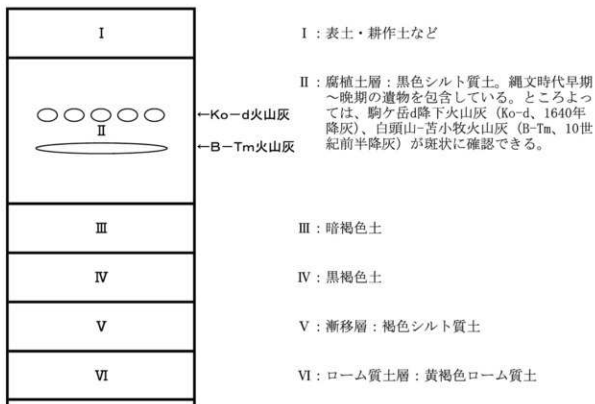
フィルムは1コマずつ番号をつけ、フィルム種類ごとの連番で管理している。フィルムに触れる時は手袋を着用し、油分からの変化・劣化・カビの発生を防いでいる。同露出で撮影した2コマのうち1コマは、オリジナルフィルムとして使用していない。使用頻度や貸し出し依頼の多い写真は、デュープフィルムの作成やスキヤニングによるデータ化で対応している。写真アルバムはすべての調査・整理作業が終了した後、常温・定湿の特別収蔵庫に保管される。

5 保管

今回の報告に関する出土遺物については、調査年度・遺跡名・遺物名・分類・収納番号等を記したラベルを貼ったコンテナに収納し、収納台帳を作成した。遺物は収納台帳と共に北斗市へ返却される予定である。図面等はすべてA2判図面ファイルに調査年度・遺跡名を付け収納している。図面等や写真フィルム等は北海道埋蔵文化財センターにて保管される。

6 遺跡の土層

本遺跡の基本的な層序は次の通りである。



7 遺物の分類

(1) 土器

土器は縄文時代早期に属するものをI群とし、以下前期をII群、中期をIII群、後期をIV群、晩期をV群とした。続縄文時代のはVI群、擦文文化期のはVII群である。また、a・b類に二分したものはa類が前半、b類が後半を意味する。同様にa・b・c類に三分したものはa類が前葉、b類が中葉、c類が後葉を意味する。さらに細分を必要とする場合は、アラビア数字の枝番号を付した。なお、今回の調査では、I群・VI群・VII群は出土していない。

II群 縄文時代前期に属する土器群

- a類 縄文の施された丸底・尖底の土器群
- b類 円筒土器下層式土器群

III群 縄文時代中期に属する土器群

- a類 円筒土器上層 a式・b式、サイベ沢Ⅷ式、見晴町式に相当するもの
- b類 円筒土器上層式に後続する土器群
 - b-1類 榎林式に相当するもの
 - b-2類 大安在B式に相当するもの

b-3類 ノダップⅡ式、煉瓦台式に相当するもの

Ⅳ群 縄文時代後期に属する土器群

a類 天祐寺式、涌元式、トリサキ式、大津式、白坂3式に相当するもの

b類 ウサクマイC式、手船式、ホッケマ式に相当するもの

c類 堂林式、三ツ谷式、湯の里3式に相当するもの

Ⅴ群 縄文時代晩期に属する土器群

a類 大洞B式、大洞B-C式とこれに並行する在地の土器群

b類 大洞C₁式、大洞C₂式とこれに並行する在地の土器群

c類 大洞A式、大洞A₁式とこれに並行する在地の土器群

(2) 石器等

石器等には定型的な石器をⅠ～Ⅹ群に分け、定型的な石器と認定しがたい加工痕や使用痕のある剥片・礫をⅪ群、石核・原石をⅫ群として、記号を用いて分類をした。分類記号を用いなかったものには、礫や土製品、石製品がある。

なを、ⅪA1、ⅪA2の本文中や一覧表での名称には、Rフレイク、Uフレイクの略号を用いている。

〈Ⅰ群〉 石鏃・石槍類

A類 石鏃

1：石刃鏃

2：細身で薄いもの

a：柳葉形のもの

b：五角形になるもの

3：三角形のもの

a：凹基のもの

b：平基のもの

c：凸基のもの

4：茎が明瞭にみられないもの

a：木の葉形のもの

b：菱形のもの

c：棒状のもの

5：茎をもつもの

6：破片（細分の困難な破片）・未成品

B類 石槍・ナイフ

1：茎をもつもの

2：茎が明瞭にみられないもの（木の葉形・菱形のものを含む）

8：破片（細分の困難な破片）・未成品

〈Ⅱ群〉 石錐

A類 石錐

1：刺突部を作り出したもの

2：棒状のものにつまみ部が作り出されたもの

3：棒状のもの

8：破片（細分の困難な破片）・未成品

〈Ⅲ群〉 つまみ付ナイフ・スクレイパー

A類 つまみ付ナイフ

- 1：片面の全面加工のもの（裏面の一側縁に刃部をもつもの）
- 2：片面の全面加工のもの
- 3：片面の周縁加工のもの
- 4：両面加工のもの
- 8：破片（細分の困難な破片）・未成品

B類 スクレイパー

- 1：石べらと称されるもの
- 2：円形のもの
- 3：主に縦長で下端部に刃部が設けられるもの
- 4：素材の縁辺に抉りを入れ、それを刃部としているもの
- 5：縦長で側縁に刃部が設けられているもの
- 6：横長で側縁に刃部が設けられているもの
- 7：素材の形状を大きく変えていないもの
- 8：破片（細分の困難な破片）・未成品

〈IV群〉 両面調整石器

A類 両面調整石器

- 1：円・楕円形のもの
- 2：木の葉形・菱形のもの
- 3：半円形のもの
- 8：破片（細分の困難な破片）・未成品

〈V群〉 石斧類

A類 石斧

- 1：擦り切り手法によって製作されたもの
- 2：敲打痕（ベッキング）のみられるもの
- 3：打ち欠きによる整形のみられるもの
- 4：素材を大きく変えることなく刃部のみに磨きのみられるもの
- 5：全面磨製のもの
- 8：破片（細分の困難な破片）・未成品

B類 石のみ

〈VI群〉 たたき石

A類 たたき石

- 1：棒状礫を素材としたもの
- 2：扁平礫を素材としたもの
- 3：円礫を素材としたもの
- 4：くぼみ石と称されるもの

〈VII群〉 すり石

A類 すり石

- 1：断面が三角形の礫の稜をすったもの
- 2：扁平礫を素材としたもの

7 遺物の分類

3：扁平礫を半円状に打ち欠き弦をすったもの（扁平打製石器）

4：円礫を素材としたもの

5：北海道式石冠と称されるもの

〈Ⅷ群〉 台石・石皿

A類 台石・石皿

〈Ⅷ群〉 石鋸

A類 石鋸

〈Ⅸ群〉 砥石

A類 砥石

1：研磨面に溝があるもの

2：板状のもの

3：角柱状のもの

〈Ⅹ群〉 石錘

A類 石錘

〈Ⅺ群〉 加工痕、使用痕のみられる剥片・礫など

A類 加工痕、使用痕のみられる剥片

1：剥片に加工痕のみられるもの（Rフレイク）

a：ピエス・エスキーユと称されるもの b：加工痕から器種を特定できないもの

2：剥片に使用痕のみられるもの（Uフレイク）

B類 加工痕のみられる礫

〈Ⅻ群〉 石核・剥片類

A類 石核・原石

1：石核（残核）

2：石器原石と考えられるもの

B類 破片・剥片

（立川）

IV 遺構と遺構出土の遺物

1 概要

平成23年、平成24年の2か年にわたる調査で検出された遺構は、竪穴住居4軒、土坑19基、Tピット2基、焼土6カ所、礫集中2カ所である。Tピットを除くこれらの遺構は、調査区のほぼ全域に分布する。

住居跡の時期は、縄文時代中期前半2軒（H-1・2）、同中期後半1軒（H-3）、同中期に属すると思われるもの1軒（H-4）である。H-1はA地区南東寄りの平坦部、H-2はB地区北東の平坦部、H-3・4はC地区の沢頭の南西側縁辺の平坦部に位置する。H-3・4は重複しており、H-3がH-4を切る。H-1北東側床面から先端ピットが確認された。H-1・2からは壁際周囲溝が見られる。

土坑は、縄文時代中期1基（P-13）、同中期前半13基（P-1～11・18・19）、同中期後半3基（P-14～16）、同後期前葉2基（P-12・17）に属する。A地区から2基、B地区から3基、C地区から14基の19基が検出された。時期、場所等で分布にまとまりのような傾向はみられない。P-1・3は坑口部の直径が2mを超える大型の土坑である。いずれもH-2のような小型の竪穴住居跡の可能性はあるが、炉跡や柱穴などの付属遺構が検出されなかったため土坑とした。

Tピットは、2基が検出された。いずれもB地区の西よりの平坦部に位置し、溝状の細長いタイプである。長軸方向はほぼ同じ向きで、等高線に直行する。時期は縄文時代中期と考えられる。

焼土は6カ所検出された。A地区から3カ所、B地区から1カ所、C地区から1カ所が検出された。いずれも縄文時代中期前半ないし後半に属すると思われる。

礫集中は2カ所確認されたが、いずれも竪穴住居跡（H-4）の覆土上位に位置する。（立川）

2. 住居跡

H-1（図IV-4・15・16／表1・2・7／図版3・8・9）

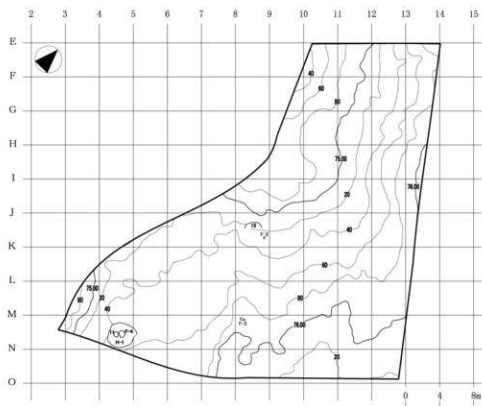
位置：N5

規模：3.25/2.35×2.95/2.73×0.15（m）

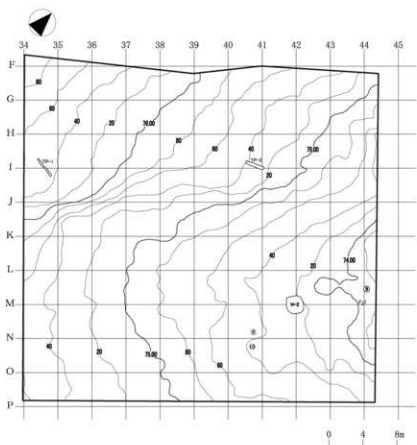
確認・調査：調査範囲南西側の平坦部に位置する。表土除去作業中に、V層上面で焼土と黒褐色土の落ち込みを確認した。長軸・短軸方向に土層観察用のベルトを設定し掘り下げたところ、壁の立ち上がりと床面を確認した。壁は緩やかに立ち上がる。床面はほぼ平坦である。掘り込み面は、覆土の堆積状況および出土遺物から、Ⅱ～Ⅳ層中と考えられる。平面形は隅丸方形を呈する。覆土は自然堆積である。住居址西側の床面からHF-1とP-11が重複する形で検出された。P-11はHF-1を切って作られていることから、住居址よりも新しいと考えられる。

付属施設：北東側に先端ピットがあり、床面を15cmの深さで円形に掘り込んでいる。底面はほぼ平坦である。北東側のほぼ中央に地床炉（HF-1）が検出された。南側をのぞく三方の壁際から周溝が検出された。幅10cm、深さ5cmで、断面はU字形を呈する。さらに西側と東側に3カ所、北側に1カ所柱穴を検出した。直径5～15cm、深さ10～20cmである。それぞれを半裁して断面観察を行ったところ、壁はほぼ垂直である。底面は平坦なものが5カ所、V字形のものが2カ所みられる。

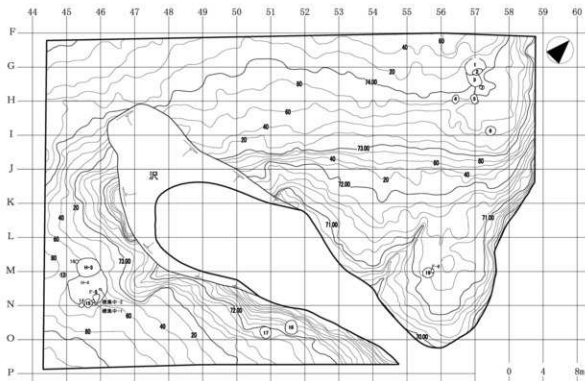
2. 住居跡



図Ⅳ-1 A地区遺構位置図



図Ⅳ-2 B地区遺構位置図



図IV-3 C地区遺構位置図

遺物出土状況：覆土中からⅢ群a類土器88点、石鏃1点・フレイク6点・礫1点が出土した。いずれも覆土中からの出土である。

時期：出土遺物および周辺の遺物状況からみて、縄文時代中期前半の可能性がある。（佐藤）

掲載遺物 土器：1はⅡ群b類円筒土器下層に相当するものである。単節縄文によって施工される。口縁部にも単節縄文が施される。2～4はⅢ群a類円筒土器上層に相当するものである。粘土紐貼付による装飾が行われている。細かい燃糸文が付される。2は粘土紐貼付を挟んで馬蹄形圧痕がある。3は粘土紐貼付上に細かい燃糸文が連続する。4は、口唇上に鋸歯状の粘土紐貼付があり、細かい燃糸文がつけられる。内面にミガキがかけられている。5・6はH-1から出土した底部片である。5は張り出す。6はRL原体による斜行縄文が施される。ところどころにケズリの調整痕がみられる。

（奥山）

石器：1は石鏃である。茎が明瞭にみられない変形を呈するものである。石質は頁岩である。

（立川）

H-2（図IV-5／表1・2／図版3）

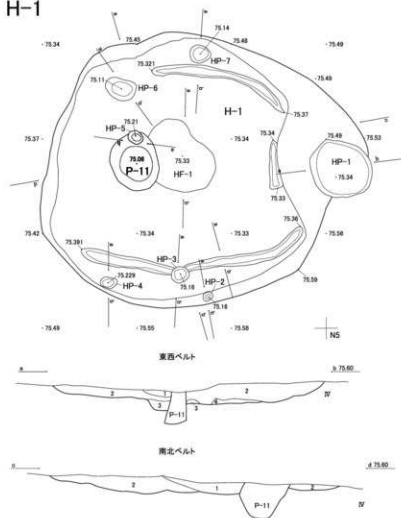
位置：L・M-41・42

規模：2.11/1.98×2.02/1.89×0.21（m）

確認・調査：遺構調査区北東側の平坦部に位置する。耕作土を除去したところ、黒褐色土の落ち込みを確認した。半載して土層観察を行ったところ、壁の立ち上がりを確認した。平面形は円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁際に周溝がめぐる。床面はほぼ平坦であるが南東側に緩やかに傾斜している。掘り込み面は、覆土の堆積状況から、Ⅱ～Ⅳ層中と考えられる。覆土は自然堆積である。

2. 住居跡

H-1



東西ベルト

- 1 10YR2/2 黒褐色土
細り普通 粘り強 土質シルト
- 2 10YR3/3 暗褐色土 φ1~2mmの炭化物含む
細り強 粘り普通 土質シルト
- 3 5YR5/8 明褐色土(雑土)
細り普通 粘り弱 土質シルト
- 4 10YR4/4 褐色土 φ1~2mmのIV層のブロック含む
φ1~2mmの炭化物含む
細り強 粘り普通 土質シルト

南北ベルト

- 1 5YR5/8 明褐色土(雑土)
細り普通 粘り弱 土質シルト
- 2 10YR4/4 褐色土
細り普通 粘り普通 土質シルト

H-1 周溝(溝側)

- 1 10YR4/6 褐色土
細り強 粘り強 土質シルト
- 2 10YR5/8 黄褐色土
細り強 粘り強 土質シルト

HP-4

- 1 10YR3/2 黒褐色土
細り弱 粘り強 土質シルト
- 2 10YR5/8 黄褐色土(IV層)
細り強 粘り強 土質シルト

HP-6

- 1 10YR3/2 黒褐色土
細り弱 粘り弱 土質シルト
- 2 10YR5/8 黄褐色土
細り強 粘り強 土質シルト

H-1 周溝(山側)

- 1 10YR4/6 褐色土
細り強 粘り強 土質シルト
- 2 10YR5/8 黄褐色土
細り強 粘り強 土質シルト

HP-1

- 1 2 5YR5/8 明褐色土
細り強 粘り弱 土質シルト
- 2 10YR5/8 黄褐色土
細り強 粘り強 土質シルト

HP-1

- 1 10YR3/3 暗褐色土
細り強 粘り強 土質シルト
- 2 10YR5/8 黄褐色土(IV層)
細り強 粘り強 土質シルト

HP-2

- 1 10YR4/6 褐色土
細り弱 粘り弱 土質シルト
- 2 10YR5/8 黄褐色土
細り強 粘り強 土質シルト

HP-3

- 1 10YR4/6 褐色土
細り強 粘り弱 土質シルト
- 2 10YR5/8 黄褐色土
細り強 粘り弱 土質シルト

HP-5

- 1 10YR4/6 褐色土
細り弱 粘り弱 土質シルト
- 2 10YR5/8 黄褐色土
細り強 粘り強 土質シルト

HP-7

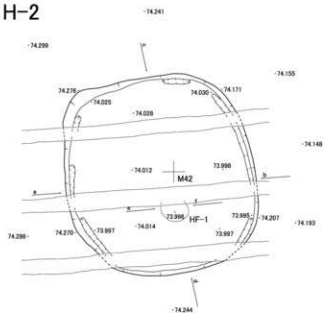
- 1 10YR3/2 暗褐色土
細り弱 粘り強 土質シルト
- 2 10YR5/8 黄褐色土(IV層)
細り強 粘り強 土質シルト

P-11

- 1 10YR2/2 黒褐色土 φ1~2mmのIV層の粒含む
細り普通 粘り弱 土質シルト

図IV-4 H-1、P-11

H-2



H-2

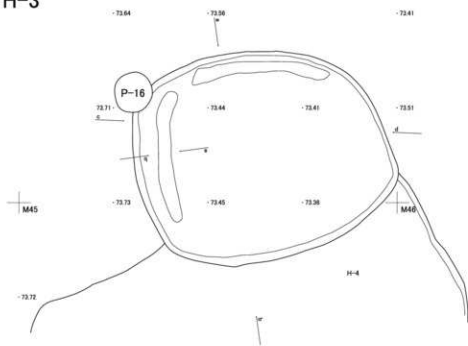
- 1 T. 5YR1.7/1 黒色土 目層と同質 粘性強 堅密度中
- 2 T. 5YR2/2 黒褐色土
φ1mmローム粒20%以上、φ10mmローム粒が10%混じる
粘性中 堅密度強
- 3 T. 5YR3/1 黒褐色土
φ1mmローム粒20%混じる 粘性強 堅密度やや弱



HF-1

- 1 T. 5YR2/1 黒色土
黒色土中に5YR5/6 橙色を呈する焼土粒と同化物が混じる
粘性中 堅密度中

H-3



H-3

- 1 10YR2/1 黒色土 黒色土>ローム粒 粘性強い
- 2 10YR5/1 灰褐色土 黒色土+ローム
- 3 10YR5/2 黄灰褐色土 ローム>黒色土



図IV-5 H-2・3

2. 住居跡

付属遺構:住居跡のほぼ中部に炉跡が検出された。被熱によりわずかに住居跡床面が赤変している。また少量の炭化物も検出された。柱穴は確認されなかった。壁際に周溝がめぐる。

遺物出土状況:覆土中から頁岩のフレイクが2点出土している。

時期:炉から出土した炭化物の炭素年代測定を行った結果から中葉～後葉の可能性がある。

(立川)

H-3 (図IV-5/表1・2・7/図版4・8・9)

位置:L・M-45、L46

規模:2.65/2.24×2.54/2.08×0.18 (m)

確認・調査:Ⅱ層を除去した段階で、重複する黒色土の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のセクションベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。

覆土:上位(1層)は自然堆積層で、下位(2, 3層)は多量のロームを含む層が床面まで堆積している。

形態:平面形は丸みを帯びた台形である。床はやや凹凸がある。壁は急角度で立ち上がる。東側の壁はH-4住居跡の壁を壊して構築されている。西角の床・壁の一部はP-16土坑の構築時に壊されている。

付属遺構:北西と南東側の床面で周溝が検出された。幅は約15cm・深さ約7cmである。炉跡・柱穴は確認されなかった。

遺物出土状況:覆土からⅢ群b類土器が出土した。覆土から、扁平打製石器1点と頁岩製の剥片1点が出土している。

時期:出土したⅢ群b類土器からみて、縄文時代中期後半と考えられる。

(佐藤)

掲載遺物 土器:7はⅢ群b類榎林式に相当するものである。口縁下にかすかな凹みがみられる。LR原体による斜行縄文である。

(奥山)

石器:2は扁平打製石器の破片である。扁平礫を半円状に打ち欠いて作成したものと思われる。石質は砂岩である。

(立川)

H-4 (図IV-6/表1・2/図版4)

位置:L・M-45、L46

規模:4.53/3.53×4.43/3.42×0.24 (m)

確認・調査:Ⅱ層を除去した段階で、重複する黒色土の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のセクションベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。

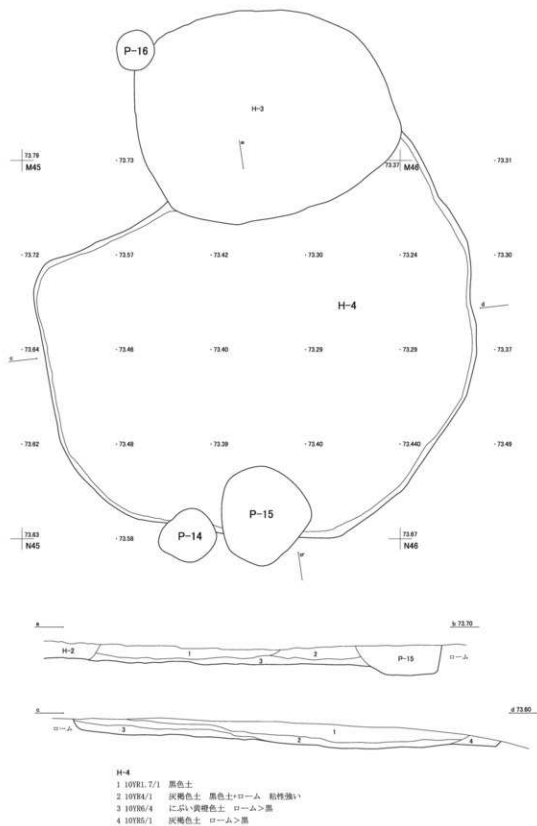
覆土:上位(1層)は自然堆積層で、下位(2, 3層)は多量のロームを含む層が床面まで堆積している。

形態:平面形は不整隅丸方形である。床はやや凹凸がある。壁近くを除き固く締まっている。壁は急角度で立ち上がる。北西側の床・壁の一部はH-3住居跡の構築時に壊されている。

付属遺構:炉跡・柱穴は確認されなかった。

調査範囲北東側の沢に面した段丘の縁に立地する。VI層上面と側溝断面で黒色土が楕円形に落ち込んでいるのを検出した。上部は近代以降の道路の造成により削平されており、さらに道路側溝による掘

H-4



図IV-6 H-4

乱を受ける。掘り込み面は、覆土の堆積状況および出土遺物から、Ⅱ～Ⅳ層中と考えられる。平面形は楕円形を呈する。坑底面はほぼ平坦であるが、中央部がやや低い。覆土は上部が自然堆積で、下部が埋め戻されている。隣接するP-5と形状・規模が類似することから、ほぼ同時期に構築されたと推測される。

遺物出土状況：覆土からⅢ群 a、b 類土器が出土した。覆土から、頁岩製の剥片3点と礫1点が出土している。

時期：出土したⅢ群 a、b 類土器からみて、縄文時代中期と考えられる。(佐藤)

3. 土 坑

P-1 (図Ⅳ-7・15・16/表1・3・7・8/図版4・5・8・9)

位置：F・G-56・57

規模：2.50×(1.88)/2.38×1.79/0.21 (m)

確認・調査：調査範囲北東側の沢に面した段丘の縁に掘り込まれた土坑。Ⅵ層上面で黒色土が不整形に落ち込んでいるのを検出した。上部は近代以降の道路の造成により削平されており、さらに道路側溝、電柱と推測される柱穴による攪乱を受ける。また、東側でP-2・3と重複する。P-3を壊し、P-2に壊されていることから、これらの新旧関係はP-3→P-1→P-2である。掘り込み面は、覆土の堆積状況および出土遺物から、Ⅱ～Ⅳ層中と考えられる。平面形は不整形楕円形、断面は浅い皿形を呈する。坑底面は広く、ほぼ平坦であるが、北側が少し高い。坑底面が固くしまっていることから小型の竪穴住居跡の可能性があるが、炉跡や柱穴などの付属遺構が検出されなかったため土坑とした。覆土は自然堆積である。

遺物出土状況：坑底および覆土中からⅢ群 a 類・Ⅳ群 a 類土器、礫が出土した。これらはⅡ～Ⅳ層中よりの流れ込みと考えられる。

時期：出土遺物から縄文時代中期前半～後期前葉の可能性がある。(芝田)

掲載遺物 土器：8はⅢ群 b 類ノグップⅡ式に相当するものである。RL原体による横走縄文である。ところどころ磨り消しが行われている。(奥山)

石器：4はくぼみ石と称されるものである。扁平礫の腹面の中央部にたたき痕がみられる。石質は砂岩である。3は両面調整石器である。楕円形を呈するものの下部破片と思われる。石質は頁岩である。5は石核である。石質は頁岩である。(立川)

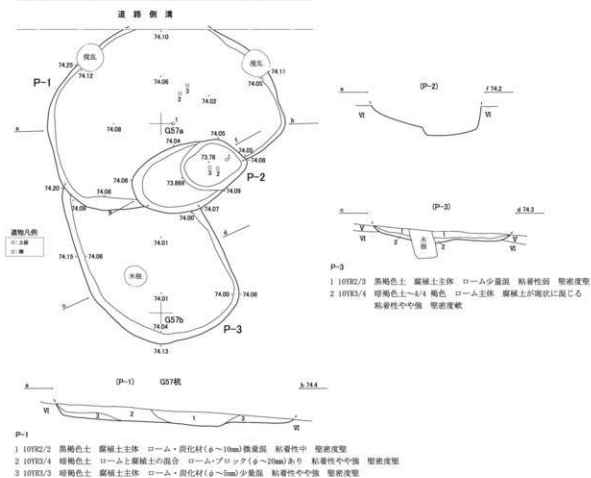
P-2 (図Ⅳ-7/表1・3/図版5・8・9)

位置：G-56・57

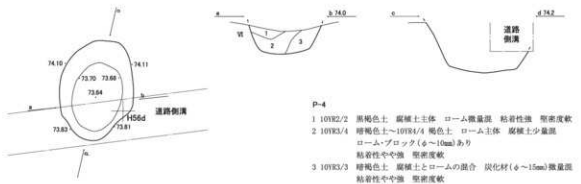
規模：1.23×0.72/1.08×0.57/0.30 (m)

確認・調査：調査範囲北東側の沢に面した段丘の縁に立地する。P-1の南側を半截したところ、壁際より黒みの強い腐植土が落ち込んでいるのを検出した。P-1の坑底面・壁を壊し、覆土を掘り込んでいることから、より新しい時期の土坑と判断した。P-2は南側でP-3の一部も壊している。上部は近代以降の道路の造成により削平されている。掘り込み面は、覆土の堆積状況および出土遺物から、Ⅱ～Ⅳ層中と考えられる。平面は楕円形を呈する。坑底面には段が見られ、北側がやや低い。小型の土坑が重複している可能性があるが、覆土がほぼ均質であることから、1つの土坑とした。覆土は自然堆積である。

P-1・2・3



P-4



図IV-7 P-1・2・3・4

3. 土坑

遺物出土状況: 覆土中からⅢ群 a 類土器、礫が出土した。これらは包含層よりの流れ込みと考えられる。

時期: 出土遺物および周辺の遺構との新旧関係から、縄文時代中期前半～後期前葉の可能性がある。
(芝田)

P-3 (図Ⅳ-7・15/表1・3・7/図版4・5・8)

位置: G-56・57

規模: (2.04) × 1.45 / (1.87) × 1.31 / 0.19 (m)

確認・調査: 調査範囲北東側の沢に面した段丘の縁に立地する。Ⅵ層上面で黒色土が不整形に落ち込んでいるのを検出した。上部は近代以降の道路の造成により削平されている。また、西側でP-1・2に壊されている。掘り込み面は、覆土の堆積状況および出土遺物から、Ⅱ～Ⅳ層中と考えられる。平面形は不整楕円形、断面は浅い皿形を呈する。坑底面は広く、北側へ緩く傾斜する。坑底面が固くしまっていることから小型の竪穴住居跡の可能性があるが、炉跡や柱穴などの付属遺構が検出されなかったため土坑とした。覆土は自然堆積である。

遺物出土状況: 覆土中からⅢ群 a 類土器が出土した。これらは包含層よりの流れ込みと考えられる。
時期: 出土遺物および周辺の遺構との新旧関係から、縄文時代中期前半～後期前葉の可能性がある。
(芝田)

掲載遺物・土器: 9はⅢ群 b 類円筒土器上層に相当するものである。粘土紐が貼付されている。

(奥山)

P-4 (図Ⅳ-7/表1)

位置: G・H-56

規模: (1.08) × 0.78 / 0.72 × 0.52 / 0.30 (m)

確認・調査: 調査範囲北東側の沢に面した段丘の縁に立地する。Ⅵ層上面と側溝断面で黒色土が楕円形に落ち込んでいるのを検出した。上部は近代以降の道路の造成により削平されており、さらに道路側溝による攪乱を受ける。掘り込み面は、覆土の堆積状況および出土遺物から、Ⅱ～Ⅳ層中と考えられる。平面形は楕円形を呈する。坑底面はほぼ平坦であるが、中央部がやや低い。覆土は上部が自然堆積で、下部が埋め戻されている。隣接するP-5と形状・規模が類似することから、ほぼ同時に構築されたと推測される。

遺物出土状況: 遺物は出土していない。

時期: P-5と同時期と考えられることから、縄文時代中期前半～後期前葉の可能性がある。

(芝田)

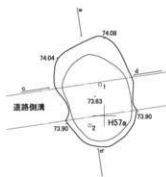
P-5 (図Ⅳ-8・15/表1・3・7/図版8)

位置: G・H-56・57

規模: 1.18 × (0.81) / 0.92 × 0.68 / 0.43 (m)

確認・調査: 調査範囲北東側の沢に面した段丘の縁に立地する。Ⅵ層上面と側溝断面で黒色土が楕円形に落ち込んでいるのを検出した。上部は近代以降の道路の造成により削平されており、さらに道路側溝による攪乱を受ける。掘り込み面は、覆土の堆積状況および出土遺物から、Ⅱ～Ⅳ層中と考えられる。平面形は隅丸方形または楕円形を呈する。坑底面はほぼ平坦である。覆土は上部が自然堆積で、

P-5



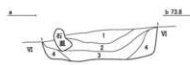
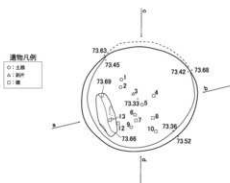
P-5

- 1 10YR2/1 黒褐色土 腐植土 粘着性中 堅密度軟 II層超弱
- 2 10YR3/3 暗褐色土~4/6 褐色土 腐植土とロームの混合 粘着性やや強 堅密度軟



P-6

157b



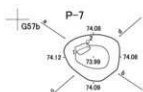
P-6

- 1 10YR3/4 暗褐色土 II層超弱 粘着性やや強 堅密度軟
- 2 10YR2/2 黒褐色土 IV層超弱 粘着性やや強 堅密度軟
- 3 10YR3/3 暗褐色土~2/3 黒褐色土 腐植土主体 ローム少量混 埋め戻し土 炭化材(φ~10mm)混 粘着性強 堅密度軟
- 4 10YR4/4 褐色土~2/3 黒褐色土 ローム主体 腐植土が泥状に混じる 壁際の崩落土 粘着性強 堅密度軟



P-7

G57b



遺物散在



P-7

- 1 10YR3/3 暗褐色土 腐植土主体とロームの混合 炭化材(φ~10mm)混 粘着性やや強 堅密度堅



図IV-8 P-5・6・7

3. 土 坑

下部が埋め戻されている。隣接するP-4と形状・規模が類似することから、ほぼ同時期に構築されたと推測される。

遺物出土状況：覆土中からⅢ群a類・Ⅳ群a類土器、礫が出土した。これらは包含層よりの流れ込みと考えられる。

時期：出土遺物から、縄文時代中期前半～後期前葉の可能性がある。(芝田)

掲載遺物：**土器**：10はⅢ群a類サイベ沢Ⅷ式に相当するものである。折り返し口縁でLR原体による斜行縄文である。内面はミガキがかけられている。(奥山)

P-6 (図Ⅳ-8・15~17/表1・3・7・8/図版5・8・9)

位置：H・I-57

規模：1.24×1.11/1.13×1.13/0.37 (m)

確認・調査：調査範囲北東側の沢に面した段丘の縁に立地する。Ⅵ層上面で暗褐色～黒色土が同心円状に落ち込んでいるのを検出した。掘り込み面は、覆土の堆積状況および出土遺物から、Ⅳ層中と考えられる。平面形は円形を呈する。掘り込みはやや急であるが、北西側の坑底部がオーバーハングする。坑底面は凹凸があり、南側が少し低い。覆土は上部がⅢ・Ⅳ層起源の自然堆積で、下部が埋め戻されている。

遺物出土状況：坑底および覆土中からⅢ群a類・Ⅳ群a類土器、台石1点、たたき石1点、剥片8点、礫11点が出土した。これらは包含層よりの流れ込みと考えられる。

時期：出土遺物から、縄文時代中期前半～後期前葉の可能性がある。(芝田)

掲載遺物 土器：11はⅢ群a類見晴町式に相当するものである。口縁に緩やかな山形隆起部をもつ。LR原体による斜行縄文が施される。12はⅢ群a類榎林式に相当するものである。LR原体による斜行縄文が施される。口縁下に縄線文が施される。13はⅢ群a類涌元式に相当するものである。無文地に燃糸で網目状が施される。14はⅢ群a類トリサキ式に相当するものである。口縁部が緩い山形突起をもつ。口端部に連続指頭押捺が施される。無文地に沈線で曲線・弧線文様がえがかれる。15はⅢ群a類大津式に相当するものである。頸部が強く外傾する。器面に斜行縄文を施した後、沈線により曲線、波状、弧状の文様がえがき、沈線以外の部分の縄文を磨り消している。(奥山)

石器：6はたたき石である。扁平礫の断面が三角形を呈する比較的扁平な礫の側縁に使用痕がみられる。石質は砂岩である。7は台石である。石質は安山岩である。(立川)

P-7 (図Ⅳ-8/表1)

位置：G・H-57

規模：0.60×0.50/0.37×0.24/0.12 (m)

確認・調査：調査範囲北東側の沢に面した段丘の縁に立地する小型の土坑。Ⅵ層上面で黒色土が楕円形に落ち込んでいるのを検出した。上部は近代以降の道路の造成により削平されている。西側にP-3が近接する。掘り込み面は、覆土の堆積状況および出土遺物から、Ⅱ～Ⅳ層中と考えられる。平面形は東側がやや広がった、歪な楕円形を呈する。坑底面はほぼ平坦である。覆土は埋め戻されている。

遺物出土状況：覆土中から礫が出土した。包含層よりの流れ込みと考えられる。

時期：周辺の包含層の出土遺物から、縄文時代中期前半～後期前葉の可能性がある。(柴田)

P-8 (図IV-9/表1・3)

位置：M-40

規模：(0.58) / 0.32 × 0.53 / 0.47 × 0.29 (m)

確認・調査：遺構確認調査範囲東側の平坦部に位置する小型の土坑である。耕作土を除去したところ、V層上面で黒色土の落ち込みを検出した。上部は耕作より削平されている。また、遺構南東側が長いもの耕作トレンチにより土坑上部が掘削を受けている。平面形はほぼ楕円形を呈する。壁は急角度で立ち上がる。坑底面はほぼ平坦である。掘り込み面は、覆土の堆積状況および出土遺物から、II～IV層中と考えられる。覆土は自然堆積である。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：周辺の出土遺物から、縄文時代中期前半～後期前葉の可能性がある。(立川)

P-9 (図IV-9・16・17/表1・3・8/図版5・9)

位置：L-44

規模：0.74 / 0.69 × 0.65 / 0.58 × 0.15 (m)

確認・調査：遺構確認調査範囲北東端の平坦部に位置する小型の土坑である。耕作土を除去したところ、V層上面で黒褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みの南側を半載したところ、坑底面から礫石器と礫がまとまって出土した。平面形は南側がやや広がった、やや歪な円形を呈する。壁は急角度で立ち上がる。坑底面はほぼ平坦である。覆土は埋め戻されている。掘り込み面は、覆土の堆積状況から、II～IV層中と考えられる。

遺物出土状況：覆土下位から2点の礫、坑底面から台石、砥石、礫等10点の計12点が出土した。これらの遺物はすべて坑底面に敷き詰めるような状態で出土している。

時期：周辺の出土遺物から、縄文時代中期前半～後期前葉の可能性がある。

掲載遺物石器：8～10は台石である。いずれも破片である。石質は8・9が安山岩、10が砂岩である。このほかに砂岩性の砥石がある。板状のものであるが、風化が著しく、掲載できなかった。

(立川)

P-10 (図IV-9/表1)

位置：N-40

規模：(0.60) / 0.59 × (-) / (-) × 0.15 (m)

確認・調査：遺構確認調査範囲東側の平坦部に位置する小型の土坑である。耕作土を除去したところ、VI層上面で黒色土が円形に落ち込んでいるのを検出した。上部は耕作より削平されている。また、遺構南東側が長いもの耕作トレンチにより坑底面と壁面が掘削を受けている。平面形は円形を呈する。壁は急角度で立ち上がる。坑底面はほぼ平坦である。覆土は自然堆積である。掘り込み面は、覆土の堆積状況から、II～IV層中と考えられる。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：周辺の包含層の出土遺物から、縄文時代中期前半～後期前葉の可能性がある。(立川)

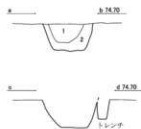
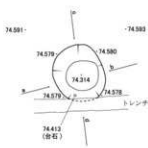
P-11 (図IV-4/表1)

位置：N5

規模：0.63 / 0.36 × 0.52 / 0.35 × 0.34 (m)

3. 土 坑

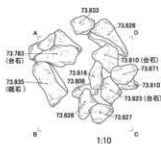
P-8



P-8

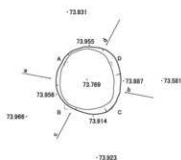
- 1 7.5YR1.7/1 黒色土 目層と同質
流れ込みと考えられる 粘性中 堅硬度中
- 2 7.5YR3/3 暗褐色土 IV層主体
φ20mmコロームが10%混じる 粘性強 堅硬度強

P-9

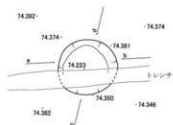


P-9

- 1 7.5YR2/2 黒褐色土 目層と同質
φ1mmコロームが2%混じる 粘性やや強 堅硬度中



P-10



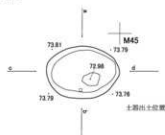
P-10

- 1 7.5YR4/6 褐色土 VI層主体
φ5-10mmコロームが1%未満混じる
粘性中 堅硬度中
- 2 7.5YR3/1 黒褐色土 VI層主体
φ5mmコロームが1%未満, φ1mmコロームが20%混じる
粘性中 堅硬度強
- 3 7.5YR4/4 褐色土 VI層主体→IV+V層
φ10mmコロームが1%未満混じる



図IV-9 P-8・9・10

P-12

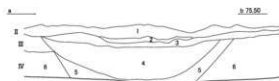
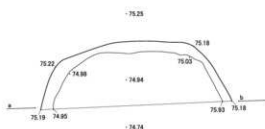


P-12

- 1 10YR3/1 黒褐色土 黒色土>ローム 炭化物含む 粘性強い
- 2 10YR5/1 灰褐色土 礫移層>ローム
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色土 ローム>礫移層



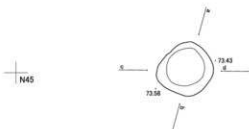
P-13



P-13

- 1 10YR1.7/1 黒色土
細り普通 粘り弱 土質シルト
- 2 10YR4/4 オリーブ褐色土(火山灰) φ3mm程度の黄褐色土5%のブロック含む
細り普通 粘り弱 土質シルト
- 3 10YR3/2 黒褐色土
細り普通 粘り弱 土質シルト
- 4 10YR2/1 黒色土 φ1~2mm程度のIV層のブロック含む
細り強 粘り普通 土質シルト
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色土 φ2~3mmのIV層のブロック含む
細り普通 粘り強 土質シルト
- 6 10YR5/8 黄褐色土(IV層)
細り強 粘り強 土質シルト

P-14

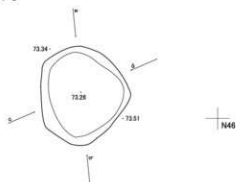


P-14

- 1 10YR3/1 黒褐色土 黒色土>ローム粒
- 2 10YR6/3 にぶい黄褐色土 ローム>黒色土
- 3 10YR5/1 灰褐色土 黒色土+ローム

3. 土 坑

P-15

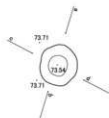


P-15

- 1 10YR3/2 黒褐色土 黒色土>ローム
- 2 10YR4/1 灰褐色土 黒色土>ローム
- 3 10YR5/2 灰黄褐色土 黒色土+ローム
炭化物・ロームブロック含む



P-16

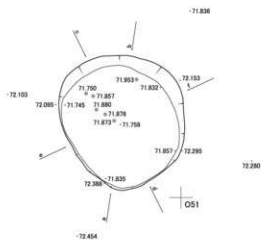


P-16

- 1 10YR3/1 黒褐色土 黒色土>ローム
- 2 10YR5/2 灰黄褐色土 ローム>層移層

N45

P-17



P-17

- 1 7.5YR3/1 黒褐色土 II層に似る
φ1mmローム粒が10%混じる 粘性中 堅硬度中
- 2 7.5YR5/6 明褐色土 VI層主体にIV層が混じる
粘性強 堅硬度中
- 3 7.5YR3/2 黒褐色土 I層に似るがV・VI層が多量に混じる
粘性中 堅硬度強
- 4 7.5YR3/1 黒褐色土 I層に似るがローム粒の混入はみられない
φ5mm炭化物が1%未満混じる 粘性強 堅硬度中



図IV-11 P-15・16・17

確認・調査：調査範囲南西側のH-1の床面から検出された。H-1の地床炉(HF-1)を切って構築されている。HF-1との切りあい関係からH-1より新しい時期と考えられる。平面形はほぼ円形を呈する。壁は急角度で立ち上がる。坑底面はほぼ平坦である。掘り込み面は、覆土の堆積状況からⅡ層中と考えられる。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：周辺の遺物やH-1を切って構築されていることから、縄文時代中期～後期と考えられる。(奥山)

P-12 (図IV-10・15/表1・3・7/図版8)

位置：M44

規模：0.78/0.56×0.68/0.45×0.12 (m)

確認・調査：平面形は楕円形である。Ⅱ層を除去した段階で、黒褐色土の落ち込みを確認した。半載し、調査を行った。覆土は埋め戻しである。

坑底面はほぼ平坦である。壁は急角度で立ち上がる。

遺物出土状況：覆土からⅣ群a類土器がまとまって出土した。覆土から、剥片1点が出土している。

時期：出土したⅣ群a類土器からみて縄文時代後期前半と考えられる。(佐藤)

掲載遺物：土器：16はⅣ群a類大津式に相当する底部だと考えられる。下の方はミガキがかけられている。(奥山)

P-13 (図IV-10/表1・3)

位置：J-9・10

規模：2.00/1.75×(0.65) / (0.55) ×0.60 (m)

確認・調査：調査範囲西側の平坦部に位置する。包含層調査中黒色土の落ち込みを検出した。北西側は包含層調査によって削平されている。平面形は残存部からみてほぼ楕円形を呈すると考えられる。壁は緩やかに立ち上がる。坑底面はほぼ平坦である。掘り込み面は、覆土の堆積状況から、Ⅱ～Ⅳ層中と考えられる。覆土は自然堆積である。

遺物出土状況：覆土中からⅢ群a類土器2点、礫2点出土している。いずれも覆土中からの出土である。

時期：出土遺物および周辺の遺物出土状況からみて、縄文時代中期の可能性がある。(奥山)

P-14 (図IV-6・10・17/表1・3・8/図版9)

位置：M・N-45

規模：0.59/0.40×0.57/0.39×0.28 (m)

確認・調査：平面形は円形である。H-3住居跡の調査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。

坑底面はほぼ平坦である。壁は急角度で立ち上がる。H-3の覆土中に構築されている。

遺物出土状況：覆土中からスクレイパー1点が出土している。

時期：周辺の遺構・遺物からみて、縄文時代中期後半と考えられる。(佐藤)

掲載遺物 石器：11はスクレイパーである。縦長で側縁部に刃部が設けられているものである。器表面の下部に礫表皮が残る。石質は頁岩である。(立川)

3. 土 坑

P-15 (図IV-6・11・17/表1・3・8/図版9)

位置：M・N-45

規模：1.03/0.88×0.94/0.77×0.19 (m)

確認・調査：平面形は丸みを帯びた方形である。H-3住居跡の調査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。坑底面はやや凹凸があり、中央部が低くなる。壁は急角度で立ち上がる。H-3の覆土中に構築されている。

遺物出土状況：覆土中からスクレイパー1点が出土している。

時期：周辺の遺構・遺物からみて、縄文時代中期後半と考えられる。(佐藤)

掲載遺物 石器：12はスクレイパーである。横長で側縁部に刃部が設けられているものである。石質は頁岩である。(立川)

P-16 (図IV-6・11/表1)

位置：L45

規模：0.44/0.22×0.39/0.21×0.14 (m)

確認・調査：平面形は円形である。II層の調査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。西側はH-3の覆土を掘り込んでいる。

坑底と壁の境が不明瞭で、断面形は椀状になる。

遺物出土状況：遺物は、出土していない。

時期：周辺の遺構・遺物からみて、縄文時代中期後半と考えられる。(佐藤)

P-17 (図IV-11・15/表1・3・7/図版6・8)

位置：N-50・51

規模：1.43/1.29×1.28/1.12×0.56 (m)

確認・調査：調査範囲北東側の沢に落ち込み斜面に位置する。包含層調査中、VI層上面で黒褐色土が楕円形に落ち込んでいるのを検出した。北側にP-18が近接する。掘り込み面は、覆土の堆積状況から、II～IV層中と考えられる。平面形は北側がやや広がった、歪な楕円形を呈する。壁は坑底から急角度で立ち上がるが、西側は緩やかに立ち上がる。坑底面はほぼ平坦である。覆土は、斜面上部からの流れ込みによる自然堆積である。

遺物出土状況：覆土中から117点、坑底から15点の土器破片が出土している。比較的遺構内全面から出土している。時期はすべてIV aに属するものである。石器等は出土していない。

時期：出土遺物から、縄文時代後期前葉と考えられる。(立川)

掲載遺物 土器：17・18はIV群 a 類天祐寺式に相当するものである。胎土が類似し同一個体土器とみられる。折り返し口縁で無文になる。RL原体による斜行縄文が施される。土器の内面はミガキがかけられている。(奥山)

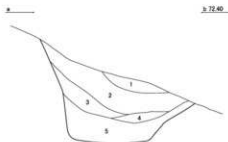
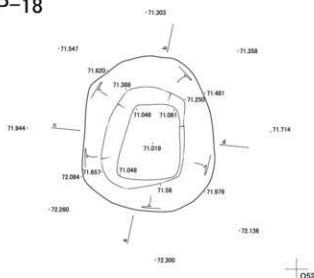
P-18 (図IV-12/表1・3/図版6)

位置：N-51

規模：1.66/1.41×0.81/0.66×1.11 (m)

確認・調査：調査範囲北東側の沢に落ち込み斜面に位置する。包含層調査中、VI層上面で黒色土が楕円形に落ち込んでいるのを検出した。南側にP-17が近接する。掘り込み面は、覆土の堆積状況から、

P-18

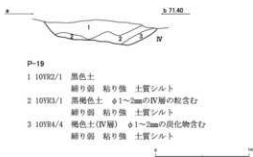
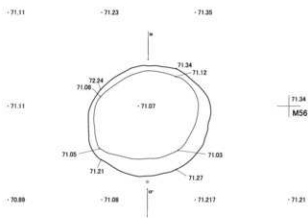


P-18

- 1 7.5182/3 暗褐色土 Ⅱ層>Ⅳ層+Ⅵ層
φ1mm以下粒が5%混じる 粘性強 堅硬度中
- 2 7.5182/1 黒色土 Ⅱ層と同質 粘性中 堅硬度中
- 3 7.5185/6 褐色土 Ⅵ層主体 壁の崩落土と考えられる
地山の小礫が多量に混じる 粘性中 堅硬度中
- 4 7.5183/2 黒褐色土 Ⅱ層に似る
φ5mm以下粒5%混じる 粘性中 堅硬度中
- 5 7.5183/3 暗褐色土 Ⅵ層主体 3層に似るがⅡ・Ⅳ層が多く混じる
粘性中 堅硬度中



P-19



P-19

- 1 10YR2/1 黒色土
細り弱 粘り強 土質シルト
- 2 10YR3/1 黒褐色土 φ1~2mmのⅣ層の粒を含む
細り弱 粘り強 土質シルト
- 3 10YR/4 褐色土(Ⅳ層) φ1~2mmの炭化物を含む
細り弱 粘り強 土質シルト

図IV-12 P-18・19

Ⅱ～Ⅳ層中と考えられる。平面形は南東側がやや広がった、歪な楕円形を呈する。壁は坑底から急角度で立ち上がるが、壁中位から上部は崩落により緩やかに立ち上がる。坑底面はほぼ平坦である。覆土は自然堆積である。

遺物出土状況：覆土中から礫が1点出土している。包含層からの流れ込みと考えられる。

時期：周辺の出土遺物から、縄文時代中期前半～後期前葉の可能性がある。

(立川)

P-19 (図IV-12・17/表1・3・8/図版9)

位置：M56

規模：1.30/1.15×1.20/1.00×0.20 (m)

確認・調査：調査範囲北側の平坦部、土器集中 (Po-1) と F-6 の下に位置する。Po-1 と F-6 の調査終了後、IV層上面に黒褐色土の円形の落ち込みを確認した。半裁して土層確認を行ったところ、壁の立ち上がり平坦な坑底面を確認した。壁はほぼ垂直に立ち上がる。平面形は円形を呈する。掘り込み面は、覆土の堆積状況および出土遺物から、II～IV層中と考えられる。覆土は自然堆積である。また、Po-1 と F-6 の検出上位置からみて、P-19にともなうもの可能性もある。

遺物出土状況：覆土中からⅢ群 a 類土器 6 点、扁平打製石器 1 点、礫 8 点、石核 1 点、フレイク 1 点出土している。いずれも覆土からの出土である。

時期：出土遺物および Po-1 の出土状況からみて、縄文時代中期～後期の可能性がある。

石器：14は扁平打製石器である。扁平な礫を方形に打ち欠き作成している。石質は凝灰岩である。は石核 (残核) である。石質は頁岩である。 (立川)

4. Tピット

TP-1 (図IV-13/表1/図版7)

位置：H・I-34

規模：2.60/0.18×2.68/0.08×0.68 (m)

確認・調査：遺構確認調査範囲の南西端の平坦部に位置する。耕作土を除去したところ、V層上面で黒色土が溝状に落ち込んでいるのを検出した。平面形は溝状を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、土坑中央部から南側で壁の崩落が見られる。坑底面はほぼ平坦であるが、中央部がやや盛り上がる。覆土は自然堆積である。掘り込み面は、覆土の堆積状況および土坑周辺の出土遺物から、II～IV層中と考えられる。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：周辺出土遺物から縄文時代中期前半～後期前葉の可能性はある。 (立川)

TP-2 (図IV-13/表1/図版7)

位置：H・I-40・41

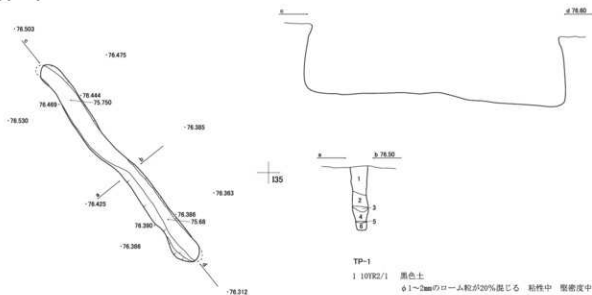
規模：2.27/0.42×2.35/0.22×0.92 (m)

確認・調査：遺構確認調査範囲の中央部やや西側の平坦部に位置する。耕作土を除去したところ、V層上面で黒色土が溝状に落ち込んでいるのを検出した。平面形は溝状を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、土坑上部で壁の崩落が見られる。坑底面はほぼ平坦であるが、北西側から南東側へ緩やかに傾斜している。覆土は自然堆積である。掘り込み面は、覆土の堆積状況および土坑周辺の出土遺物から、II～IV層中と考えられる。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：周辺出土遺物から縄文時代中期前半～後期前葉の可能性はある。 (立川)

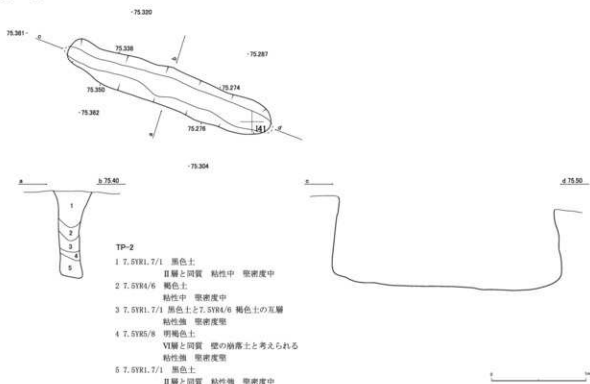
TP-1



TP-1

- 1 10YR2/1 黒色土
0.1~2mmのローム粒が20%混じる 粘性中 堅密度中
- 2 7.5YR6/8 褐色土
VI層と同質 粘性強 堅密度中
- 3 7.5YR1.7/1 黒色土
II層の沈れ込み 粘性中 堅密度軟
- 4 7.5YR6/8 褐色土
VI層と同質 粘性やや強 堅密度中
- 5 7.5YR3/2 黒褐色土
II層沈れ込み 粘性中 堅密度中
- 6 7.5YR6/8 褐色土
VI層と同質 粘性強 堅密度中

TP-2



TP-2

- 1 7.5YR1.7/1 黒色土
II層と同質 粘性中 堅密度中
- 2 7.5YR4/6 褐色土
粘性中 堅密度中
- 3 7.5YR1.7/1 黒色土と7.5YR4/6 褐色土の互層
粘性強 堅密度強
- 4 7.5YR5/8 明褐色土
VI層と同質 壁の崩落土と考えられる
粘性強 堅密度強
- 5 7.5YR1.7/1 黒色土
II層と同質 粘性強 堅密度中

図IV-13 TP-1・2

5. 焼 土

F-1 (図IV-14/表1)

位置：L・M-43

規模：0.27×0.12×0.01 (m)

確認・調査：包含層調査中にⅢ層下位で赤褐色の焼土粒の混じる暗褐色土の広がりを検出した。焼土下位に比熱層が見られることから地床炉と考えられる。焼土中から炭化物がわずかに出土している。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：焼土中から出土した炭化物の炭素年代測定を行った結果から、縄文時代後期前葉の可能性がある。(立川)

F-2 (図IV-14/表1)

位置：J 8

規模：0.27×0.16×0.04 (m)

確認・調査：Ⅱ層の調査中に赤褐色土のひろがりを確認した。断面形はレンズ状である。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：周辺の遺構・遺物からみて、縄文時代中期後半と考えられる。(佐藤)

F-3 (図IV-14/表1)

位置：M 8

規模：0.66×0.22×0.08 (m)

確認・調査：Ⅱ層の調査中に赤褐色土のひろがりを確認した。断面形はレンズ状である。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：周辺の遺構・遺物からみて、縄文時代中期後半と考えられる。(佐藤)

F-4 (図IV-14/表1)

位置：M 4

規模：0.80×0.64×0.05 (m)

確認・調査：Ⅱ層を掘り下げた段階で、H-1 住居跡の覆土中に赤褐色土のひろがりを確認した。断面形はレンズ状である。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：周辺の遺構・遺物からみて、縄文時代中期後半と考えられる。(佐藤)

F-5 (図IV-14/表1・4)

位置：M45

規模：0.98×0.80×0.11 (m)

確認・調査：Ⅱ層を掘り下げた段階で、H-4 住居跡の覆土中に赤褐色・褐色土のひろがりを確認した。断面形はレンズ状である。焼成が漸移的でないことから他所からの廃棄と考えられる。

遺物出土状況：焼土中から頁岩製の剥片が1点出土している。

時期：周辺の遺構・遺物からみて、縄文時代中期後半と考えられる。(佐藤)

F-6 (図IV-14/表1・4)

位置:M56

規模:0.55×0.35×0.17m

確認・調査:調査範囲北側の Po-1 の横に赤褐色の焼土粒の混じる暗褐色土の広がりを検出した。半蔵し土層確認を行ったところ、焼土下位に比熱層がみられることから地床炉と考えられる。検出位置がP-11の覆土上位に位置することから、P-11に伴うものと考えられる。

出土遺物状況:Ⅲ群 a 類の土器が1点出土した。

時期:出土遺物から、縄文時代中期前半あるいは、Po-1の時期から同中期後半の可能性ある。

(奥山)

6. 土器集中

Po-1 (図IV-15/表6・7/図版8)

位置:M56

規模:0.30×0.30 (m)

確認・調査:調査範囲北側の平坦部に位置する。包含層調査中、Ⅲ層上面に土器がまとまって検出した。比較的小さな土器片が狭い範囲にまとまって確認された。1個体の土器がつぶれたものとみられる。検出位置がP-11の覆土上位に位置することから、P-11に伴うものと考えられる。

出土遺物状況:Ⅲ群 a 類の土器3点、Ⅲ群 b 類の土器34点出土した。

時期:出土遺物から、縄文時代中期後半の可能性ある。

掲載遺物 土器:19はⅢ群 b 類榎林式に相当するものである。LR原体による斜行縄文が施される。底部はミガキがかけられている。

(奥山)

7. 礫集中

S-1 (図IV-14/表1・5)

位置:M-45

確認・調査:H-4住居跡の調査中に礫のまとまりを確認した。F-5と重複しており、F-5が新しい。

遺物出土状況:礫26点が出土している。

時期:周辺の遺構・遺物からみて、縄文時代中期後半と考えられる。

(佐藤)

S-2 (図IV-14/表1・5)

位置:M・N-45

確認・調査:H-4住居跡の調査中に礫のまとまりを確認した。

遺物出土状況:剥片2点と礫42点が出土している。

時期:出土した遺物からみて、縄文時代中期前半と考えられる。

(佐藤)

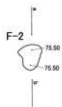
F-1



F-1 土層注記

5YR3/2 暗赤褐色土。粘性中、堅硬度中、微土粒
 (2. 5YR4/8 赤褐色土)が混じる。

F-2



1 5YR5/4 に近い赤褐色土 微土

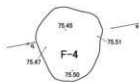


F-3



1 5YR5/6 明赤褐色土 微土
 2 5YR4/4 に近い赤褐色土 微土>II層 炭化物含む

F-4



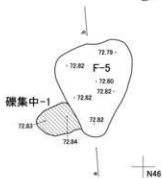
1 5YR5/6 明赤褐色土 微土



F-5

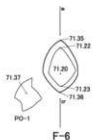
礫集中-1・2

礫集中-2



1 5YR3/6 暗赤褐色土 微土
 2 10YR2/2 黒褐色土 黒色土+微土ブロック
 3 10YR3/3 暗褐色土 黒色土>微土ブロック

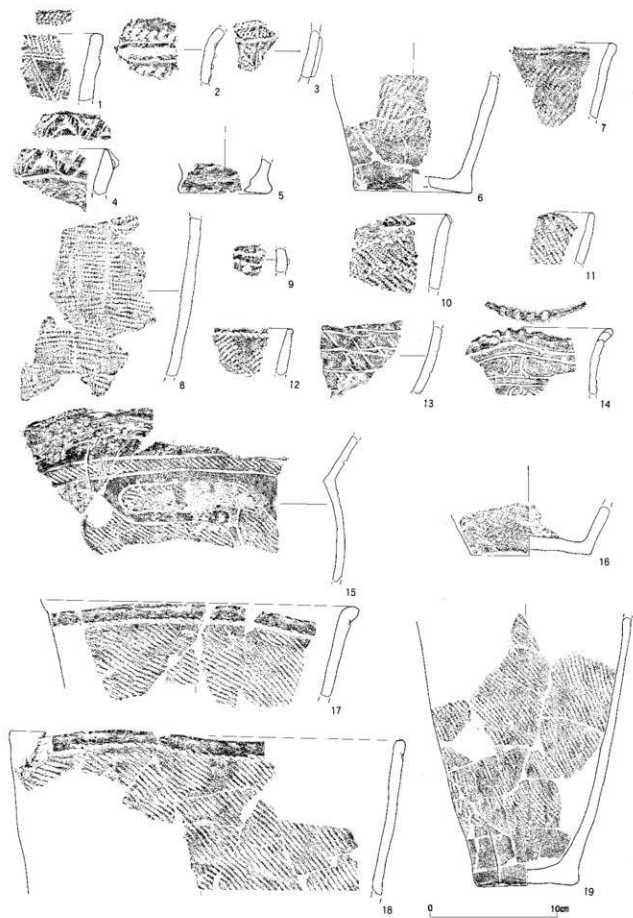
F-6



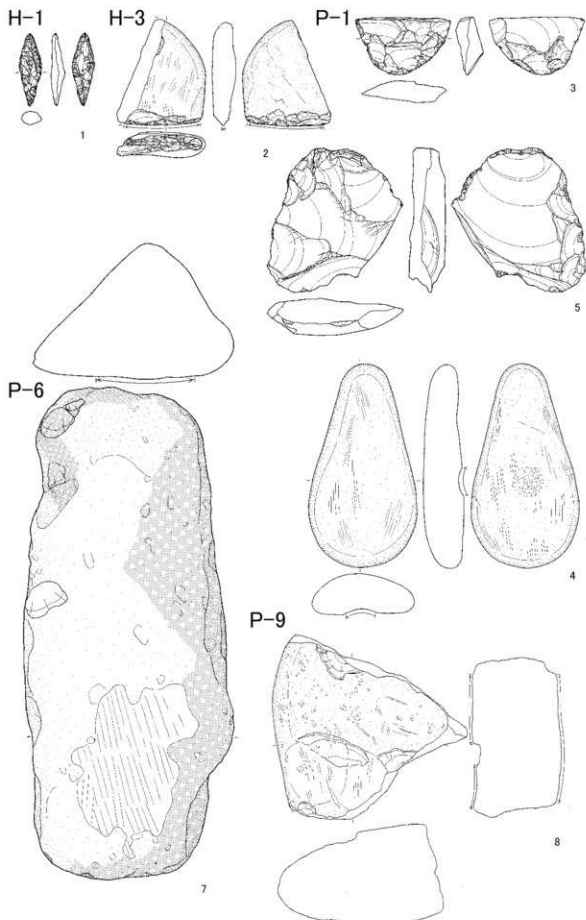
1 2. 5YR4/8 赤褐色土 φ1~2mm程度の炭化物含む
 粘り強 粘り強 土質シルト
 2 10YR2/2 黒褐色土 φ1~2mm程度の炭化物含む
 粘り強 粘り強 土質シルト



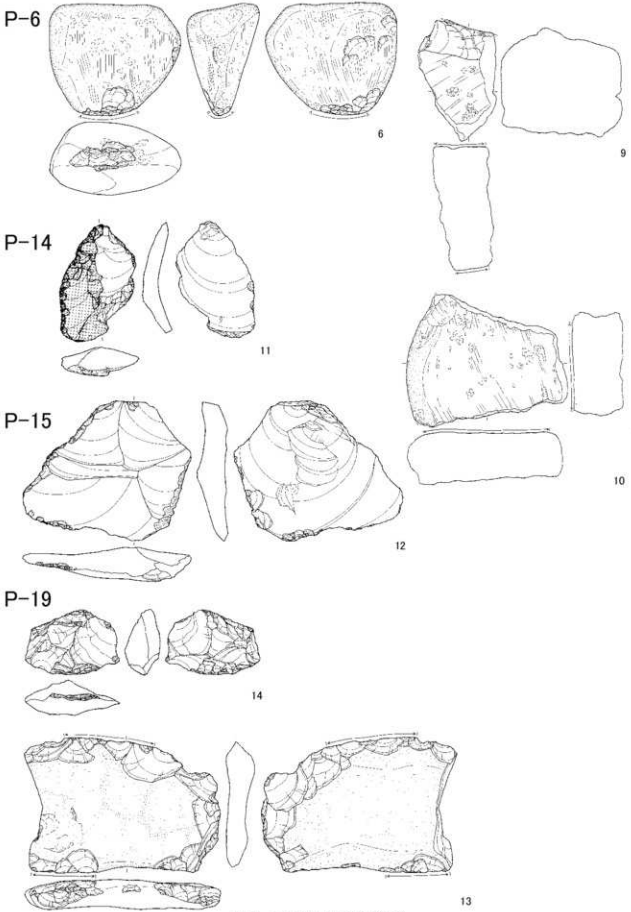
図IV-14 F-1・2・3・4・5・6、礫集中1・2



図IV-15 遺構出土の土器



図IV-16 遺構出土の石器(1)



図IV-17 遺構出土の石器(2)

V 包含層出土の遺物

1 概要

遺物は、土器23,625点、石器等5,624点の合計29,249点が出土した。土器は縄文時代前期後半、同中期前半・後半、同後期前葉・中葉、同晩期前葉・中葉のものが出土している。特に縄文時代中期前半・中期後半、同後期前葉の土器が多く出土している。石器等は剥片がほとんどを占める。定型的な石器では、たたき石、すり石、スクレイパーが多くみられる。(図V-1-1・2) (立川)

2 土器

Ⅲ群a類土器(図V-1~6・13/表9-1・2/図版10~15)

円筒土器上層a式に相当するもの(9~11)

9は頸部に4本の縄線が施されるもの。10・11は口縁部に弁状突起部をもち、貼付帯が施されるもの。10は頸部に鋸歯状の縄線が施され、貼付帯にボタン状の貼り付けをもつ。11は貼付帯の間に刺突文が施される。

円筒土器上層b式に相当するもの(1・12~14)

1は口縁部の4か所に縦の貼付帯を施し、体部との境は1条の貼付帯で区画される。口縁部の文様帯には縄線と半裁竹管状工具による刺突文があり、体部には結東羽状縄文が施される。12・13は頸部に縄線と馬蹄形瓦痕文が施される。14は頸部に縄線と半裁竹管状工具による刺突文が施される。

サイベツ式・見晴町式に相当するもの(2~7・15~38)

2は小形の鉢形土器。口唇に縄による刻み目がつく。斜行縄文の地に沈線文が施される。底部はヘラ削りされる。3は口唇に縄による刻み目が施される。突起部には1対のドーナツ状の貼付文がつく。体部には結東羽状縄文に重ねて半裁竹管状工具による沈線文が施されている。沈線文と地文地の境に貼瘤がつく。底部は磨かれている。4は突起部の貼瘤に円孔が施されている。地文は結節のある斜行縄文である。5は小形の鉢である。口縁部に4か所の突起をもつ。突起の下には貼付文がつく。地文は単節の斜行縄文である。6は3か所に突起部をもつ。口唇・底部・内面は磨かれている。体部には斜行縄文が施されている。7は口唇断面が切り出し形で、縄による刻み目が施される。体部には結東第2種羽状縄文が施される。底部はヘラ削りされる。

15~17は細い貼付文がつくもの。15は突起部に貼付文がつき、その下に沈線が施される。16は突起部の頂部が窪む。突起部に2本の貼付文がつく。口縁部には斜位・波形の沈線文が施される。17は突起部に貼付文がつく。地文は結東羽状縄文である。

18~23は縄文地に沈線のみで文様が施されるもの。18・20・21は突起部が肥厚する。19は突起部を除く口縁部に沈線文が施される。体部には結東の斜行縄文が施される。22は横位・斜位の沈線文が施される。23は3条の沈線文が施される。体部に斜行縄文がつけられている。

24・25・30は突起部に円孔文が施されるもの。24は4と同一個体とみられる。

26~33は縄文のみが施されているもので、33を除き口唇に縄による刻み目がつく。26・27・30は口縁部に突起部がつく。26の頂部は窪んでいる。26・28・30は結東羽状縄文が施される。

27・29・31は結節のある斜行縄文が施される。32・33は斜行縄文が施される。

33~38は底部。33・36・37は張り出す。35の底面に木葉痕がつく。35~38の底面には笹葉痕がつく。

Ⅲ群 b 類土器 (図V-6・14/表9-2/図版15)

Ⅲ群 b-1 類 (39~43)

39・40は肥厚する口縁部に沈線が施文され、山形隆起部に円形文が施される。地の単節の斜行縄文に重ねて、沈線で文様が施される。41は山形隆起部をもつもの。42は口唇に縄文が施されるもの。43は上半部が欠失する。底部はやや上底気味になる。いずれも地文は単節の斜行縄文である。

Ⅲ群 b-2 類 (44)

44は頸部がくびれる大形の深鉢形土器である。口縁部に小さな山形隆起部をもち、頂部が凹む。地文は節の大きい原体が不規則な方向に粗く施されている。原体の摺りが緩む部分が見られる。

(佐藤)

Ⅳ群 a 類 (図V-2・7~10・14/表9-3/図版11・13・15~17)

縄文時代後期のもの (8)

8はLRに原体による斜行縄文が施される。口縁・頸部に沈線がえがかれている。底部・内側が磨かれている。

涌元式に相当するもの (45~51)

燃糸文が施されるもの (45~48)

45は縦走する燃糸文。46・48は網目状燃糸文である。46・47の口縁部は折り返されており、波状になる。47は燃糸を縦・斜位に圧痕したもの。48は口縁下に2本の沈線がえがかれる。

沈線が施されるもの (49・50)

49は沈線で網目状が施されている。50は口唇に刻目がつく。無文地に格子状の沈線文が施される。

縄文地に沈線が施されるもの (51)

51はRL原体による斜行縄文が施される。頸部に2本の沈線を引き、胴部に沈線で曲線的な文様がえがかれる。

トリサキ式 (十腰内I式含む) に相当するもの (52~72)

縄文地に沈線が施されているもの (52・53)

52は地文がRL原体による斜行縄文で、沈線は蛇行線文を連続させているとみられる。53は波状の折り返し口縁で2本の沈線がえがかれている。地文は単節の斜行縄文である。

無文地に貼り付け・沈線が施されているもの (54)

54は折り返し口縁で無文地の波頂部に8の字状貼付文をもつ。

無文地に沈線が施されているもの (55~65)

55・56・59は口縁に緩やかな山形隆起部をもつ。55・59は口縁を折り返している。55・62は沈線は不規則な曲線・渦文がえがかれている。56は沈線で蛇行文様がえがかれている。56は太い沈線が施されている。58は緩やかに波打つ口縁をもつ。口縁には沈線で曲線がえがかれ、体部には沈線が斜めにえがかれている。59は口縁に円形がえがかれ、その円形から斜行する平行の沈線がえがかれている。60は肩部から急に内傾する。口縁部には棒状工具による円形の刺突文がつく。これを挟んで横位の沈線を2条の弧線でつなぐ沈線文が施される。

61は器壁が厚い。口縁部の一部が凹んでいる。沈線で蛇行線文がえがかれる。63は口縁に山形突起をもつ。突起の下に縦位の沈線が施され、左右には斜位の沈線がつく。64・65は同一個体とみられる土器である。胎土が類似し、両方とも器壁が厚い。沈線で蛇行文、渦巻文のもつものである。

沈線と燃糸文が施されているもの (66)

66は沈線で不規則な曲線がえがかれ、その下には網目状燃糸文が施される。

無文のもの (67)

67は体部にケズリの調整痕がみられる。

底部 (68-70)

68はRL原体による斜行縄文が施される。69・70は無文地の底部。70は内外面のミガキ調整痕が明瞭である。砂粒を多く含む。

十腰内Ia式に相当するもの (71a・71b・72)

71a・72は3本一組の沈線を用いて蛇行文をえがいたものである。71a・bは同一個体の土器である。71aは赤色顔料が一部付着している。

大津式に相当するもの (73-79)**縄文地に沈線によって文様が施されるもの (73・74)**

73は口縁部が欠失している。体部は緩く内湾する。74は頭部が強く外傾する。いずれも、磨り消しが不十分で、地の縄文が部分的に残されている。内面にはケズリがみられる。

無文地に沈線が施されるもの (75-77)

75は口縁下に2本の横走沈線に連結弧線文が施され、胴部は無文になる。砂粒が多く含まれる。76は柳歯状施文具によりえがかれた文様を、太い沈線で縁取るもの。外面が磨かれている。77は口縁下にクランク状(鍵状)文が連続する。

無文のもの (78)

胴部から口縁部に向かってほぼ垂直に立ち上がる。外面にはケズリがみられる。

底部 (79)

無文地の底部である。

白坂3式に相当するもの (80-86)

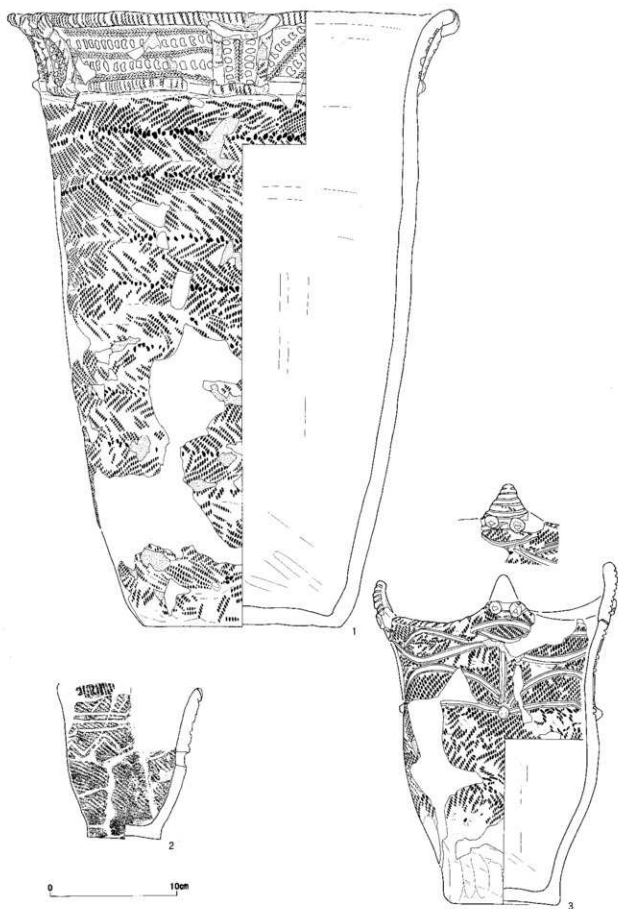
80-86は多重沈線による鋸歯状文・弧線文などが密に施される。口縁部は緩い波状で口唇断面は角形で縄文が施されている。81-84は頭部のくびれ部に幅の狭い無文帯を有する。80は胴部にクランク状(鍵状)文が連続する。82・84は補修孔を持つ。82・83は口縁下に横走沈線がえがかれる。86の外面は無文地、内面にLR原体で斜行縄文を施した後、半円状の多重弧状沈線文を重ねたもの。上部は磨り消されている。80-83はLR原体による斜行縄文が施される。84・85はRL原体による斜行縄文が施される。

IV群b類 (図V-10・15/表9-4/図版17)**縄文時代後期のもの (87・88)****ウサクマイC式に相当するもの (87・88)**

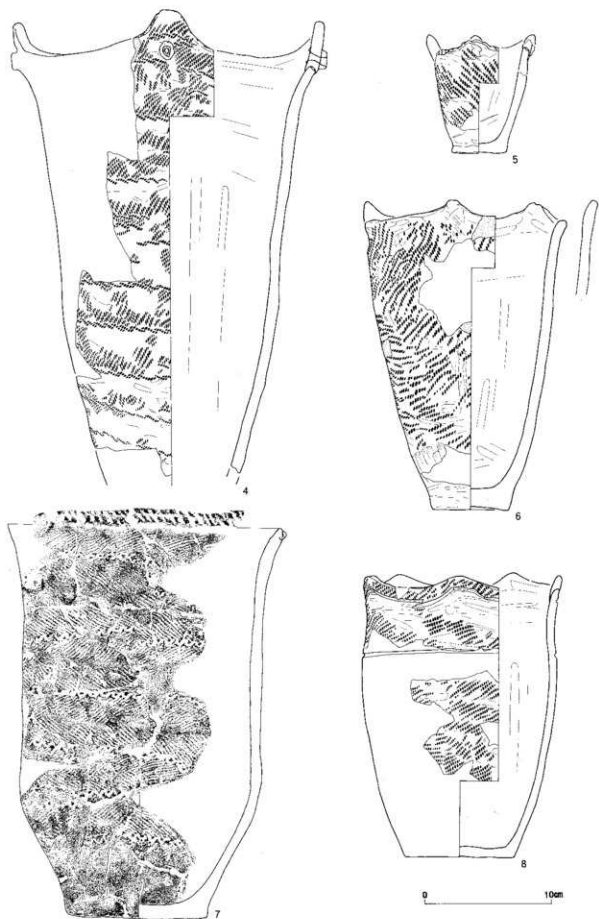
87・88は緩い波状口縁である。口唇断面が角形で、縄文が施されている。RL原体による斜行縄文が施される。88は口縁に横走沈線が施される。

V群 (図V-10・15/表9-5/図版23)**縄文時代晩期のもの (89)**

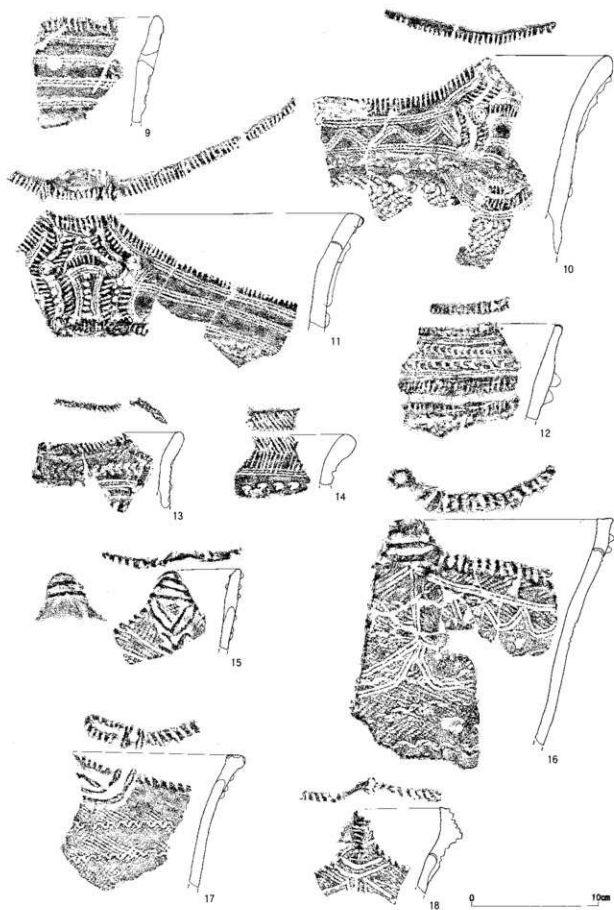
口縁部と考えられる。一部赤色顔料が付着している。



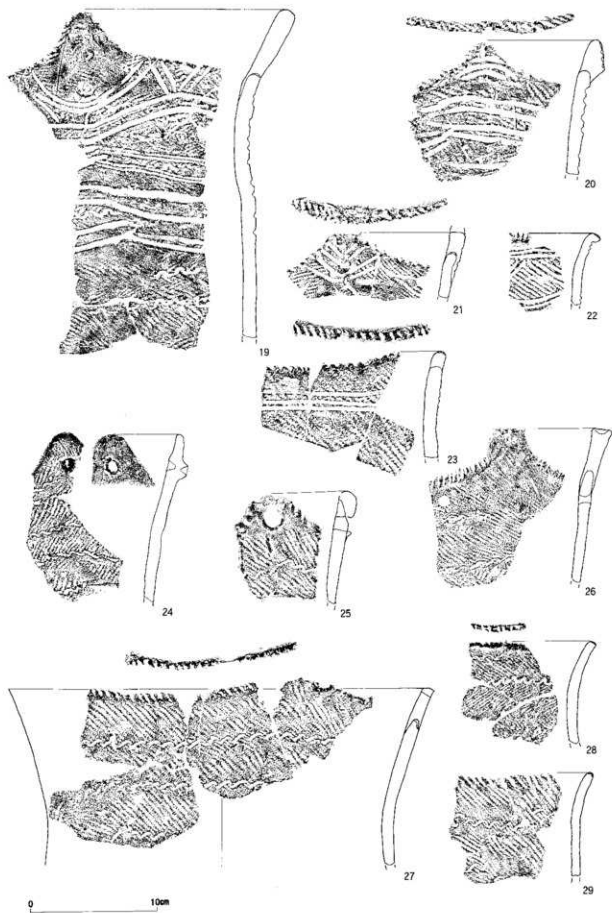
図V-1 包含層出土の土器(1)



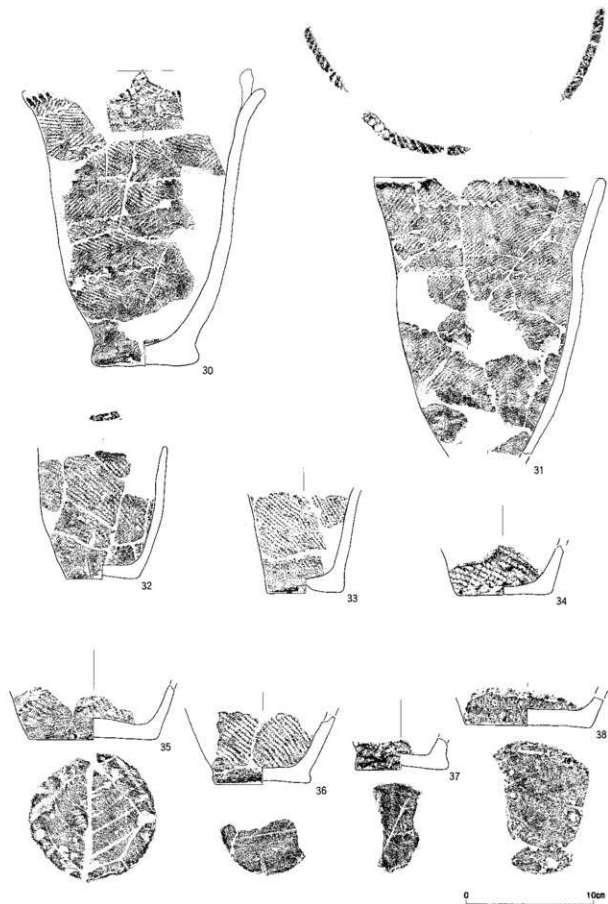
図V-2 包含層出土の土器(2)



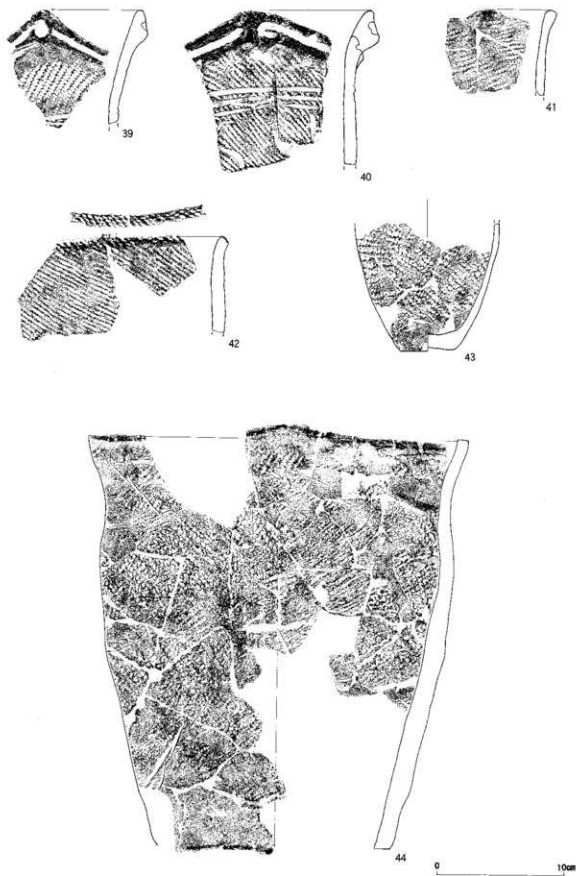
図V-3 包含層出土の土器(3)



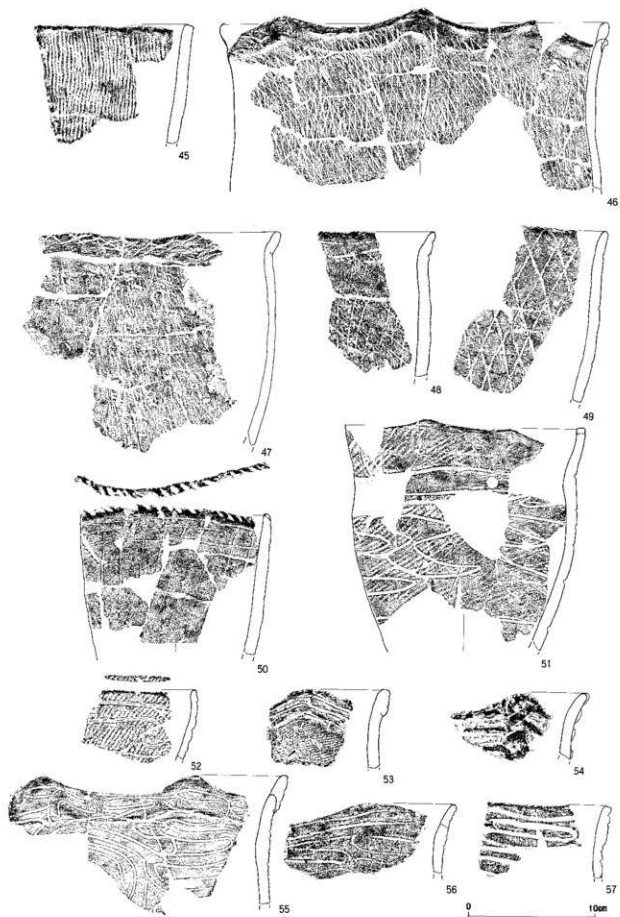
図V-4 包含層出土の土器(4)



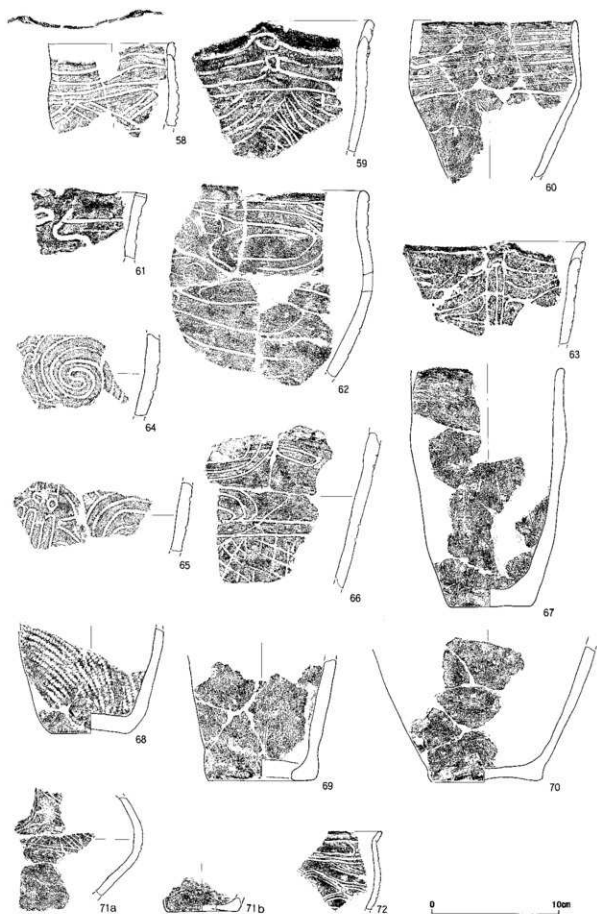
図V-5 包含層出土の土器(5)



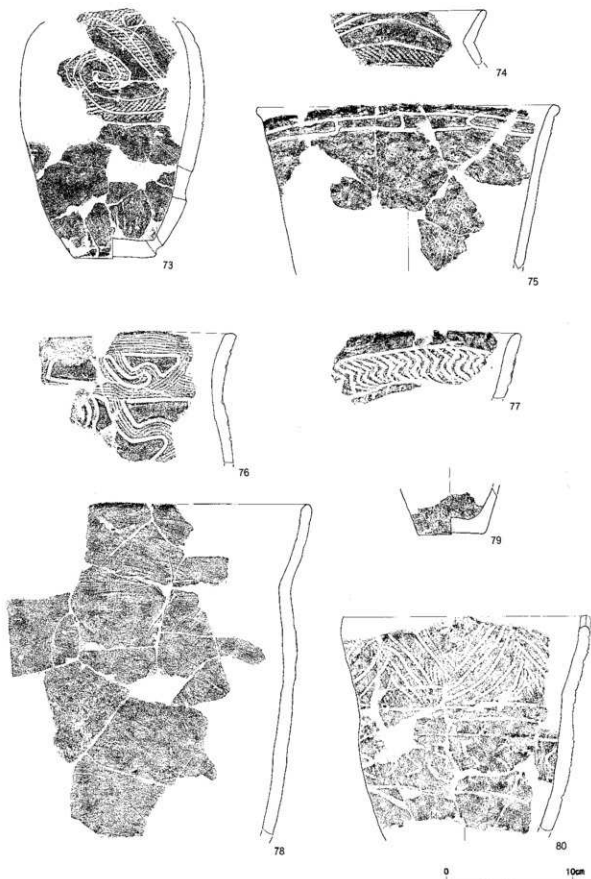
図V-6 包含層出土の土器(6)



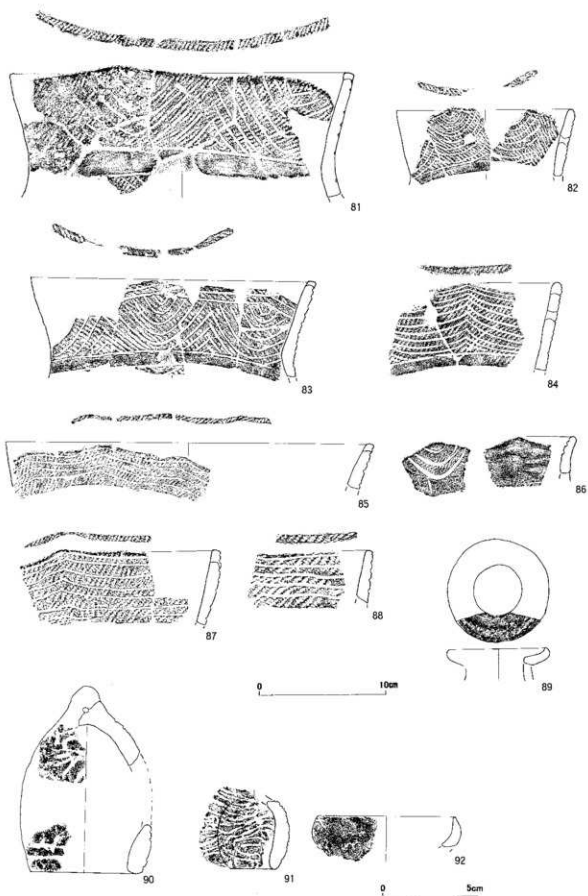
図V-7 包含層出土の土器(7)



図V-8 包含層出土の土器(8)



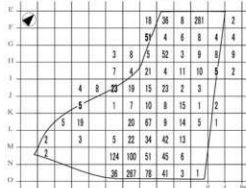
図V-9 包含層出土の土器(9)



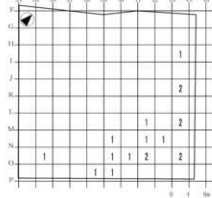
図V-10 包含層出土の土器(10)・土製品

包含層出土遺物総計 29,250 点

A地区



B地区

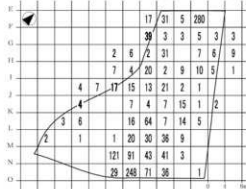


C地区

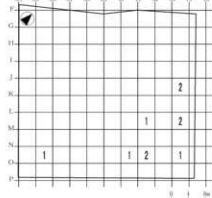


包含層出土土器総計 23,210 点

A地区



B地区



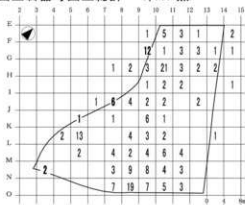
C地区



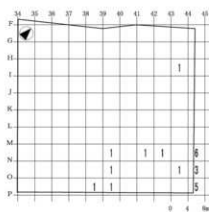
図V-11 包含層遺物分布図(1)

包含層出土石器等出土総計 5,447 点

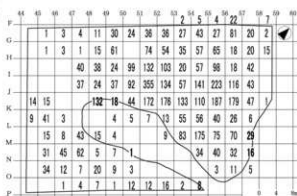
A地区



B地区



C地区



図V-12 包含層遺物分布図(2)

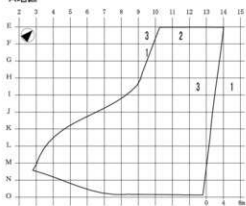
土製品 (図V-10・15/表9-5/図版23)

90・91は鐎形土製品である。92はミニチュア土器。手づくねである。

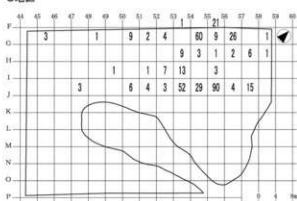
(奥山)

II群b類 400点

A地区

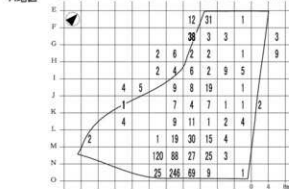


C地区

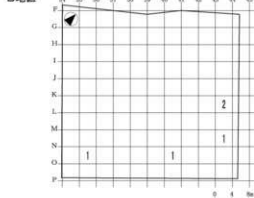


III群a類 7,945点

A地区



B地区



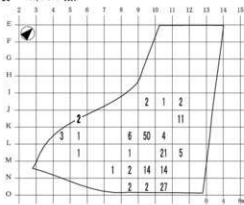
C地区



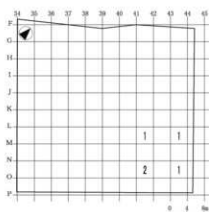
図V-13 包含層遺物分布図(3)

Ⅲ群 b 類 2,094 点

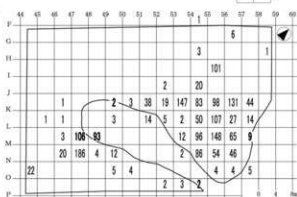
A地区



B地区

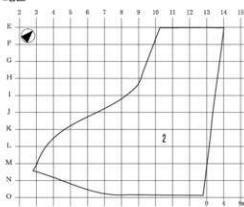


C地区

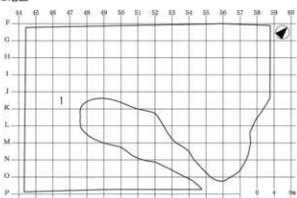


Ⅳ群 3 点

A地区

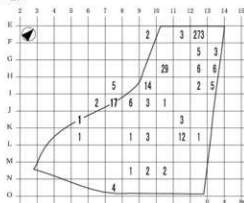


C地区

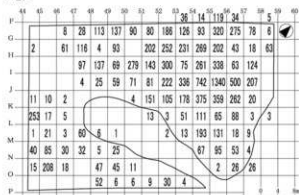


Ⅳ群 a 類 12,678 点

A地区



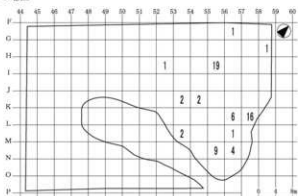
C地区



図Ⅴ-14 包含層遺物分布図(4)

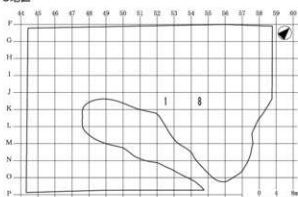
IV群b類 62点

C地区



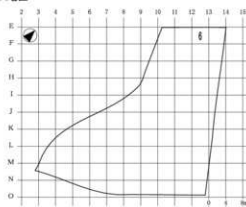
V群a類 9点

C地区



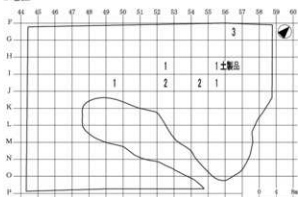
V群b類 6点

A地区



焼成粘土塊・土製品 11点

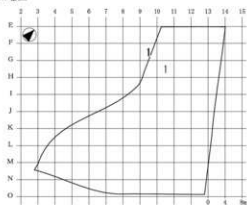
C地区



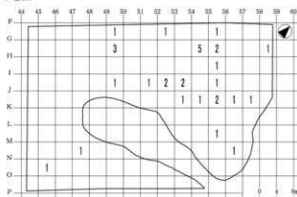
図V-15 包含層遺物分布図(5)

石鏃 35点

A地区

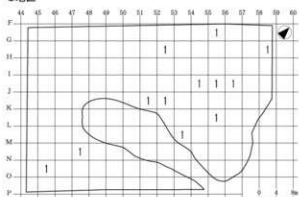


C地区



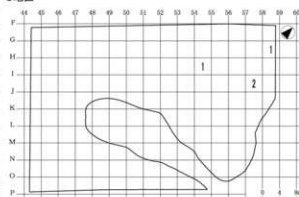
石槍・ナイフ 12点

C地区



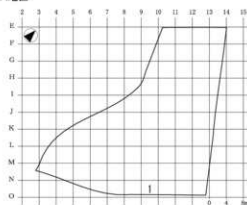
石錐 4点

C地区

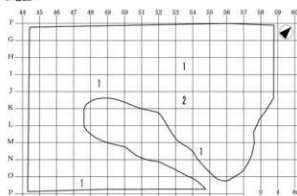


つまみ付ナイフ 8点

A地区



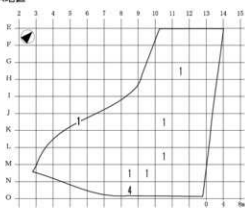
C地区



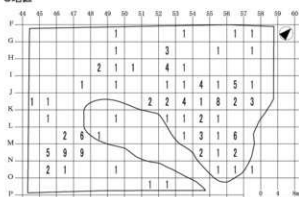
図V-16 包含層遺物分布図(6)

スクレイパー 132点

A地区

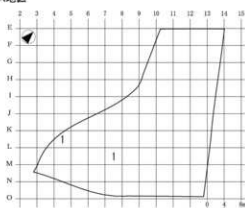


C地区

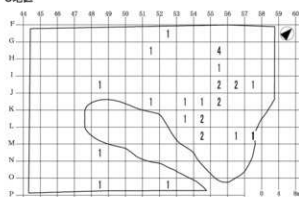


石斧 30点

A地区

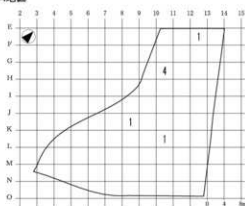


C地区

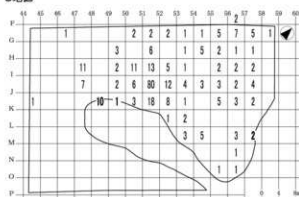


たたき石 307点

A地区



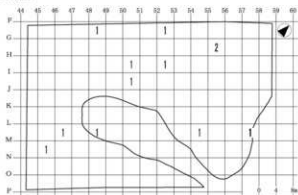
C地区



図V-17 包含層遺物分布図(7)

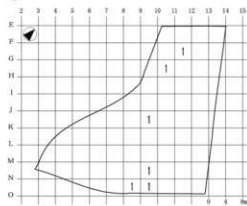
すり石 12点

C地区

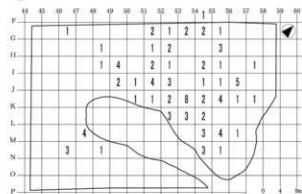


扁平打製石器 100点

A地区

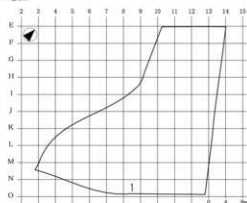


C地区

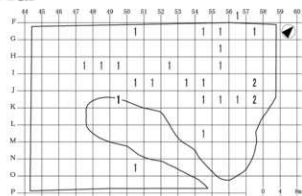


北海道式石冠 26点

A地区



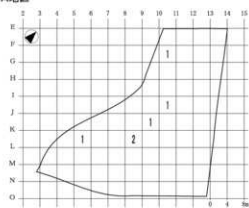
C地区



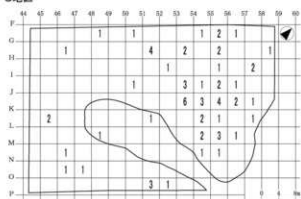
図V-18 包含層遺物分布図(8)

台石・石皿 71点

A地区

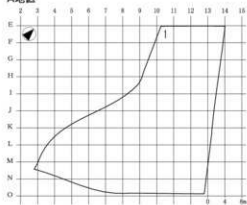


C地区

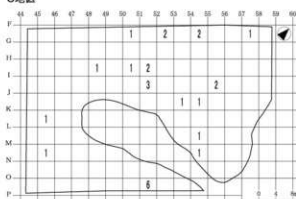


砥石 28点

A地区

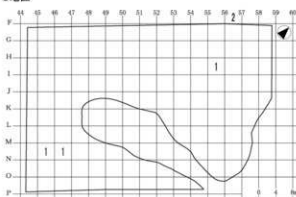


C地区



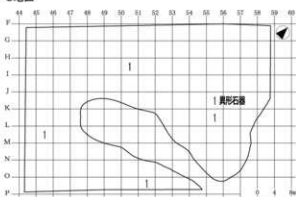
石錘 5点

C地区



石製品・異形石器 5点

C地区



図V-19 包含層遺物分布図(9)

3 石器等

包含層からは剥片石器263点、礫石器589点、剥片1,629点、礫・礫片2,960点、石製品5点の合計5,448点が出土した。この中から定型的なものを中心に、94点を抽出し掲載した。石器に使用される石材は、剥片石器は頁岩が大部分を占め、ほかに珪岩、黒曜石がわずかに認められる。礫石器では、器種ごとに使用される石材の傾向がみられる。石斧は泥岩・片岩、すり石は砂岩・凝灰岩・安山岩、たたき石は砂岩・安山岩、砥石は砂岩が主体となる。分類別では石鏃(4.0%)、スクレイパー(15.7%)、石斧(3.5%)、たたき石(35.6%)、すり石(16.2%)、台石・石皿(8.4%)、砥石(3.4%)が多く出土している(())内は石器類の中の占有率)。特徴的なのはたたき石、すり石、スクレイパーの出土が多くみられる。

礫・礫片を除く石器類の出土分布は、B地区を除くA・C地区の全域から出土している。特にC地区にあるさわの兩岸に多く分布する。調査区中央に位置するB地区は、無遺物層に相当するローム層まで耕作を受けており、遺物の出土はみられなかった。(図V-12)

石鏃(図V-16・20-1~19/表10/図版18)

石鏃は35点出土している。分布は35点中31点がC地区の沢の北側から出土している。分布は三角形のものが縄文時代前期後半(Ⅱ群b類)、有茎のものが同中期前半(Ⅲ群a類)・後半(Ⅲ群b類)、同後期前葉(Ⅳ群a類)と分布が重なる。使用される石材は、頁岩が主体でわずかに黒曜石がみられる。

1は三角形で、平基のものである。2~6は木の葉形・菱形のものである。2は棒状に近い形状で、粗い加工のものである。3は薄く作られている。6は尖頭部と基部がわずかに欠損している。7~19は有茎のものである。7・18は尖頭部、9・13~15は尖頭部と基部、19は基部が欠損している。10は基部にアスファルトが付着している。18は被熱により基部が膨張している。石材は2・17~19は黒曜石、残りはすべて頁岩である。

石槍・ナイフ(図V-16・20-20~23/表10/図版18)

石槍・ナイフは14点出土している。分布はC地区の沢の北側に多くみられる。縄文時代中期前半(Ⅲ群a類)・後半(Ⅲ群b類)、同後期前葉(Ⅳ群a類)と分布が重なる。石材は頁岩が圧倒的に多いが、わずかであるが黒曜石もみられる。

20は有茎のものである。21~23は茎部と身部との境が不明瞭のものである。21は菱形、22・23は木の葉形のものである。いずれも最大幅が身部の中位にある。22・23に光沢面がみられる。23・24は加工が粗い。石材は20・21が黒曜石、23・24が頁岩である。

石鏃(図V-16・20-24・25/表10/図版18)

石鏃は4点出土している。すべて剥片の一部に刺突部を作出したものである。分布はC地区の沢の北側に集中している。使用される石材は、頁岩である。

24・25はともに剥片の一部に刺突部を作出したものである。24は周縁に粗い加工がみられる。24に光沢面がみられる。石材は、24・25ともに頁岩である。

つまみ付ナイフ(図V-16・20-26~31/表10/図版18)

つまみ付ナイフは7点出土している。すべて縦長の剥片を使用したもので、下端部は曲線状の刃部が設けられるものが多い。分布はB地区を除くA・C地区から出土している。使用される石材は、頁岩が主体である。

26は、表面の周縁全体と裏面右側縁下部に刃部がみられる。27は、表面の右側縁の一部を除く周縁と裏面右側縁下部に刃部がみられる。28は、表面の右側縁の一部を除く周縁と裏面左側縁に刃部がみられる。28は器面全体が被熱している。29～31は表面前面に二次加工が施されている。石材は、すべて頁岩である。

スクレイパー (図V-17・21-32-40、22-41～43/表10/図版18・19)

スクレイパーは132点出土している。石器類の中では、たたき石 (304点)、すり石 (139) に次いで出土数が多い。素材となる剥片の側縁や一部に急角度の刃部が設けられるものが多い。分布はB地区を除くA・C地区から出土している。特にC地区の沢の北側に多くみられる。使用される石材は、頁岩が大部分を占め、珪岩・メノウ質頁岩がみられる。

32～41は表面の側縁に直線や外湾する刃部を作出したものである。32～35・38・40は裏面の側縁にも刃部がみられる。42は側縁を加工して円形の刃部を作出したものである。43は表面前面と裏面の下端部に刃部がみられる。下端部の刃部に潰れがみられることから、石錐として使用された可能性がある。34・36・39～41には光沢面がみられる。石材は、すべて頁岩である。

両面調整石器 (図V-22-44/表10/図版19)

両面石器は1点だけの出土である。欠損品で残存部位から楕円形を呈すると思われる。表面に礫表皮を残す。ナイフの欠損品と思われる。石材は頁岩である。

石斧 (図V-17・22-45～51/表10/図版19)

石斧は30点出土している。破片が大半である。分布はA・C地区から出土している。特にC地区の沢の北側に多くみられる。石材は、泥岩・片岩が主体である。

45～50は、扁平な素材から擦り切り手法によって切り取られたものを使用している。擦り切りは表・裏面の両方から行われ、厚みが15～20mmになったところで折り取られ、石斧の素材として使用されている。51は棒状礫を研磨と敲打により整形し、研磨により刃部を作出しているものである。石材は、45・47・51が片岩、46・48～50が泥岩である。

たたき石 (図V-17・23-52～58、24-59/表10/図版20)

たたき石は304点出土している。石器類の中では最も出土数が多い。扁平礫・楕円礫・棒状礫の端部や側縁部にたたき痕があるものが多い。使用される石材は、砂岩・安山岩・凝灰岩などである。分布はC地区の沢の北側に多くみられる。縄文時代中期前半 (Ⅲ群a類)・後半 (Ⅲ群b類)、同後期前葉 (Ⅳ群a類) と分布が重なる。

52は楕円礫の一端に、53・54は棒状礫の両端にたたき痕がみられるものである。55・56は扁平礫の側縁にたたき痕がみられるものである。57は腹背面と側縁に、58・59は腹背面にたたき痕がみられる。くぼみ石と呼ばれるものである。石材は、すべて砂岩である。

すり石 (図V-18・60～65、図V-25-66～70、図V-26-71～76、図V-27-77/表10/図版20・21)

64～70は扁平礫を打ち欠いて半円状もしくは長方形に整形し、弦を擦っている。扁平打製石器と呼ばれるものである。100点が出土している。すり石の中では最も出土数が多い。使用される石材は、凝灰岩・安山岩・砂岩が多い。

64・65は素材の形状をほとんど変えず、弦の部分を作出したものである。66は扁平礫を使用し、弦の作出のほかに長軸方向の両端に打ち欠きによる抉りがみられるものである。67～70は、素材を半円状もしくは長方形に全体を打ち欠きにより整形し、弦を擦ったものである。石材は、60～63・67が砂岩、64～66・69が凝灰岩、68が安山岩である。

71～77は北海道式石冠と呼ばれるものである。26点が出土している。石材は安山岩が主体で、ほか

に砂岩・凝灰岩がみられる。71～77はいずれも中央部に擦り面と並行する溝状の把握部がみられるものである。敲打により把握部の作出、器形の整形を行っている。75・76は、上部の長軸方向の周縁に敲打により浅い溝が作出されている。77は、上部の短軸方向の周縁に、把握部の溝と直交するように敲打により浅い溝が作出されている。石材は、71～74・77が安山岩、75・76が砂岩である。

台石・石皿 (図V-19・27-78・79/表10/図版22)

台石・石皿は72点出土している。自然礫あるいは板状礫の形状を変えずに平坦面を擦り面として利用したものである。石材は安山岩・砂岩である。

77・78は、板状の素材を大きく形状を変えずに使用したものである。側面・裏面には自然面がみられる。78は、残存部分から使用面が皿状にくぼむと思われる。石材は、77・78ともに安山岩である。

砥石 (図V-19・28-80-83/表10/図版22)

砥石は30点出土している。完形品は無くすべて破片である。石材は、砂岩が主体でわずかに安山岩がみられる。80は厚さ3cmほど、81-83は厚さ5cm前後の板状の素材を使用している。80・83は表面、81・82は表裏面に擦り跡がみられる。石材は、いずれも砂岩である。

石錘 (図V-19・28-84・85、図V-29-86/表10/図版22)

石錘は3点出土している。いずれも長軸方向の両端に打ち欠きがあるものである。石材は、安山岩と砂岩が使用されている。

84-86はいずれも長軸方向の両端に打ち欠きがみられる。84は石錘としたが、短軸方向の下部にも打ち欠きがあり、弦を作出している可能性がある。さらに弦部分に擦り跡がみられることから、扁平打製石器の可能性がある。石材は84が安山岩、85・86は砂岩である。

石核 (図V-29-87-89/表10/図版22)

石核は16点出土した。石材は頁岩が大部分を占め、ほかに珪岩、メノウ質頁岩がわずかにみられる。使用される石材の大きさは、直径5～15cmほどの円形もしくは楕円形の礫礫が利用されている。

88・89は、ともに10cmほどの礫礫が使用されている。いずれも礫表皮面が残る。石材は87・88が頁岩、89がメノウ質頁岩である。

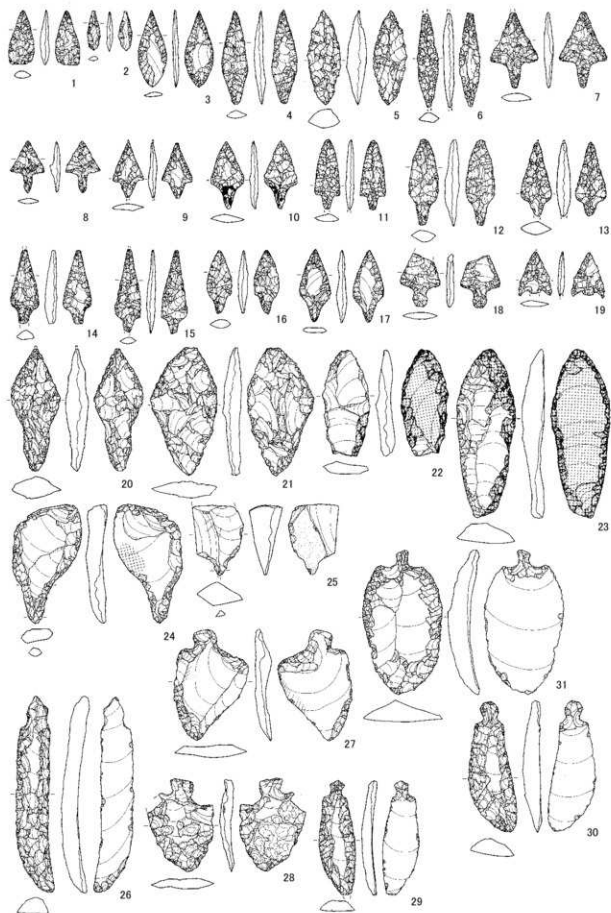
石製品 (図V-19・30-90-94/表10/図版23)

石製品は5点出土した。

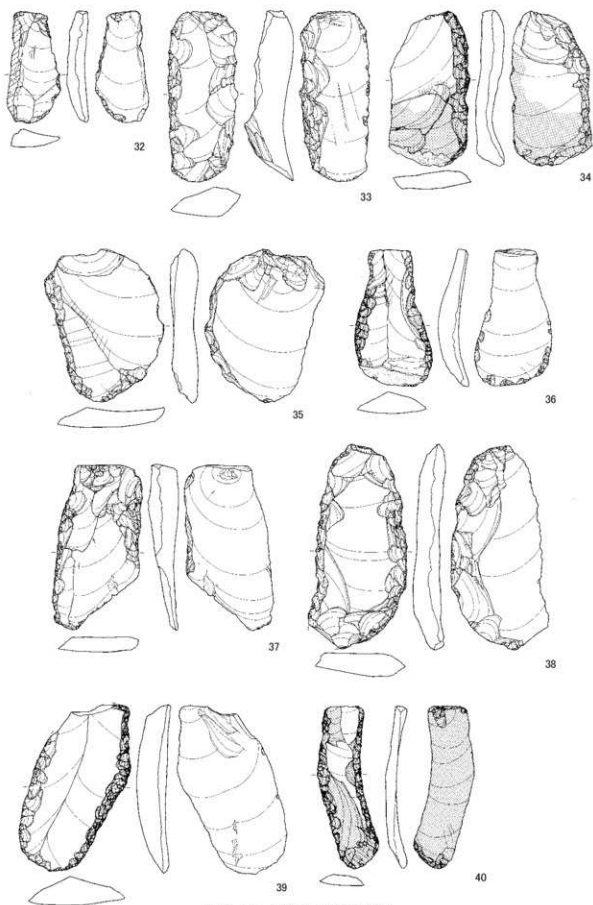
90は異形石器である。剥片を利用し、上部につまみのような突起部を作出している。周縁は粗い加工が施されている。石材は、黒曜石である。91は楕円形を呈する石製品である。厚さ1cmほどの板状の素材を粗い打ち欠きにより整形している。表・裏面にも粗い打ち欠きによる加工がみられる。石材は、砂岩である。92は欠損品であるが、残存部位から楕円形を呈する石製品と思われる。表・裏面、側縁を研磨により整形している。さらに側縁には断面がU字型の細い溝がめぐるように施されている。石材は、軽石である。93・94はいずれも破片である。93は、残存部位から楕円形を呈する石製品と思われる。表・裏面、側縁を粗い打ち欠きによる整形がみられる。石材は、軽石である。94は、表面に断面がU字型の細い溝が施されている。石材は、安山岩である。

剥片

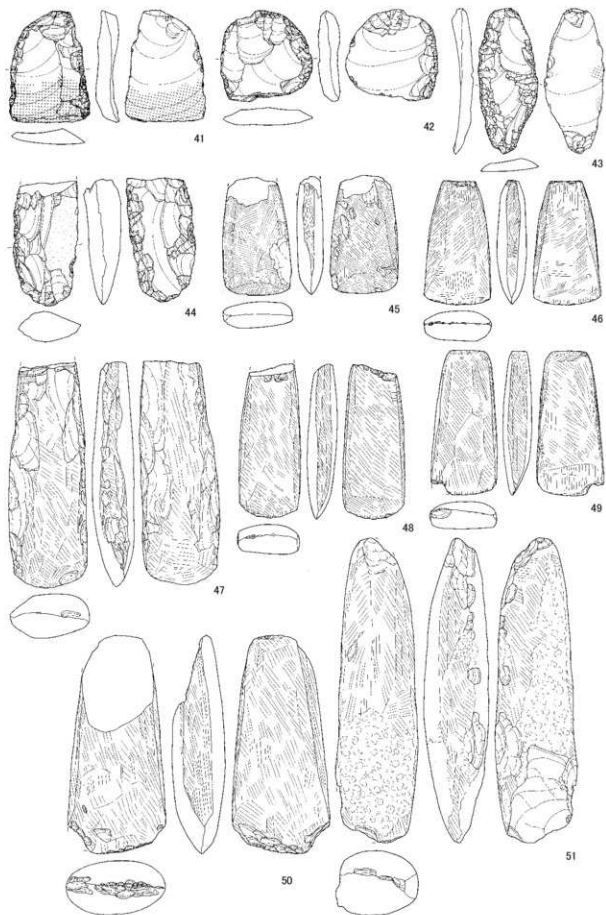
剥片は1,629点出土している。調査区の全域から出土している。ほかの石器類と同様、C地区の沢の北側に多くみられる。石材は圧倒的に頁岩が占め、わずかに黒曜石・珪岩・メノウ質頁岩などがみられる。



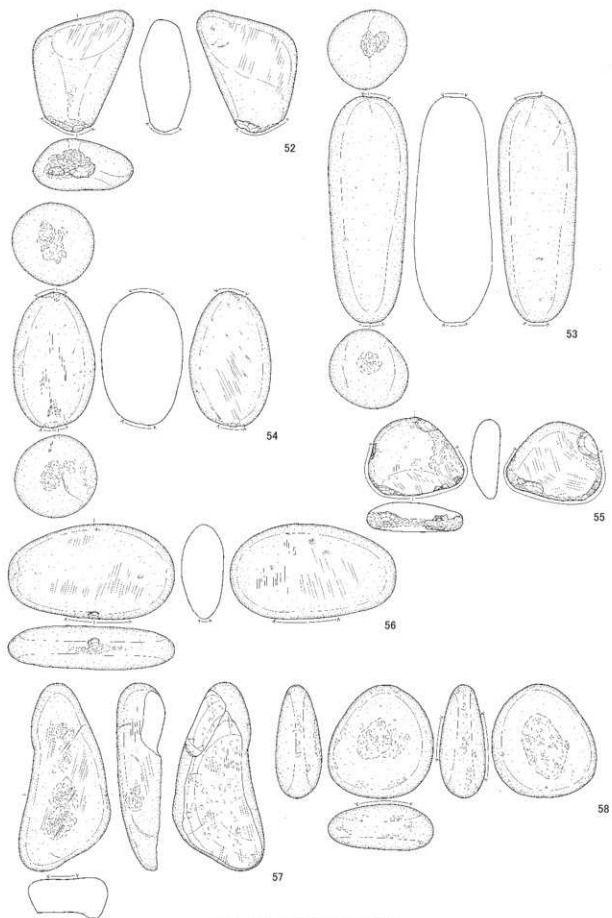
図V-20 包含層出土の石器(1)



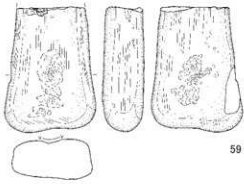
図V-21 包含層出土の石器(2)



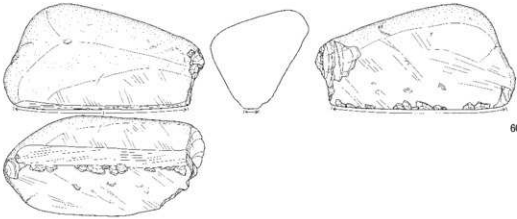
図V-22 包含層出土の石器(3)



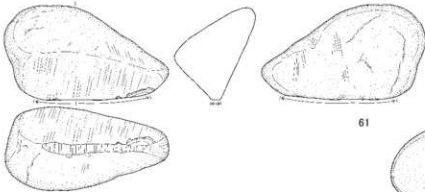
図V-23 包含層出土の石器(4)



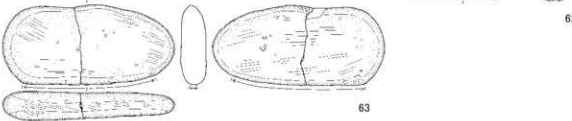
59



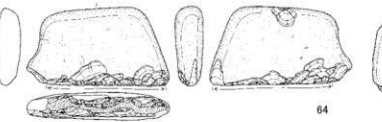
60



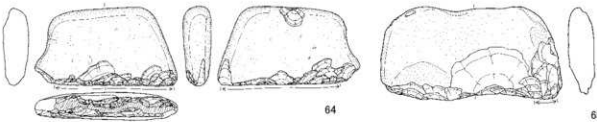
61



62



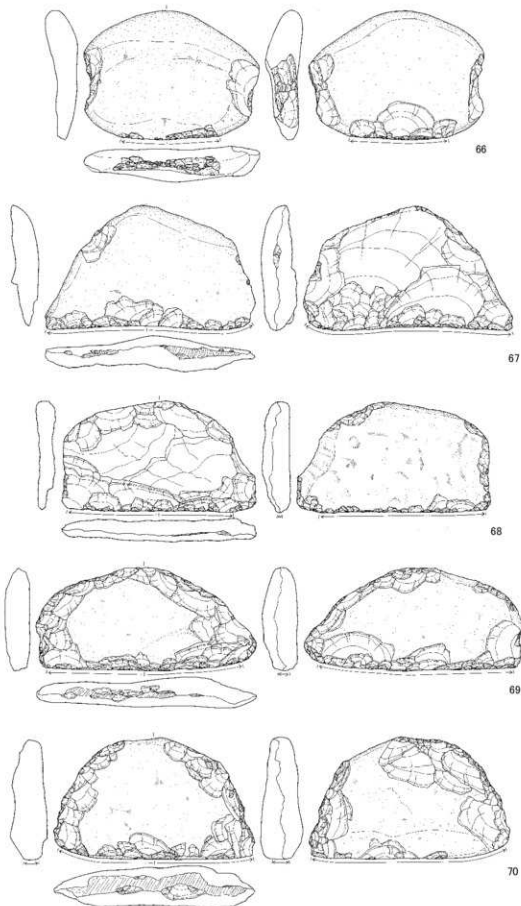
63



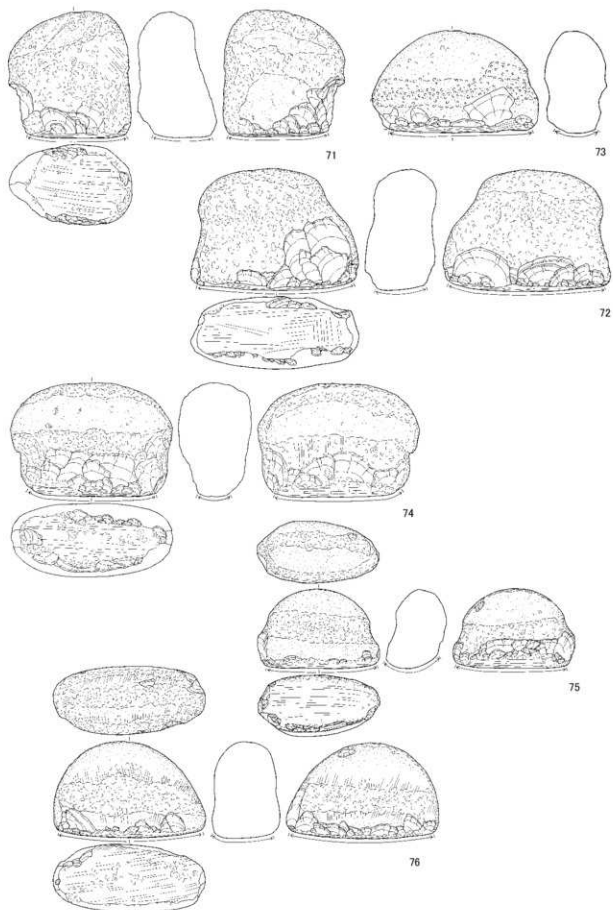
64

65

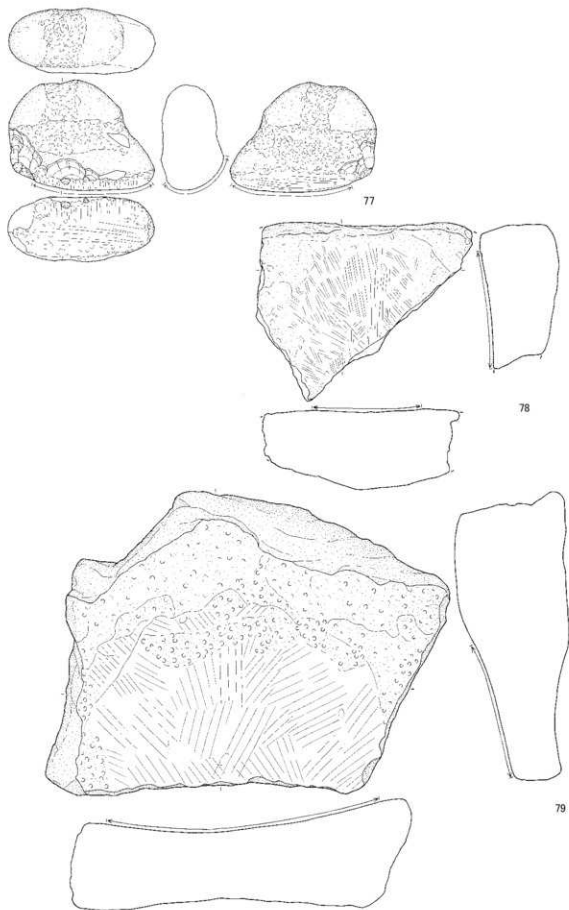
図V-24 包含層出土の石器(5)



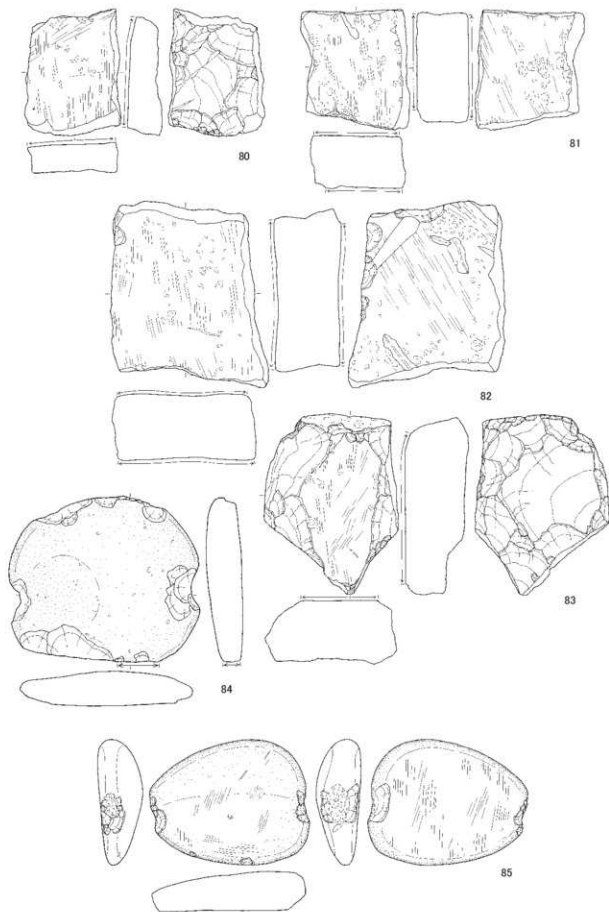
図V-25 包含層出土の石器(6)



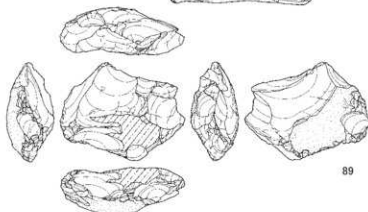
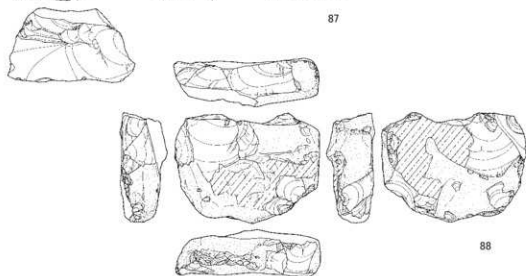
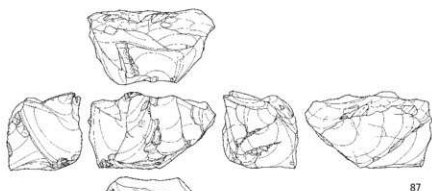
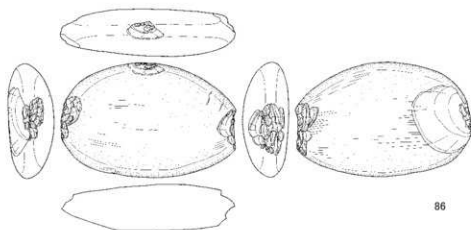
図V-26 包含層出土の石器(7)



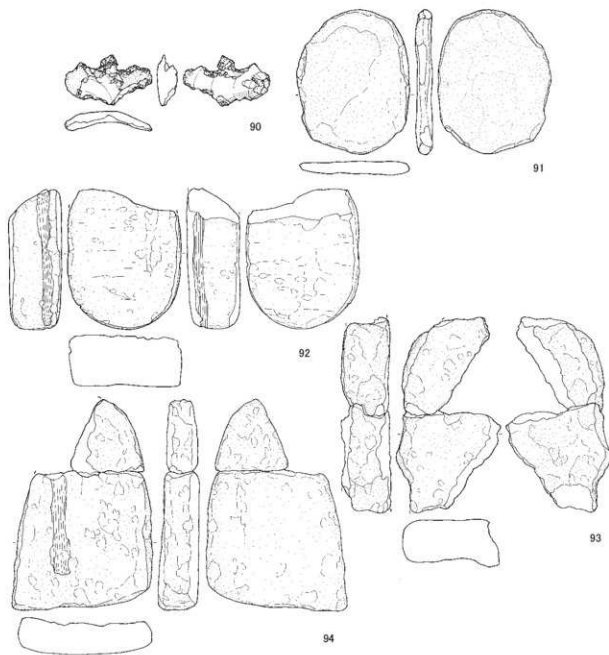
図V-27 包含層出土の石器(8)



図V-28 包含層出土の石器(9)



図V-29 包含層出土の石器(10)



図V-30 包含層出土の土・石製品

礫・礫片

礫・礫片は28,875点出土している。調査区の全域から出土している。特にC地区の沢の北側に多くみられる。これは沢に向かう斜面中に礫層が露出しているためである。石材は凝灰岩・砂岩・安山岩が占めている。礫石器の石材に利用されている可能性がある。(立川)

Ⅵ 自然科学的分析

当別川左岸遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

(株)加速器分析研究所

1 測定対象試料

当別川左岸遺跡は、北海道北斗市当別552・553に所在する。測定対象試料は、H-2 HF-1 焼土中出土木炭（1：JAA-123275）、F-1 焼土中出土木炭（2：JAA-123276）の合計2点である（表1）。調査現場では土壌サンプルとして焼土が採取され、後に未洗浄、未選別の焼土の中から木炭が直接採取された。

試料1は住居跡床面の焼土から、試料2は遺物包含層中で検出された焼土から出土した。

2 測定の意義

試料が出土した住居跡、焼土の時期を特定する。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA: Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l（1 M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxII）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}C$ は、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代（Libby Age: yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0 yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）

を使用する (Stuiver and Polach 1977)。14C年代は $\delta^{13}C$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。14C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、14C年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の14C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) **pMC (percent Modern Carbon)** は、標準現代炭素に対する試料炭素の14C濃度の割合である。pMCが小さい (14Cが少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (14Cの量が標準現代炭素と同等以上) の場合 **Modern**とする。この値も $\delta^{13}C$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の14C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の14C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、14C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma=68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma=95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が14C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}C$ 補正を行い、下1桁を丸めない14C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal9データベース (Reimer et al 2009) を用い、OxCalM.1較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、14C年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「calBP」) という単位で表される。

6 測定結果

試料の14C年代は、H-2 HF-1 焼土中出土木炭1が 4120 ± 30 yrBP、F-1 焼土中出土木炭2が 3610 ± 30 yrBPである。暦年較正年代 (1σ) は、1が $2856 \sim 2621$ calBC、2が $2021 \sim 1932$ calBCの間に各々複数の範囲で示される。1が縄文時代中期中葉から後葉頃、2が縄文時代後期前葉頃に相当する (小林編2008)。

試料の炭素含有率はいずれも60%以上の十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}C$ (‰) (AM Σ)	$\delta^{13}C$ 補正あり	
						Libby Age yrBP	pMC (%)
RAA-123275	1	H-2 HF-1 焼土中	木炭	AAA	-26.7 ± 0.27	$4,120 \pm 30$	59.9 ± 0.22
RAA-123276	2	F-1 焼土中	木炭	AAA	-26.71 ± 0.43	$3,610 \pm 30$	63.79 ± 0.22

[#5615]

表 2

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年校正 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age yrBP	pMC (%)			
IAA-123275	4,150 \pm 30	59.69 \pm 0.21	4,117 \pm 29	2856 caBC-2812 caBC(20.6%)	2866 caBC-2804 caBC(24.8%)
				2747 caBC-2725 caBC(9.7%)	2776 caBC-2770 caBC(0.7%)
				2698 caBC-2621 caBC(37.9%)	2762 caBC-2577 caBC(69.9%)
IAA-123276	3,640 \pm 30	63.57 \pm 0.21	3,610 \pm 27	2021 caBC-1993 caBC(23.0%)	2032 caBC-1895 caBC(95.4%)
				1983 caBC-1932 caBC(45.2%)	

[参考値]

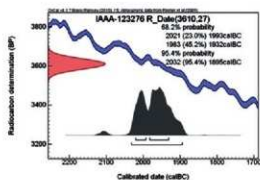
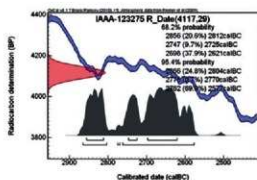
文献

Bronk Ramsey C 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates Radiocarbon51(1) 337-360

小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション

Reimer P J et al 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves 0 - 50,000 years cal BP Radiocarbon51(4) 1111-1150

Stuiver M and Polach H A 1977 Discussion Reporting of ^{14}C data Radiocarbon19(3) 355-363



[参考] 暦年校正年代グラフ

表1 当別川左岸遺跡 検出遺構規模一覧

遺構種別	遺構名	調査区	規模 (m)					時期 (縄文時代)	特徴	図番号	図版番号
			上層		下層		深さ				
			長軸	短軸	長軸	短軸					
住居跡	H-1	N5	3.25	2.35	2.95	2.73	0.15	中期前半	図Ⅳ-4	図版3	
	H-2	L・M-41・42	2.11	1.98	2.02	1.89	0.21	中期前半	図Ⅳ-5	図版3	
	H-3	L・M-45、L46	2.65	2.24	2.54	2.08	0.18	中期後半	図Ⅳ-5	図版4	
	H-4	L・M-45、L46	4.53	3.53	4.43	3.42	0.24	中期	図Ⅳ-6	図版4	
土 坑	P-1	F・G-56・57	2.50	(1.88)	2.38	1.79	0.21	中期前半～後期前葉	図Ⅳ-7	図版4・5	
	P-2	G-56・57	1.23	0.72	1.08	0.57	0.30	中期前半～後期前葉	図Ⅳ-7	図版5	
	P-3	G-56・57	(2.04)	1.45	(1.87)	1.31	0.19	中期前半～後期前葉	図Ⅳ-7	図版4・5	
	P-4	G・H-56	(1.08)	0.78	0.72	0.52	0.30	中期前半～後期前葉	図Ⅳ-7		
	P-5	G・H-56・57	1.18	(0.81)	0.92	0.68	0.43	中期前半～後期前葉	図Ⅳ-8		
	P-6	H・I-57	1.24	1.11	1.13	1.13	0.37	中期前半～後期前葉	図Ⅳ-8	図版5	
	P-7	G・H-57	0.60	0.50	0.37	0.24	0.12	中期前半～後期前葉	図Ⅳ-8		
	P-8	M60	(0.58)	0.53	0.32	0.47	0.29	中期前半～後期前葉	図Ⅳ-9		
	P-9	L44	0.74	0.69	0.65	0.58	0.15	中期前半～後期前葉	図Ⅳ-9	図版5	
	P-10	N40	(0.60)	0.59	(-)	(-)	0.15	中期前半～後期前葉	図Ⅳ-9		
	P-11	N5	0.63	0.36	0.52	0.35	0.34	中期～後期	図Ⅳ-4		
	P-12	M44	0.78	0.56	0.68	0.45	0.12	中期前半～後期前葉	図Ⅳ-10		
	P-13	J9・10	2.00	1.75	(0.65)	(0.55)	0.60	中期	図Ⅳ-10		
	P-14	M・N-45	0.59	0.40	0.57	0.39	0.28	中期後半	図Ⅳ-6・10		
	P-15	M・N-45	1.03	0.88	0.94	0.77	0.19	中期後半	図Ⅳ-6・11		
	P-16	L45	0.44	0.22	0.39	0.21	0.14	中期後半	図Ⅳ-6・11		
	P-17	N-50・51	1.43	1.29	1.28	1.12	0.56	後期前葉	図Ⅳ-11	図版6	
	P-18	N51	1.66	1.41	0.81	0.66	1.11	中期前半～後期前葉	図Ⅳ-11	図版6	
	P-19	M56	1.17	0.58	1.08	0.53	0.29	中期前半～後期前葉	図Ⅳ-12		
Tピット	TP-1	H・I-34	2.60	0.18	2.68	0.08	0.68	中期前半～後期前葉	図Ⅳ-13	図版7	
	TP-2	H・I-40・41	2.27	0.42	2.35	0.22	0.92	中期前半～後期前葉	図Ⅳ-13	図版7	
焼 土	F-1	L・M-43	0.27	0.12			0.01	中期前半～後期前葉	図Ⅳ-14		
	F-2	J8	0.27	0.16			0.04	中期後半	図Ⅳ-14		
	F-3	M8	0.66	0.22			0.08	中期後半	図Ⅳ-14		
	F-4	M4	0.80	0.64			0.05	中期後半	図Ⅳ-14		
	F-5	M45	0.98	0.80			0.11	中期後半	図Ⅳ-14		
	F-6	N5	0.55	0.35			0.17	中期前半～後期前葉	図Ⅳ-14		
剥片集中	S-1	M45						中期後半	図Ⅳ-14		
	S-2	M・N-45						中期前半	図Ⅳ-14		

表2 当別川左岸遺跡 住居跡出土遺物一覧

遺構名	層位	遺物名	分類	石材	点数	備考
H-1	覆土	土器	Ⅲ群 a 類		88	
		剥片石器	石鏃	頁岩	1	
			剥片	頁岩	6	
			礫	凝灰岩	1	
		小計			96	
H-2		剥片石器	剥片	頁岩	2	
		小計			2	
H-3	覆土	土器	Ⅲ群 b 類		2	
		剥片石器	剥片	頁岩	1	
		礫	礫・礫片	砂岩	1	
			小計			4
H-4	覆土	土器	Ⅲ群 a 類		1	
			Ⅲ群 b 類		1	
		剥片石器	剥片	頁岩	3	
		礫	礫		1	
			小計			6
		合計			108	

表3 当別川左岸遺跡 土坑出土遺物一覧

遺構名	層位	遺物名	分類	石材	点数	備考	
P-1	覆土	土器	Ⅲ群 a 類		52		
		土器	Ⅳ群 a 類		2		
	覆土	礫石器	両面調整石器		頁岩	1	
			たたき石			1	
			石核		頁岩	1	
			剥片			6	
		礫	礫			16	
	小計				79		
P-2	覆土	土器	Ⅲ群 a 類		5		
		礫石器	剥片		頁岩	1	
	坑底	礫	礫			2	
		小計				8	
P-3	覆土	土器	Ⅲ群 a 類		2		
		礫	礫			4	
	小計				6		
P-5	覆土	土器	Ⅲ群 a 類		8		
			Ⅳ群 a 類		1		
		礫石器	剥片		頁岩	2	
			礫	礫			5
	坑底	礫	礫			2	
小計					18		
P-6	覆土	土器	Ⅲ群 a 類		19		
			Ⅳ群 a 類		48		
		礫石器	たたき石		砂岩	1	
			台石・石皿			1	
			剥片			7	
	坑底	礫	礫			5	
		礫石器	剥片		頁岩	1	
		礫	礫			6	
	小計				88		
P-8	覆土	礫	礫		1		
		小計				1	
P-9	覆土	礫石器	台石・石皿	安山岩	3		
			砥石	砂岩	1		
		礫	礫	砂岩ほか	2		
	坑底	礫	礫	砂岩ほか	6		
小計					12		
P-12	覆土	土器	Ⅲ群 b 類		1		
			Ⅳ群 a 類		50		
		剥片石器	剥片		頁岩	1	
	小計				52		
P-13	覆土	土器	Ⅲ群 a 類		2		
		礫	礫		砂岩	1	
	小計				3		
P-14	覆土	剥片石器	スクレイパー		頁岩	1	
	小計				1		
P-15	覆土	剥片石器	スクレイパー		頁岩	1	
	小計				1		
P-17	覆土	土器	Ⅳ群 a 類		117		
	坑底	土器	Ⅳ群 a 類		頁岩	15	
		小計				132	
P-18	覆土	礫	礫		1		
		小計				1	
P-19	覆土	土器	Ⅲ群 a 類		6		
			扁平打製石器	凝灰岩	1		
		礫石器	石核		頁岩	1	
			剥片		頁岩	1	
			礫	礫			8
	小計				17		
合計					419		

表4 当別川左岸遺跡 焼土出土遺物一覧

遺構名	層位	遺物名	分類	石材	点数	備考
F-5	焼土中	割片石器	割片	頁岩	1	
		小計				1
F-6	焼土中	土器	Ⅲ群a類		1	
		小計				1
合計					2	

表5 当別川左岸遺跡 礫集中出土遺物一覧

遺構名	層位	遺物名	分類	石材	点数	備考
S-1		土器	Ⅲ群a類	砂岩ほか	1	
		礫	礫		26	
		小計				27
S-2		割片石器	割片	頁岩	1	
		礫	礫	砂岩ほか	42	
		小計				43
合計					70	

表6 当別川左岸遺跡 土器集中出土遺物一覧

遺構名	層位	遺物名	分類	石材	点数	備考
Po-1	Ⅲ	土器	Ⅲ群a類		3	
			Ⅲ群b類		34	
			小計			
合計					37	

表7 遺構出土掘載土器一覧

遺構名	図番号	掘載区・遺物番号×点数	層位	部位	図取番号
H-1	図Ⅳ-15-1	H-1・1×1	Ⅲ	口縁部	図Ⅳ-8
	図Ⅳ-15-2	H-1・4×1		胴部	図Ⅳ-8
	図Ⅳ-15-3	H-1・5×1		胴部	図Ⅳ-8
	図Ⅳ-15-4	H-1・1×1		口縁部	図Ⅳ-8
	図Ⅳ-15-5	H-1・4×1		底部	図Ⅳ-8
	図Ⅳ-15-6	H-1・1×1、H-1・3×1、H-1・4		計6	胴部・底部
H-3	図Ⅳ-15-7	H-3・1×2	Ⅲ	口縁部	図Ⅳ-8
P-1	図Ⅳ-15-8	P-1・1×9	Ⅲ	胴部	図Ⅳ-8
P-3	図Ⅳ-15-9	P-3・1×1	Ⅲ	胴部	図Ⅳ-8
P-5	図Ⅳ-15-10	P-5・1×1	Ⅲ	口縁部	図Ⅳ-8
P-6	図Ⅳ-15-11	P-6・2×1	Ⅲ	口縁部	図Ⅳ-8
	図Ⅳ-15-12	P-6・1×1		口縁部	図Ⅳ-8
	図Ⅳ-15-13	P-6・3×1		胴部	図Ⅳ-8
	図Ⅳ-15-14	P-6・3×1		口縁部	図Ⅳ-8
	図Ⅳ-15-15	P-6・3×2		胴部	図Ⅳ-8
P-12	図Ⅳ-15-16	P-12・1×4	Ⅲ	底部	図Ⅳ-8
		N44・5×2			
P-17	図Ⅳ-15-17	P-17・1×3	Ⅲ	口縁部	図Ⅳ-8
		P-17・6×7		口縁部	図Ⅳ-8
	P-17・2×1	口縁部		図Ⅳ-8	
	図Ⅳ-15-18	P-17・6×6		口縁部	図Ⅳ-8
		N50・1×1		口縁部	図Ⅳ-8
Po-1	図Ⅳ-15-19	Po-1・2×26、M50・5×1、M50・7×8、M50・8×2、M50・9×1、M50・11×1	Ⅲ	口縁部・底部	図Ⅳ-8

表8 遺構出土掲載石器一覧

図番号	遺構名	名称	分類	遺物 番号	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備考	図版 番号
図Ⅳ-16-1	H-1	石皿	ⅠA 4	4	覆土	3.8	1.1	0.7	2.6	頁岩		図版17
図Ⅳ-16-2	H-3	すり石	ⅤA 3	2	覆土	(8.3)	(6.8)	2.0	137.7	砂岩	扁平打製石器	図版17
図Ⅳ-16-3	P-1	両面調整石器	ⅣA	7	覆土	(3.0)	(5.0)	(1.2)	16.4	頁岩		図版17
図Ⅳ-16-4	P-1	たたき石	ⅤA 3	11	覆土	16.0	8.6	3.2	603.5	砂岩	くぼみ石	図版17
図Ⅳ-16-5	P-1	石核	ⅢA 1	8	覆土	(7.3)	(6.2)	(1.7)	96.6	頁岩		図版17
図Ⅳ-17-6	P-6	たたき石	ⅤA 1	10	覆土	(9.1)	(10.4)	5.4	547.0	砂岩		図版17
図Ⅳ-16-7	P-6	台石・石皿	ⅤA	9	覆土	51.6	22.2	14.3	22500.0	安山岩	被熱	図版17
図Ⅳ-16-8	P-9	台石・石皿	ⅤA	1	掘底	(18.2)	(20.1)	(10.0)	4000.0	安山岩		図版17
図Ⅳ-17-9	P-9	台石・石皿	ⅤA	8	掘底	(11.9)	(6.2)	(12.5)	1460.0	安山岩		図版17
図Ⅳ-17-10	P-9	台石・石皿	ⅤA	9	掘底	(13.3)	(16.8)	(5.5)	1770.0	安山岩		図版17
図Ⅳ-17-11	P-14	スクレイパー	ⅢB 2 a	1	覆土	(5.7)	(4.0)	(0.9)	19.3	頁岩		図版17
図Ⅳ-17-12	P-15	スクレイパー	ⅢB 2 a	1	覆土	(7.4)	(8.2)	(1.6)	81.6	頁岩		図版17
図Ⅳ-17-13	P-19	石核	ⅢA 1	3	覆土	(3.4)	(5.0)	(1.8)	23.4	頁岩		図版17
図Ⅳ-17-14	P-19	すり石	ⅤA 3	1	覆土	(10.8)	(14.8)	(2.2)	473.5	凝灰岩	扁平打製石器	図版17

表9-1 包含層出土掲載土器一覽 Ⅲ群a類

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	部位	図版番号	備考
ⅢV-1-1	L55・1×1, L55・2×3, L55・4×10, M55・5×1	計15	Ⅱ	Ⅰ層-底部	図版9
	Po-1・1×1, L55・7×1, M55・7×8, M55・8×2, M55・9×1	計13	Ⅲ		図版9
	P-19・1×3 L55・17×134		Ⅳ 木炭		Ⅰ層部 Ⅰ層部
ⅢV-1-2	J53・5×6, J53・10×2	計8	Ⅱ	Ⅰ層-底部	図版9
	K52・1×2		Ⅲ		図版9
ⅢV-1-3	L54・5×1, J52・10×1, K52・3×9, K53・8×13, K53・9×5	計29	Ⅱ	Ⅰ層-底部	図版9
	K52・5×2, K53・10×3	計5	Ⅳ		図版9
ⅢV-2-4	J53・10×1		Ⅲ	Ⅰ層-底部	図版9
	M57・3×6, M57・6×40	計46	Ⅳ		図版9
ⅢV-2-5	L55・9×5		Ⅲ	Ⅰ層-底部	図版10
ⅢV-2-6	L47・1×27, L47・2×18	計45	Ⅳ	Ⅰ層-底部	図版10
ⅢV-2-7	H55・5×66, H55・9×1, 未記載×5	計74	Ⅲ	Ⅰ層-底部	図版10
ⅢV-3-9	J52・16×1		木炭	Ⅰ層部	図版12
	N47・1×3		Ⅲ		図版12
ⅢV-3-10	N47・3×2		Ⅳ	Ⅰ層部	図版12
	M48・1×1, N47・1×1	計2	Ⅱ		図版12
ⅢV-3-11	M48・3×1		Ⅳ	Ⅰ層部	図版12
	H53・5×1		Ⅲ		図版12
ⅢV-3-12	H53・5×1		Ⅲ	Ⅰ層部	図版12
ⅢV-3-13	M9・1×1, M9・3×1	計2	Ⅱ	Ⅰ層部	図版12
ⅢV-3-14	K55・8×1		Ⅲ	Ⅰ層部	図版12
ⅢV-3-15	L54・4×1		Ⅲ	Ⅰ層部	図版13
ⅢV-3-16	H54・8×8		Ⅳ	Ⅰ層-胴部	図版13
ⅢV-3-17	L55・18×1		Ⅲ	Ⅰ層部	図版13
ⅢV-3-18	J54・13×1		Ⅳ	Ⅰ層部	図版13
ⅢV-4-19	J56・6×3, J56・8×4	計7	Ⅲ	Ⅰ層-胴部	図版13
	J56・11×1		Ⅳ		図版13
ⅢV-4-20	K54・19×1		Ⅲ	Ⅰ層部	図版13
ⅢV-4-21	L56・6×3		Ⅲ	Ⅰ層部	図版13
ⅢV-4-22	K55・8×1		Ⅲ	Ⅰ層部	図版13
ⅢV-4-23	G55・2×2, G55・12×1	計3	Ⅳ	Ⅰ層部	図版13
ⅢV-4-24	K52・1×2		Ⅲ	Ⅰ層部	図版13
ⅢV-4-25	L54・4×1		Ⅲ	Ⅰ層部	図版13
ⅢV-4-26	L53・5×2		Ⅲ	Ⅰ層部	図版13
ⅢV-4-27	M57・3×2, M57・6×2	計4	Ⅳ	Ⅰ層部	図版13
ⅢV-4-28	J53・4×2, J53・9×1	計3	Ⅲ	Ⅰ層部	図版13
ⅢV-4-29	L54・4×3		Ⅲ	Ⅰ層部	図版13
	L55・6×1, L55・11×2, L55・12×3, J55・9×4, K55・5×1	計11	Ⅳ		図版13
ⅢV-5-30	L54・15×1, L55・18×2	計3	Ⅲ	Ⅰ層-底部	図版13
	L53・10×1, L53・12×1, L54・12×2, J55・14×4	計8	Ⅳ		図版13
	L56・2×1, L56・9×1, L56・11×1	計3	Ⅲ		図版13
ⅢV-5-31	L56・5×34		Ⅲ	Ⅰ層-胴部	図版13
	L56・3×20		Ⅲ		図版13
ⅢV-5-32	J55・7×1, L54・8×1, L56・5×1	計3	Ⅲ	Ⅰ層-底部	図版13
	L54・9×1		Ⅲ		図版13
ⅢV-5-33	F47・1×1		Ⅳ	底部	図版13
	L59・9×5		Ⅲ		図版14
ⅢV-5-34	L56・12×1		木炭	底部	図版14
	J55・7×1		Ⅲ		図版14
ⅢV-5-35	J55・9×3		Ⅲ	底部	図版14
	H7・1×1		Ⅲ		図版14
ⅢV-5-36	J55・7×1		Ⅲ	底部	図版14
	J55・9×3		Ⅲ		図版14
ⅢV-5-37	H7・1×1		Ⅲ	底部	図版14
	K56・5×1, K56・8×1	計2	Ⅲ		図版14
ⅢV-5-38	K56・5×1, K56・8×1	計2	Ⅲ	底部	図版14

表9-2 包含層出土掲載土器一覽 Ⅲ群b類

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	部位	図版番号	備考
ⅢV-6-39	L47・4×1		Ⅳ	Ⅰ層部	図版14
ⅢV-6-40	M47・1×3		Ⅳ	Ⅰ層部	図版14
ⅢV-6-41	L55・2×4		Ⅲ	Ⅰ層部	図版14
	M49・3×1		Ⅲ		図版14
ⅢV-6-42	M49・3×1		Ⅲ	Ⅰ層部	図版14
	M49・7×1		Ⅲ		図版14
ⅢV-6-43	L56・5×34		Ⅲ	Ⅰ層部	図版14
	L56・2×1, L56・9×1, L56・11×1	計3	Ⅲ		胴部-底部
ⅢV-6-44	E11・1×1, E12・3×30, E12・5×92	計123	Ⅳ	Ⅰ層-胴部	図版11

表9-3 包含層出土掲載土器一覧 IV群a類

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	部位	図番号	備考
図V-2-8	F52・3×48	Ⅱ	I1層-底部	図版10	
図V-7-45	M54・3×1, K55・7×2	計3	Ⅱ	I1層部	図版14
図V-7-46	J53・3×6, J55・7×11	計17	Ⅱ	I1層部	図版14
図V-7-47	J53・1×7, G54・5×1	計8	Ⅱ	I1層部	図版14
図V-7-48	G54・5×1, G49・1×1	計2	Ⅱ	I1層部	図版14
図V-7-49	E55・1×4	Ⅱ	I1層部	図版14	
図V-7-50	J54・3×1, I54・11×2, I54・13×1, I54・15×1	計5	Ⅱ	I1層部	図版14
	I54・7×4	Ⅱ	I1層-胴部	図版14	
図V-7-51	I52・2×16	Ⅱ	I1層-胴部	図版14	
	I52・6×4	Ⅱ	I1層-胴部	図版14	
図V-7-52	J54・20×3	Ⅲ	I1層部	図版14	
図V-7-53	G52・4×1	Ⅲ	I1層部	図版14	
図V-7-54	F57・6×1	Ⅲ	I1層部	図版15	
図V-7-55	J57・5×3	Ⅲ	I1層部	図版15	
	I56・9×1	Ⅲ	I1層部	図版15	
図V-7-56	F56・6×1	Ⅳ	I1層部	図版15	
図V-7-57	J52・13×3	Ⅳ	I1層部	図版15	
図V-8-58	J55・11×2	Ⅲ	I1層-胴部	図版15	
	J55・15×2	Ⅳ	I1層-胴部	図版15	
図V-8-59	F48・1×1	Ⅳ	I1層部	図版15	
図V-8-60	F54・11×11	Ⅳ	I1層-胴部	図版15	
図V-8-61	H50・4×1	Ⅳ	I1層部	図版15	
図V-8-62	L54・5×3	Ⅲ	I1層-胴部	図版15	
	L54・22×4	Ⅳ	I1層-胴部	図版15	
図V-8-63	G54・7×2	Ⅲ	I1層部	図版15	
	G55・2×2	Ⅳ	I1層部	図版15	
図V-8-64	I55・8×1, I55・11×1	計2	Ⅲ	胴部	図版15
図V-8-65	I55・8×2	Ⅲ	胴部	図版15	
図V-8-66	J53・7×4	Ⅲ	胴部	図版15	
図V-8-67	I53・5×11	Ⅲ	I1層-底部	図版15	
図V-8-68	F55・2×1	Ⅲ	胴部	図版12	
	F55・5×8	Ⅲ	胴部-底部	図版12	
図V-8-69	L55・12×3, L55・13×5	計8	Ⅲ	胴部-底部	図版15
図V-8-70	I54・4×10	計10	Ⅲ	胴部-底部	図版15
図V-8-71a	H50・2×5	計5	Ⅳ	胴部	図版15
図V-8-71b	H50・2×1	Ⅳ	底部	図版15	
図V-8-72	H55・3×1	Ⅲ	胴部-底部	図版15	
図V-9-73	O48・4×24	Ⅲ	胴部-底部	図版12	
	O48・2×1	Ⅳ	胴部-底部	図版12	
図V-9-74	I57・10×1	Ⅳ	I1層部	図版16	
図V-9-75	H54・4×2, H54・5×2	計4	Ⅲ	I1層-胴部	図版16
	H54・2×1, H54・4×2, H54・5×2, H54・6×1, H54・13×7	計13	Ⅲ	I1層-胴部	図版16
図V-9-76	J55・8×1	Ⅲ	I1層部	図版16	
	J55・11×2	Ⅲ	I1層-胴部	図版16	
図V-9-77	I55・14×1, I55・16×1	計2	Ⅳ	I1層部	図版16
	L55・3×1	Ⅲ	I1層部	図版16	
図V-9-78	L55・7×1	Ⅲ	I1層部	図版16	
	L55・9×1	Ⅳ	I1層部	図版16	
図V-9-79	J54・12×2, J55・11×7, J55・13×1	計10	Ⅲ	I1層-胴部	図版16
	J54・14×1, J55・16×3	計4	Ⅳ	I1層-胴部	図版16
図V-9-80	H53・1×2, I53・9×1	計3	Ⅲ	底部	図版16
	I54・7×7	Ⅲ	I1層-底部	図版16	
図V-10-81	I54・11×2, I54・13×2, I54・15×1, I55・8×4	計9	Ⅳ	I1層-底部	図版16
	J53・3×5, J52・6×1	計6	Ⅲ	I1層部	図版16
図V-10-82	L54・7×5, L54・9×1, L54・11×1, L54・15×2	計9	Ⅳ	I1層部	図版16
	J54・12×2	Ⅲ	I1層部	図版16	
図V-10-83	I55・16×1	Ⅳ	I1層部	図版16	
	I54・4×2	Ⅲ	I1層部	図版16	
図V-10-83	I54・7×1	Ⅲ	I1層部	図版16	
	J52・8×1, J52・12×1	計2	Ⅳ	I1層部	図版16

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	部位	図版番号	備考
図V-10-84	J55・11×2, J55・9×1	計3	Ⅱ	I層部	図版16
	J53・4×1		Ⅱ		
図V-10-85	J53・14×1	計2	Ⅲ	I層部	図版16
	G51・6×1		Ⅳ		
図V-10-86	M55・9×1	計1	Ⅲ	I層部	図版16

表9-4 包含層出土掲載土器一覽 IV群b類

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	部位	図版番号	備考
図V-10-87	M55・10×3	計1	Ⅲ	I層部	図版16
図V-10-88	L56・7×1	計1	Ⅱ	I層部	図版16

表9-5 包含層出土掲載土器一覽 V群・土製品

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	部位	図版番号	備考
図V-10-89	I 9・1×1	計2	Ⅱ	I層部	図版23
	I 55・5×1		Ⅱ		
図V-10-90	I 55・10×1	計2	Ⅳ	土製品	図版23
	II 55・6×1		Ⅲ		
図V-10-91	I 55・6×1	計1	Ⅲ	土製品	図版23
図V-10-92	I 56・1×1	計1	Ⅱ	土製品	図版23

表10 包含層出土掘載石器一覧

図番号	名称	分類	発原	遺物 番号	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備考	図版 番号
図V-20-1	石鏃	I A 3	F 9	1	I	(2.9)	1733.0	0.5	1.6	経質頁岩	無茶・平基	図版28
図V-20-2	石鏃	I A 8	J 57	7	II	(2.1)	(0.7)	0.3	0.4	黒曜石	無茶	図版28
図V-20-3	石鏃	I A 4	J 53	15	II	4.0	1.5	0.3	1.3	経質頁岩	無茶	図版28
図V-20-4	石鏃	I A 4	J 56	12	III	4.9	(1.3)	(0.5)	2.8	頁岩	無茶	図版28
図V-20-5	石鏃	I A 4	I 51	10	IV	5.0	1.8	1.0	6.6	頁岩	無茶	図版28
図V-20-6	石鏃	I A 4	H 05	1	II	(4.9)	1.1	0.5	2.1	頁岩	無茶	図版28
図V-20-7	石鏃	I A 5	J 55	7	III	(4.0)	(2.5)	0.5	2.7	黒曜石	有茶	図版28
図V-20-8	石鏃	I A 5	J 55	2	II	2.7	1.8	(0.5)	1.0	頁岩	有茶	図版28
図V-20-9	石鏃	I A 5	G 49	9	IV	(2.9)	1.6	0.4	1.2	頁岩	有茶	図版28
図V-20-10	石鏃	I A 5	G 10	5	II	3.5	1.7	0.5	1.6	頁岩	有茶・集積にアスファルト付着	図版28
図V-20-11	石鏃	I A 5	G 55	1	IV	(3.6)	1.3	0.5	1.6	頁岩	有茶	図版28
図V-20-12	石鏃	I A 5	N 45	9	IV	(4.6)	(1.5)	(0.8)	4.4	経質頁岩	有茶	図版28
図V-20-13	石鏃	I A 5	N 52	1	III	(3.9)	1.6	0.7	3.1	頁岩	無茶	図版28
図V-20-14	石鏃	I A 5	M 56	5	III	(3.9)	(1.5)	0.6	2.8	頁岩	有茶	図版28
図V-20-15	石鏃	I A 5	L 55	16	II	(4.4)	(1.4)	0.5	2.1	頁岩	有茶	図版28
図V-20-16	石鏃	I A 5	H 52	29	IV	(3.3)	(1.3)	(0.5)	1.9	頁岩	有茶	図版28
図V-20-17	石鏃	I A 5	M 47	19	III	(3.8)	(1.6)	(0.5)	2.5	経質頁岩	有茶	図版28
図V-20-18	石鏃	I A 5	J 54	8	III	(2.8)	2.1	0.4	1.8	黒曜石	有茶・焼熟	図版28
図V-20-19	石鏃	I A 5	G 55	2	IV	(2.4)	1.8	0.3	1.0	頁岩	有茶	図版28
図V-20-20	石鏃・ナイフ	I B 1	I 56	16	IV	(6.4)	2.6	1.2	12.1	黒曜石	有茶	図版28
図V-20-21	石鏃・ナイフ	I B 2	G 52	14	IV	6.7	3.5	0.9	16.1	黒曜石	無茶	図版28
図V-20-22	石鏃・ナイフ	I B 2	J 52	17	IV	(5.6)	(2.4)	(0.9)	12.9	頁岩	無茶・光沢面有り	図版28
図V-20-23	石鏃・ナイフ	I B 2	K 55	2	II	(8.8)	3.1	0.9	24.7	頁岩	無茶・光沢面有り	図版28
図V-20-24	石鏃	II A 1	G 58	3	II	6.3	3.7	1.0	18.9	頁岩	光沢面有り	図版28
図V-20-25	石鏃	II A 1	F 58	6	II	(3.7)	(2.6)	(1.2)	11.1	頁岩		図版28
図V-20-26	ついで付ナイフ	III A 3	O 47	2	IV	10.3	1.7	0.9	7.8	頁岩		図版28
図V-20-27	ついで付ナイフ	III A 1	H 53	5	II	6.0	3.8	6.4	13.0	頁岩		図版28
図V-20-28	ついで付ナイフ	III A 1	J 53	2	II	5.0	(3.3)	(0.6)	21.2	頁岩		図版28
図V-20-29	ついで付ナイフ	III A 3	J 53	29	III	(6.0)	1.9	5.9	7.6	頁岩		図版28
図V-20-30	ついで付ナイフ	III A 3	M 54	8	IV	7.0	2.3	0.8	12.3	頁岩		図版28
図V-20-31	ついで付ナイフ	III A 2	I 48	1	II	7.6	4.2	1.2	32.0	頁岩		図版28
図V-21-32	スクレイパー	III B 2 a	L 10	1	II	5.8	2.7	1.0	17.5	頁岩		図版28
図V-21-33	スクレイパー	III B 2 a	L 48	4	IV	8.9	(3.9)	(1.7)	67.2	頁岩		図版28
図V-21-34	スクレイパー	III B 2 b	L 47	1	IV	8.1	4.0	1.2	44.8	頁岩	光沢面有り	図版28
図V-21-35	スクレイパー	III B 2 b	M 46	15	IV	(8.1)	6.1	1.3	72.5	頁岩		図版28
図V-21-36	スクレイパー	III B 2 b	N 45	1	III	(7.0)	3.9	1.1	28.4	頁岩	光沢面有り	図版28
図V-21-37	スクレイパー	III B 2 b	N 55	3	IV	8.5	4.4	1.2	41.4	頁岩		図版29
図V-21-38	スクレイパー	III B 2 b	M 56	6	III	(10.8)	(4.8)	(1.4)	88.3	頁岩		図版29
図V-21-39	スクレイパー	III B 2 b	N 45	10	IV	(9.6)	4.8	1.6	72.7	頁岩	光沢面有り	図版29
図V-21-40	スクレイパー	III B 2 b	M 49	1	II	(8.4)	2.2	0.6	16.0	頁岩	光沢面有り	図版29
図V-22-41	スクレイパー	III B 2 b	N 49	2	III	5.9	4.2	1.1	28.3	頁岩	光沢面有り	図版29
図V-22-42	スクレイパー	III B 2 b	J 57	1	II	(4.7)	4.7	1.1	26.2	頁岩		図版29
図V-22-43	スクレイパー	III B 2 b	I 55	21	IV	7.6	3.2	0.9	17.1	頁岩	光沢面有り	図版29
図V-22-44	両面調整石器	IV A 1	L 55	20	木炭焼乱	(6.4)	3.3	1.9	39.9	頁岩		図版29

図番号	名称	分類	図取	遺物 番号	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	高さ (g)	石質	備考	図取 番号
図V-22-45	石芥	VA 1	I55	5	Ⅱ	(6,2)	3,6	1,3	49,8	緑色片岩		図取19
図V-22-46	石芥	VA 1	J54	9	Ⅲ	(6,5)	3,5	1,6	62,5	緑色片岩		図取19
図V-22-47	石芥	VA 1	K53	5	Ⅱ	(11,8)	4,1	2,2	190,2	緑色片岩		図取19
図V-22-48	石芥	VA 1	K54	18	I	(8,1)	3,3	1,6	78,4	緑色片岩		図取19
図V-22-49	石芥	VA 1	O48	1	Ⅱ	7,6	3,5	1,5	73,4	緑色片岩		図取19
図V-22-50	石芥	VA 1	M48	1	Ⅳ	(11,4)	5,1	2,8	235,4	緑色片岩		図取19
図V-22-51	石芥	VA 3	L 7	1	攪乱	(16,1)	(4,2)	(3,3)	362,6	緑色片岩		図取19
図V-23-52	たたき石	VA 1	G10	14	Ⅱ	(8,7)	7,0	3,8	321,0	砂岩		図取20
図V-23-53	たたき石	VA 1	I57	15	Ⅳ	18,0	6,5	5,9	1104,5	砂岩		図取20
図V-23-54	たたき石	VA 1	J56	29	Ⅳ	10,6	6,5	6,4	590,5	砂岩		図取20
図V-23-55	たたき石	VA 2	L57	3	Ⅱ	(6,0)	(7,5)	2,2	125,4	砂岩		図取20
図V-23-56	たたき石	VA 2	F55	6	Ⅳ	7,5	13,0	3,3	483,9	砂岩		図取20
図V-23-57	たたき石	VA 3	J44	4	Ⅱ	14,6	6,8	(3,6)	417,3	砂岩	くぼみ石	図取20
図V-23-58	たたき石	VA 3	K10	1	Ⅱ	8,8	8,1	3,5	335,9	砂岩	くぼみ石	図取20
図V-24-59	たたき石	VA 3	L56	10	Ⅱ	(9,6)	7,2	3,3	323,6	砂岩	くぼみ石	図取20
図V-24-60	すり石	VA 1	M44	4	Ⅲ	8,7	(14,5)	6,3	1125,0	砂岩		図取20
図V-24-61	すり石	VA 1	M45	7	Ⅲ	7,3	12,4	5,6	591,5	砂岩		図取20
図V-24-62	すり石	VA 2	F48	1	Ⅳ	6,2	10,7	2,7	266,9	砂岩		図取20
図V-24-63	すり石	VA 2	G55	19	本表攪乱	6,2	13,3	2,1	257,6	頁岩		図取20
図V-24-64	すり石	VA 3	J53	26	Ⅲ	(6,1)	(11,1)	2,2	207,5	凝灰岩	扁平打製石器	図取20
図V-24-65	すり石	VA 3	F53	3	Ⅳ	7,4	14,3	2,0	277,0	凝灰岩	扁平打製石器	図取20
図V-25-66	すり石	VA 3	L47	2	Ⅳ	(10,2)	(13,7)	2,3	383,7	凝灰岩	扁平打製石器	図取20
図V-25-67	すり石	VA 3	J53	31	Ⅲ	(9,5)	(16,1)	(2,6)	391,2	砂岩	扁平打製石器	図取21
図V-25-68	すり石	VA 3	L54	40	Ⅳ	(8,5)	(15,2)	(1,7)	288,3	安山岩	扁平打製石器	図取21
図V-25-69	すり石	VA 3	K54	2	Ⅱ	(8,1)	(16,1)	(2,3)	353,1	凝灰岩	扁平打製石器	図取21
図V-25-70	すり石	VA 3	K53	6	Ⅱ	(9,6)	(15,9)	(3,2)	545,5	凝灰岩	扁平打製石器	図取21
図V-26-71	すり石	VA 4	F50	5	Ⅱ	10,2	(9,5)	(5,9)	770,0	安山岩	北海道式石棺	図取21
図V-26-72	すり石	VA 4	I53	7	Ⅱ	9,3	(12,9)	(5,6)	1023,0	安山岩	北海道式石棺	図取21
図V-26-73	すり石	VA 4	I51	5	Ⅲ	8,0	(13,1)	4,8	728,0	安山岩	北海道式石棺	図取21
図V-26-74	すり石	VA 4	J57	14	Ⅲ	8,9	12,6	5,7	918,5	安山岩	北海道式石棺	図取21
図V-26-75	すり石	VA 4	J55	33	Ⅲ	(6,5)	(9,6)	4,2	390,7	砂岩	北海道式石棺	図取21
図V-26-76	すり石	VA 4	L54	41	Ⅳ	7,5	11,9	(5,2)	725,5	砂岩	北海道式石棺	図取21
図V-27-77	すり石	VA 4	J57	14	Ⅲ	8,9	11,5	4,7	673,0	安山岩	北海道式石棺	図取21
図V-27-78	台石・石皿	VA	N47	4	Ⅲ	(18,8)	(22,9)	8,2	4100,0	安山岩		図取22
図V-27-79	台石・石皿	VA	N46	6	Ⅳ	32,1	43,0	11,5	21000,0	安山岩		図取22
図V-28-80	砥石	DX B 2	E10	1	I	(9,4)	(7,5)	(2,8)	290,0	砂岩		図取22
図V-28-81	砥石	DX B 2	I55	2	Ⅱ	(9,3)	(8,2)	4,2	580,0	砂岩		図取22
図V-28-82	砥石	DX B 2	F52	5	Ⅳ	(13,2)	(11,6)	5,3	1480,0	砂岩		図取22
図V-28-83	砥石	DX B 2	J54	21	Ⅱ	(13,7)	(10,4)	(5,0)	990,0	砂岩		図取22
図V-28-84	石鏃	XA	G55	14	Ⅳ	13,0	15,0	2,8	739,0	安山岩		図取22
図V-28-85	石鏃	XA	M45	10	Ⅳ	9,9	(12,3)	3,5	562,5	砂岩		図取22
図V-29-86	石鏃	XA	M46	9	Ⅳ	9,0	(13,7)	3,6	653,0	砂岩		図取22
図V-29-87	石核	? A 1	J51	16	Ⅳ	4,2	6,5	4,3	124,9	頁岩		図取22
図V-29-88	石核	? A 1	J55	37	Ⅳ	(5,4)	7,7	2,3	133,3	頁岩		図取22
図V-29-89	石核	? A 1	L54	10	Ⅱ	4,7	6,5	2,5	69,2	ノコギリ		図取22

当別川左岸遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

国番号	名称	分類	発掘(遺物番号)	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備考	国庫 番号
国V-30-90	石製品		J55 26	Ⅲ	2.7	4.6	1.0	6.0	obs	異形石器	国庫23
国V-30-91	石製品		H50 9	Ⅳ	7.6	5.9	0.9	51.9	砂岩		国庫23
国V-30-92	石製品		G7 1	Ⅳ	(7.4)	6.0	2.8	(56.9)	軽石		国庫23
国V-30-93	石製品		K55 11	Ⅱ	(11.1)	7.5	2.1	(70.5)	軽石		国庫23
国V-30-94	石製品		L45 7	Ⅲ	(10.2)	(5.5)	2.6	(143.8)	安山岩		国庫23
			M45 5								

写 真 图 版



H23・C地区 調査状況



H23・B・C地区 沢部分クリーニング作業状況
調査状況

図版 2



23年度調査区完掘状況（南西から）



24年度調査区完掘状況（北西から）

完掘状況



H-1 検出状況



H-1 東西ベルトセクション



H-1 全景



H-2 検出状況



H-2 セクション



H-2 完掘

住居跡(1)

図版 4



H-3 セクション



H-3 完掘



H-4 セクション



H-3・4 完掘



P-1 セクション



P-3 セクション

住居跡(2)・土坑(1)



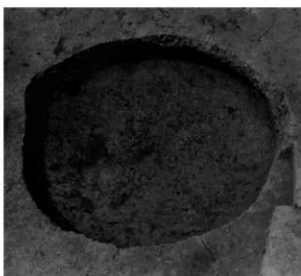
P-1~3 遺物出土状況



P-6 セクション



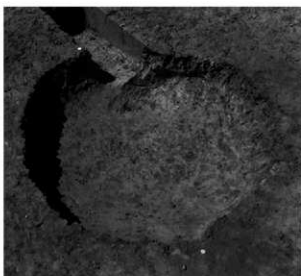
P-6 遺物出土状況



P-6 完掘

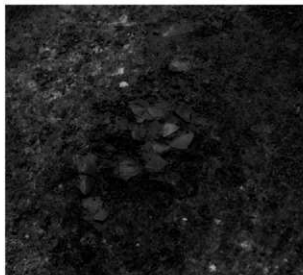


P-9 遺物出土状況



P-9 完掘

図版 6



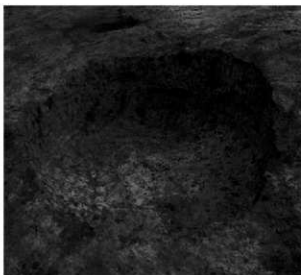
P-17 フク土中位遺物出土状況



P-17 フク土中位遺物出土状況



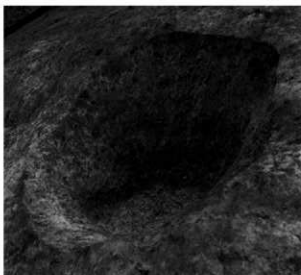
P-17 セクション



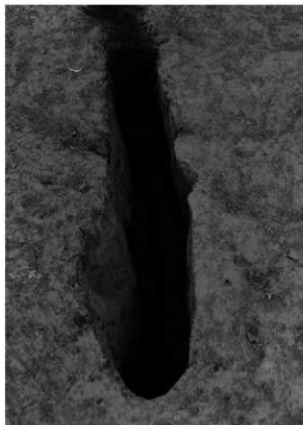
P-17 完掘



P-18 セクション



P-18 完掘



TP-1 セクション



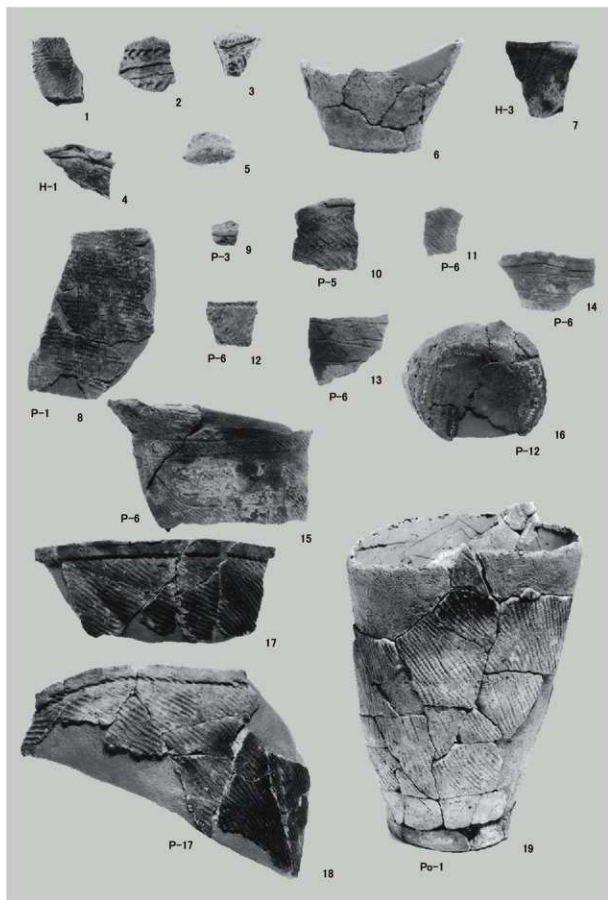
TP-1 完掘



TP-2 セクション



TP-2 完掘



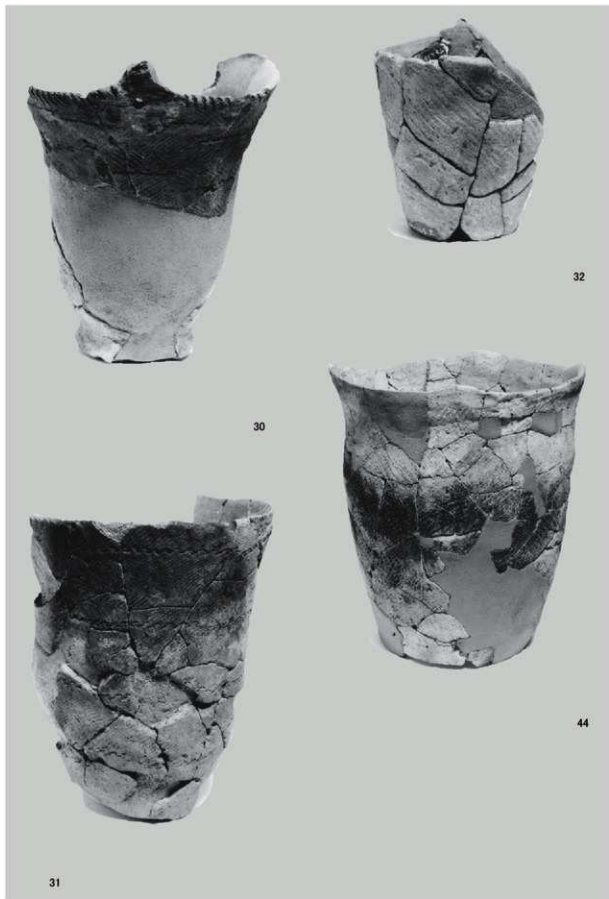
遺構出土の土器



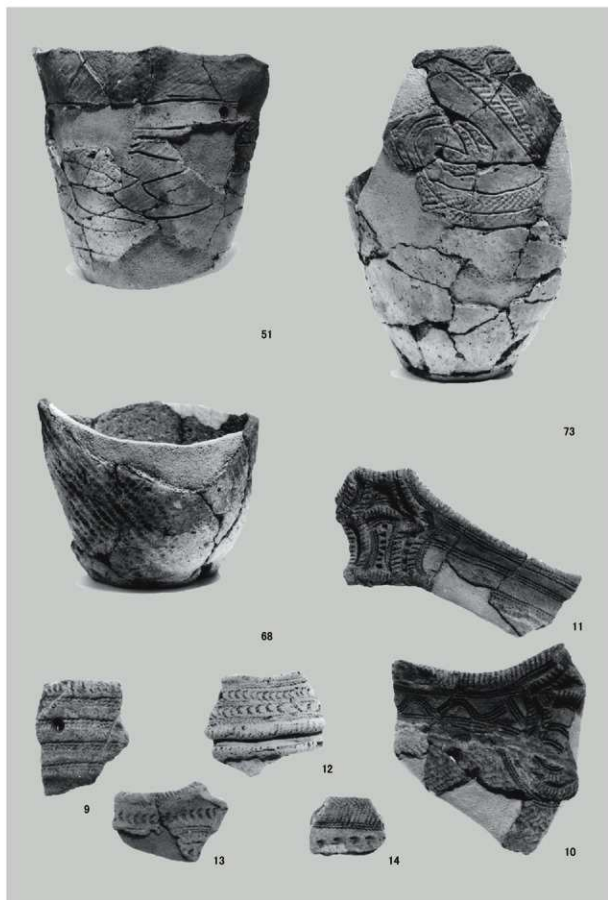
包含層出土の土器(1)



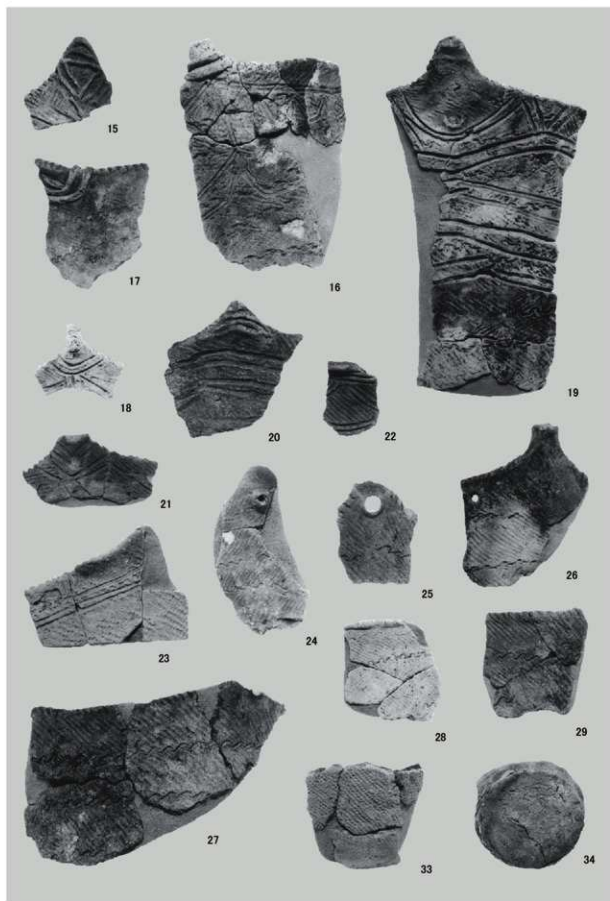
包含層出土の土器(2)



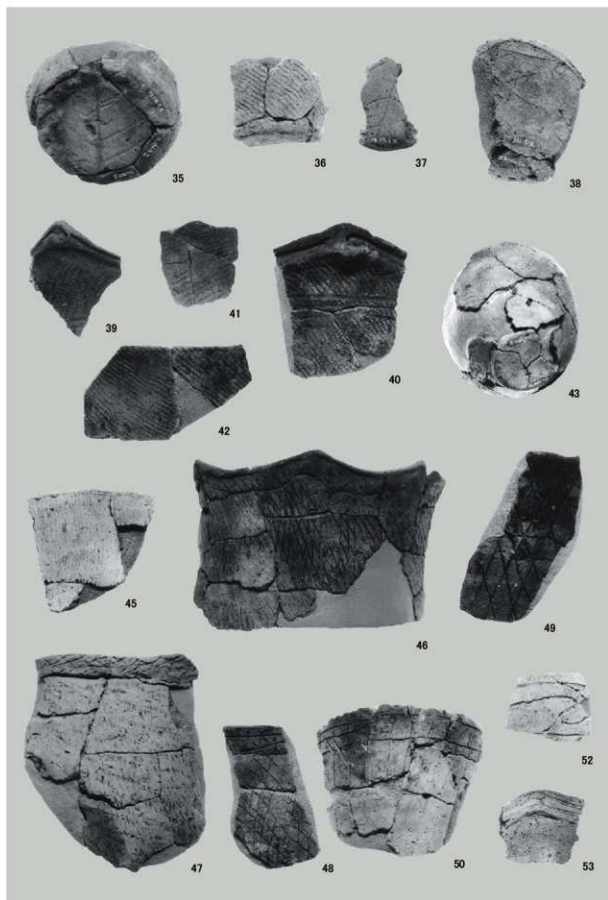
包含層出土の土器(3)



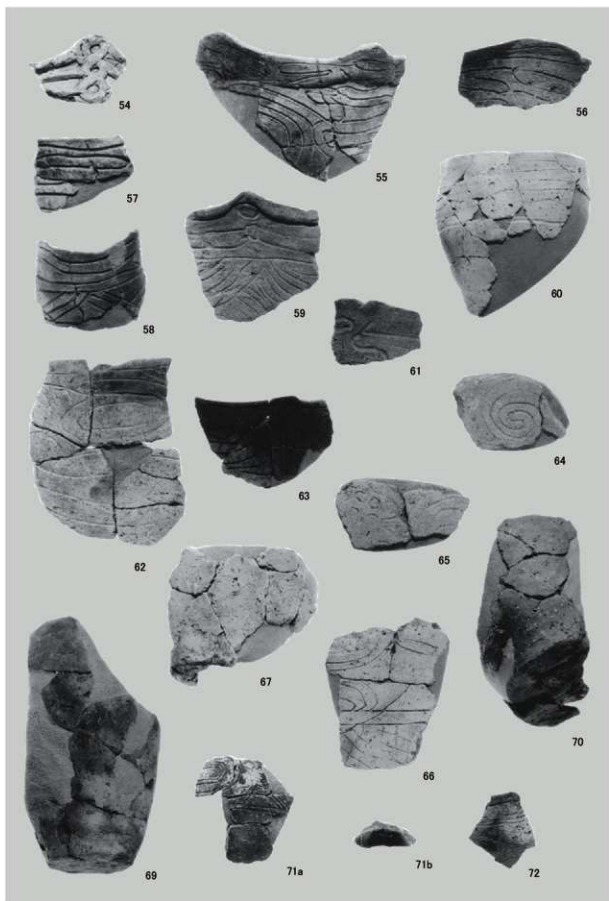
包含層出土の土器(4)



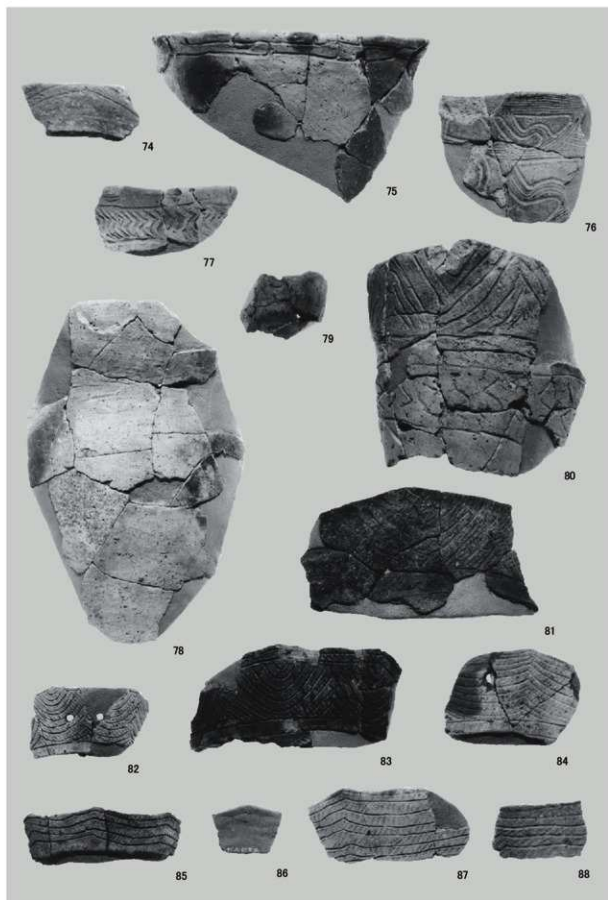
包含層出土の土器(5)



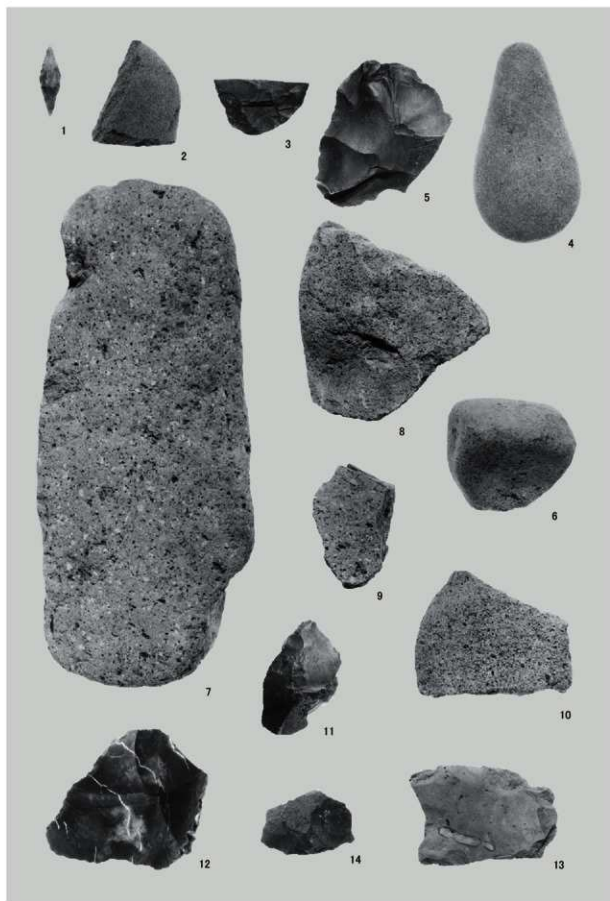
包含層出土の土器(6)



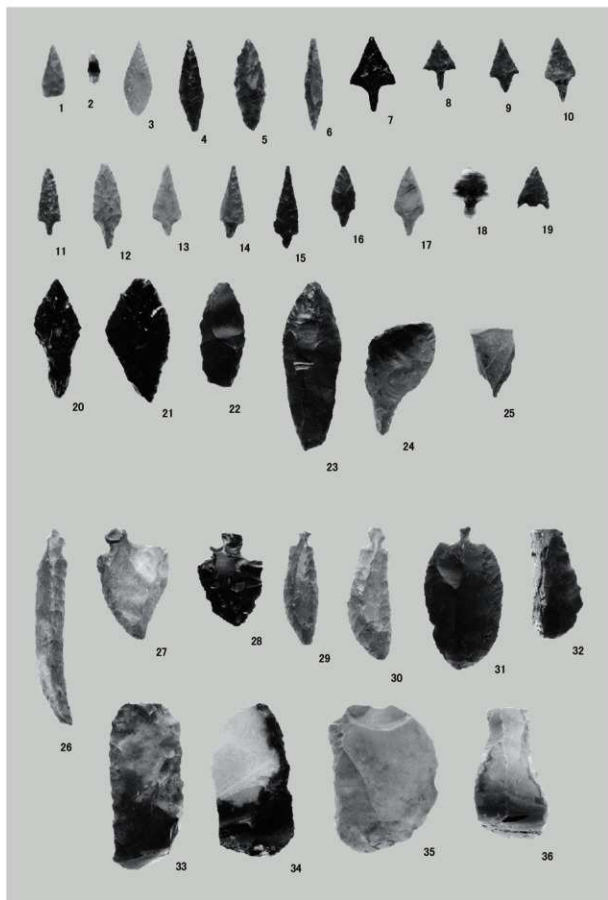
包含層出土の土器(7)



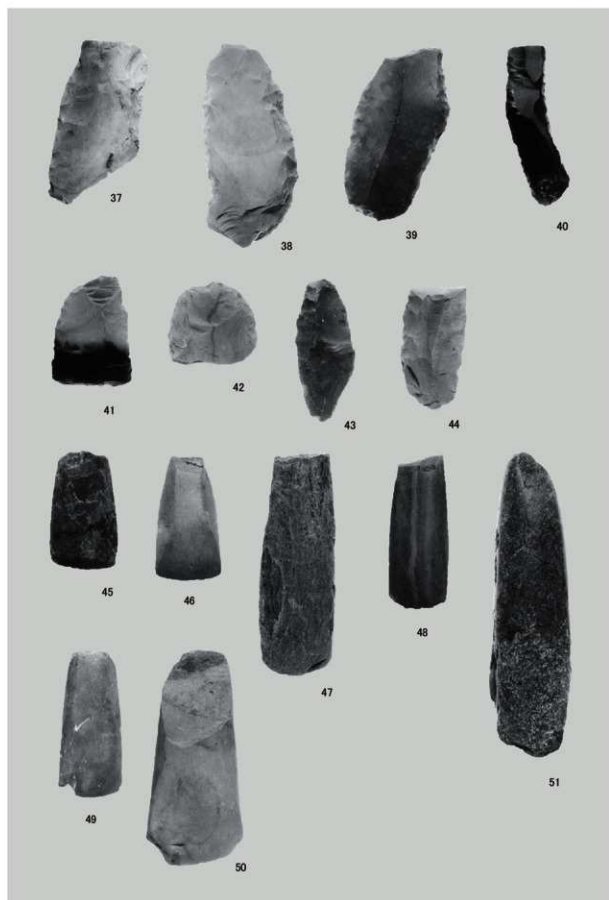
包含層出土の土器(8)



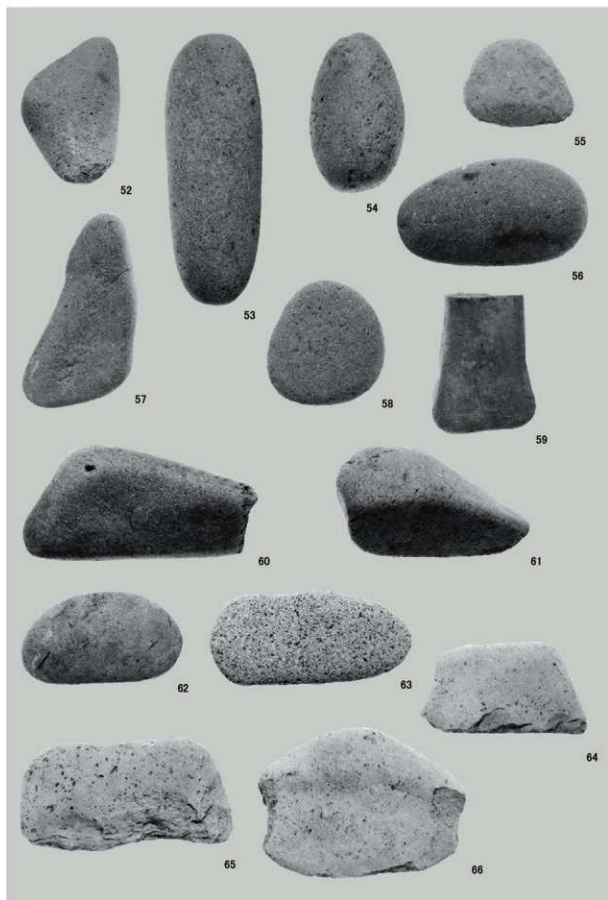
遺構出土の石器



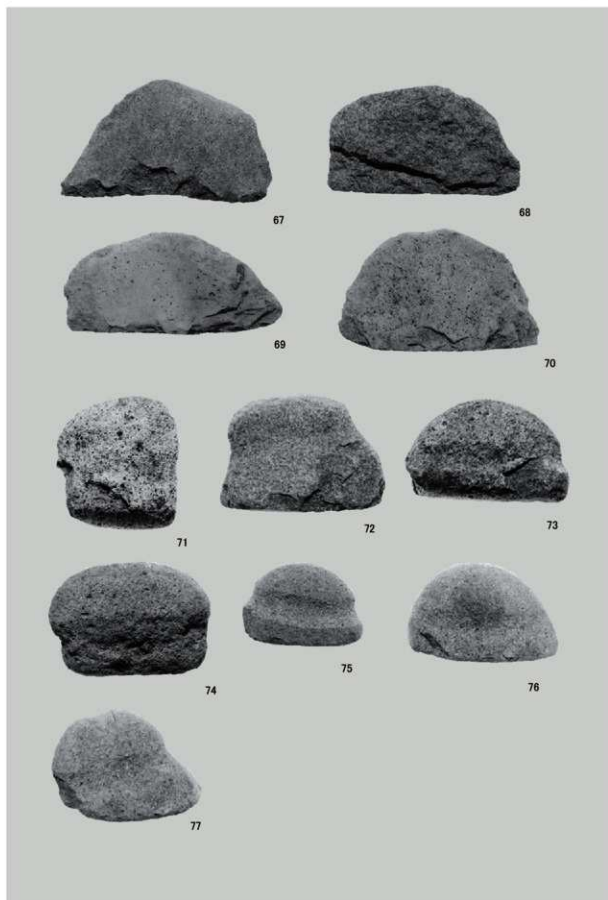
包含層出土の石器(1)



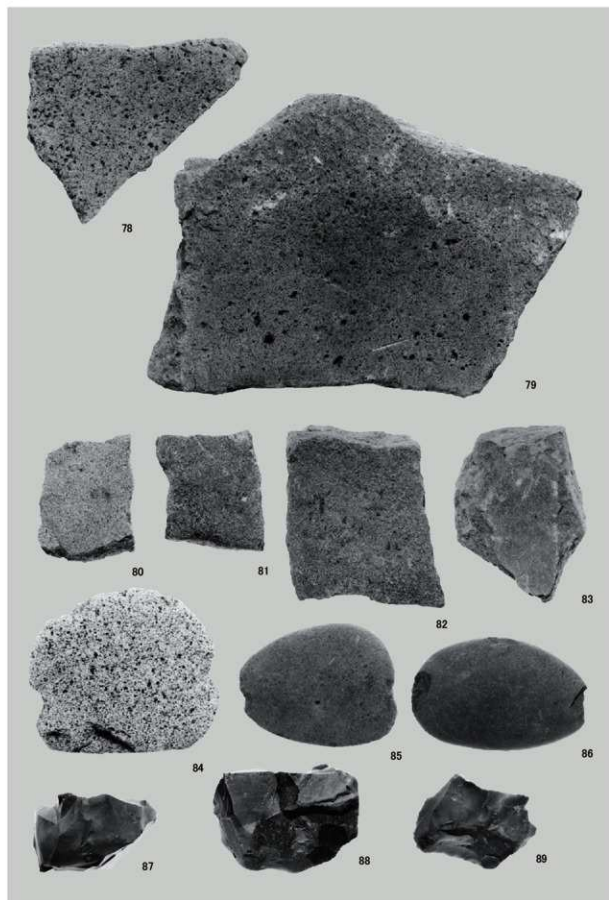
包含層出土の石器(2)



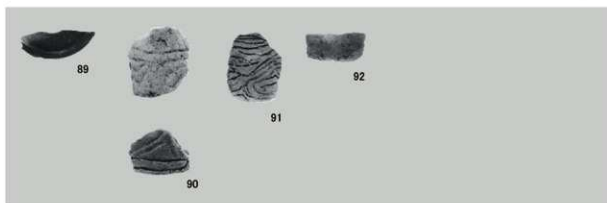
包含層出土の石器(3)



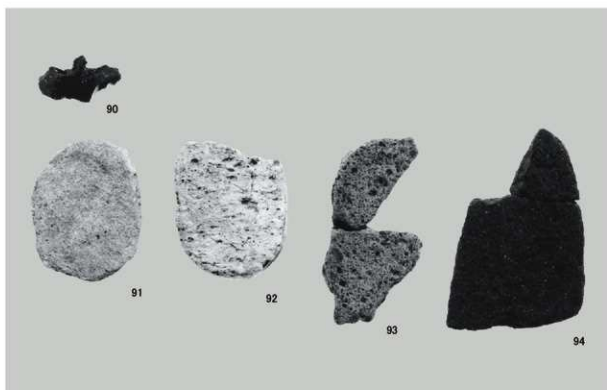
包含層出土の石器(4)



包含層出土の石器(5)



包含層出土の土製品



包含層出土の石製品

引用参考文献

論文・書籍等

- 石岡憲雄 1986 「施文原体の変遷—円筒土器」『季刊考古学17』 雄山閣
- 大森司統 2003 「渡島半島の縄文時代後期前葉」『東北・北海道の十勝内I式再検討—資料集—
海峽土器編年研究会
- 大沼忠春 1981 「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」『考古学雑誌66—4』
日本考古学会
- 大沼忠春 1984 「道南の縄文前期土器群の編年について」『北海道考古学20』 北海道考古学会
- 大沼忠春 1986 a 「道南の縄文前期土器群の編年について（Ⅱ）」『北海道考古学22』 北海道考古学会
- 大沼忠春 1986 b 「施文原体の変遷—東銅路式土器」『季刊考古学17』 雄山閣
- 大沼忠春 1989 「北筒式土器様式」『縄文土器大観1』 小学館
- 小笠原忠久 1996 「北海道円筒式土器」『日本土器事典』 雄山閣
- 小保内祐之 2008 「陸奥大木系土器（椀形式・最花式・大木10式併行土器）」『総覧縄文土器』
『総覧縄文土器』刊行委員会
- 葛西智義 1988 「縄文時代中期末葉から後期前葉の土器について」『文京考古6』 札幌学院大学考古学研究会
- 加藤邦雄 1994 「縄文実底土器」『縄文文化の研究3（第2版）』 雄山閣
- 茅野嘉雄 2008 「円筒下層式土器」『総覧縄文土器』『総覧縄文土器』刊行委員会
- 見玉作左衛門・大場利夫 1954 「函館市春日町出土の遺物について」『北方文化研究報告9』 北海道大学
- 小山正忠・竹原秀雄 2007 「新版標準土色帖29版」 日本色研事業株式会社
- 鈴木克彦 1989 「最花式（中のⅢ式）土器」『縄文土器大観1』 小学館
- 鈴木克彦 1999 「北海道渡島・松山地域の中期末葉から後期初頭の編年」『北海道考古学35』 北海道考古学会
- 高橋正勝 1994 「北海道南部の土器」『縄文文化の研究4（第2版）』 雄山閣
- 戸崎賢二・土屋 肇 2000 「北海道の石」 北海道大学図書刊行会
- 成田遼彦 2003 「最花式土器—在土器群の様相—」『研究紀要8』 青森県埋蔵文化財センター
- 福田祐二 2005 「亀田半島における前期末葉～中期初頭の様相」
『東北・北海道の縄文時代前期末葉～中期初頭土器の課題—資料集—』 海峽土器編年研究会
- 三宅徹也 1989 「円筒土器下層様式」『縄文土器大観2』 小学館
- 三宅徹也 1994 「円筒土器」『縄文文化の研究3（第2版）』 雄山閣
- 武藤康弘 2008 「表筒式・早稲田6類土器」『総覧縄文土器』 『総覧縄文土器』 刊行委員会
- 村越 潔 1984 「増補 円筒土器文化」 雄山閣
- 山田 央 2001 「北海道南西部における縄文時代中期末葉の土器について」『渡島半島の考古学』
北海道考古学情報交換会20周年記念論集作成実行委員会

団体・組織刊行物

- 本古内町史編纂委員会 1982 『本古内町史』 本古内町
- 北海道火山灰命名委員会 1982 『北海道の火山灰』 北海道火山灰命名委員会
- 日本ペドロジー学会 1997 『土壌調査ハンドブック 改訂版』 博友社
- 南北海道考古学情報交換会編 1995 『円筒土器下層式図録集』 南北海道考古学情報交換会
- 南北海道考古学情報交換会編 1996 『円筒土器下層式図録集Ⅱ 遺構編』 南北海道考古学情報交換会

埋蔵文化財発掘調査報告書

- 青森県教育委員会 1975 「中の平遺跡発掘調査報告」
- 恵山町教育委員会 1986 「日の浜砂丘1遺跡」
- 乙部町教育委員会 1976 「元和」
- 本古内町教育委員会 1974 「札苺遺跡」
- 本古内町教育委員会 1991 「釜谷4遺跡」
- 本古内町教育委員会 1998 a 「亀川2遺跡」
- 本古内町教育委員会 1998 b 「泉沢3遺跡」
- 本古内町教育委員会 1999 「本古内町 釜谷遺跡」

- 木古内町教育委員会 2001 『新道2遺跡』
 木古内町教育委員会 2003 a 『大釜谷3遺跡』
 木古内町教育委員会 2003 b 『泉沢2遺跡A地点』
 木古内町教育委員会 2003 c 『泉沢2遺跡B地点』
 木古内町教育委員会 2004 a 『泉沢2遺跡C地点』
 木古内町教育委員会 2004 b 『蛇内遺跡』
 知内町教育委員会 1972 『桶元遺跡』
 知内町教育委員会 1979 『知内川中流域の縄文時代遺跡』
 戸井町教育委員会 1989 『純子川2遺跡』
 戸井町教育委員会 1992 『戸井貝塚Ⅰ』
 戸井町教育委員会 1993 a 『戸井貝塚Ⅱ』
 戸井町教育委員会 1993 b 『戸井貝塚Ⅲ』
 戸井町教育委員会 1994 『戸井貝塚Ⅳ』
 戸井町教育委員会 1995 『純子川2遺跡(2)』
 戸井町教育委員会 2001 『高屋敷川1遺跡』
 函館圏開発事業団 1974 『西桔梗』
 函館市教育委員会 2003 『豊原4遺跡』
 北海道開拓記念館 1976 『札司』
 北海道第四紀研究会 1974 『西股』
 松前町教育委員会 1974 『松前町大津遺跡発掘報告書』
 松前町教育委員会 1988 『寺町貝塚』
 松前町教育委員会 1983 『白坂』
 南茅部町教育委員会 1996 『大船C遺跡』
 南茅部町埋蔵文化財調査団 1992 『八木B遺跡』
 南茅部町埋蔵文化財調査団 1993 『八木A遺跡 ハマナス野遺跡』
 南茅部町埋蔵文化財調査団 1995 『八木A遺跡Ⅱ ハマナス野遺跡』
 南茅部町埋蔵文化財調査団 1997 『八木A遺跡Ⅲ ハマナス野遺跡』
 森町教育委員会 1975 『島崎遺跡』
 八雲町教育委員会 1992 『コタン温泉遺跡』
 八雲町教育委員会 1995 『浜松5遺跡』
 ㈱北海道埋蔵文化財センター 1985 『湯の里遺跡群』 北埋調報18
 ㈱北海道埋蔵文化財センター 1986 a 『湯の里3遺跡』 北埋調報32
 ㈱北海道埋蔵文化財センター 1986 b 『木古内町建川1・新道4遺跡』 北埋調報33
 ㈱北海道埋蔵文化財センター 1986 c 『木古内町札司遺跡』 北埋調報34
 ㈱北海道埋蔵文化財センター 1987 a 『上磯町矢不来2遺跡』 北埋調報37
 ㈱北海道埋蔵文化財センター 1987 b 『木古内町建川2・新道4遺跡』 北埋調報43
 ㈱北海道埋蔵文化財センター 1988 『木古内町新道4遺跡』 北埋調報52
 ㈱北海道埋蔵文化財センター 1998 『上磯町茂別遺跡』 北埋調報121
 ㈱北海道埋蔵文化財センター 2004 『森町濁川左岸遺跡-A地区-』 北埋調報208
 ㈱北海道埋蔵文化財センター 2005 a 『北檜山町生潤2遺跡』 北埋調報214
 ㈱北海道埋蔵文化財センター 2005 b 『共和町リヤムナイ3遺跡(1)』 北埋調報218
 ㈱北海道埋蔵文化財センター 2006 a 『共和町リヤムナイ遺跡・リヤムナイ3遺跡(2)』 北埋調報227
 ㈱北海道埋蔵文化財センター 2006 b 『森町三次郎川右岸遺跡』 北埋調報233
 ㈱北海道埋蔵文化財センター 2006 c 『森町森川3遺跡(2)』 北埋調報234
 ㈱北海道埋蔵文化財センター 2007 『北斗市館野遺跡(1)』 北埋調報237
 ㈱北海道埋蔵文化財センター 2008 『千歳市梅川4遺跡(1)』 北埋調報253
 ㈱北海道埋蔵文化財センター 2010 a 『森町石倉1遺跡(2)』 北埋調報266
 ㈱北海道埋蔵文化財センター 2010 b 『千歳市梅川4遺跡(3)』 北埋調報269
 ㈱北海道埋蔵文化財センター 2011 a 『木古内町木古内2遺跡』 北埋調報278
 ㈱北海道埋蔵文化財センター 2011 b 『木古内町大平遺跡・大平4遺跡』 北埋調報280
 ㈱北海道埋蔵文化財センター 2012 『木古内町蛇内2遺跡』 北埋調報281

報告書抄録

ふりがな	はくとし とうべつがわさがんいせき							
書名	北州市 当別川左岸遺跡							
副書名	高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査発掘業務報告書							
巻次	なし							
シリーズ名	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター調査報告書（北埋調報）							
シリーズ番号	第310集							
編著者名	立川トマス・芝田直人・佐藤和雄・奥山さとみ							
編集機関	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 江別市西野幌685-1 TEL (011) 386-3231 FAX (011) 386-3238 E-mail mail_domaibun.or.jp ホームページ http www.domaibun.or.jp							
発行機関	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター							
発行年月日	平成26（西暦2014）年 月 日							
ふりがな 収録遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
当別川左岸遺跡	北州市当別 552-3～ 553-19	01360	B-06-24	I11杭		20110801 ～20110909	1,816㎡	高規格幹線 道路函館江 差自動車道 工事に伴う 発掘調査
				41度45分 33.89856秒	140度35分 00.97130秒			
				I35杭		20120801 ～20121031	2,442㎡	
				41度45分 36.05319秒	140度35分 03.97006秒			
I45杭								
41度45分 37.84870秒	140度35分 05.21959秒							
I55杭								
41度45分 37.84870秒	140度35分 06.46909秒							
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
当別川左岸遺跡	遺物包含地	縄文時代 中期前半～晩期中葉		竪穴住居跡4軒、土坑19基、 Tピット2基、焼土6か所、 剥片集中2か所		土器・石器		
要約		<p>当別川左岸遺跡の平成23・24年度調査の報告である。遺跡は、JR渡島当別駅から北東へ約2.5kmのところのところに位置する。茂辺地川と当別川に挟まれた海岸段丘上に立地している。調査区は北から南に緩やかに傾斜している。</p> <p>遺跡からは、縄文時代中期前半～後期前葉の遺構・遺物が検出されている。遺構は、竪穴住居跡4軒、土坑19基、Tピット2基、焼土6か所、剥片集中2か所が確認された。遺物は、円筒土器上層a・b式、サイベ沢Ⅷ式、見晴町式、大安在B式、涌元式、トリサキ式、ウサクマイC式などの土器23,625点、石鏃、石槍・ナイフ、スクレイパー、たたき石、すり石などの5,625点の石器等が出土している。</p>						

遺跡番号は北海道埋蔵文化財包蔵地周知資料登録番号、経緯度は世界測地系による。

(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第310集

北斗市

当別川左岸遺跡

—高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査業務報告書—

平成26(2014)年12月25日

編集・発行 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌685番地1
T E L (011) 386-3231
F A X (011) 386-3238
URL <http://www.dcmabun.or.jp>
E mail dcmabun.or.jp

印 刷 富士プリント株式会社
〒064-0916 札幌市中央区南16条西9丁目2番10号
T E L (011) 531-4711
F A X (011) 530-2549
